
東方漂流伝

ブラスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方漂流伝

【Nコード】

N3893N

【作者名】

ブラスト

【あらすじ】

『幻想郷』。それは妖怪や人間が共存するという架空の世界。しかし、その世界はその架空の物語の通りに存在していた。そんな世界に、その中にある森の中の人形だらけの家の前と、妖精がせわしなく動く紅い館の中に、現世からの迷い人がやってきた。

東方二次創作です。筆者はとんでもない素人＋東方知り始めて間もない為、誤字、矛盾、キャラ崩壊、その他諸々の可能性大です。そ

れでも見てくださる寛大な心の持ち主のみご覧ください。

プロローグ

「くあゝ……つと、やっと終わったあゝ……。」

教室の一角で、伸びをしながら机から身体を起こした男子がいた。

「やっと起きたかこのお寝坊野郎」

「いだあつ!?!」

その男子に思いつ切り拳骨を落とした男子は、既に帰り支度を終え、鞆を肩に掛けていた。

「つうゝ、んなことしなくても起きるって涼^{りやう}。」

「悪い、こうしないと気が収まらなくてな未奈斗^{みなと}。」

「ま、いつか。じゃ、また僕の家に来るんだろ?」

「ああ。早く行くぞ。」

「くそう、東方目当ての癖に……そろそろ買えよ。」

「金が無いんだ。」

「そんな理由!?!お前は霊夢か!?!」

軽く漫才の真似事をしながら帰り支度を終えた先程まで寝ていた男

子 日向 ひゅうが 未奈斗 みなとと拳骨を落とした男子 彩華 さいか 涼 りょうは並んで教室から出て、帰り道に着きはじめた。

「なんか、やな予感が……」

「以下同文だ……」

帰り道、やり始めて間もない東方Projectと言うゲームのキャラクターの話をしていた。

「にしても、毎回思うのがマリアリがどういう経緯で成り立つのか、だ。」

「僕あんまり興味無いんだけど……」

訂正。涼だけが話していて、未奈斗はどう攻略するかを考えていた。

「はあ。一回幻想郷に行ってみてーな。」

「僕も行ってみたいけど……って、あれ？」

未奈斗はふと視線を道に向けると、糸で繋がれた二つのリボンを二つ見付けた。

「リボン……？」

「思いつ切り不自然だな。四つも落としたら普通は気付くぜ。」

「そうだよな。ま、気にすることでも無いか。」

「そうだな。」

そういつてリボンを無視して進もうとした瞬間、未奈斗の足が何故か動かなくなつた。

「ん？何だ？」

次の瞬間、叫び声をあげる間もなく、未奈斗は地面に吸い込まれるように消えてしまった。

「なっ！？未奈斗！？」

そう叫んだ瞬間に、涼も未奈斗と同じように消えてしまった。

二人が先程までいた道に落ちていた二組のリボンも、二人と同じように消えていた。

森の中の人形館（前書き）

ここから、一人称になります。

未奈斗 side

森の中の人形館

音も無く、地面に吸い込まれるように消えて行った僕 日向 未
奈斗は、叫びながら空間の中を落ちていた。

「うわあああつ！目がいつぱいあつてキモいつ！後、いつまで落ちるんだあああつ！」

叫んでいるとはいえ、どんな状況下なのか分かるのは、冷静な証拠だろう。

「あ、光が見える……？もう少しなのか……？」

確かに、僕がいう通り、光が下から漏れだしているみたいだ。

「やっと終わった………って」

光から抜けると、僕の体は空に浮かんでいた。

………

そう。空に浮かんでいた。

「うぎやあああつ！」

僕の体は重力に従って落下し、運が悪かったのか、森の上だったらしく、枝をバキバキと折りながら落下し、地面に激突した。激痛と共に、僕は意識を手放した。

「　　っ、っう……」

呻き声を上げながら、僕は目を開いた。視界に真っ先に入っただのは見慣れない天井だった。

「どっ？ っう……」

そう言っていると、僕の右手に見えるドアが開き、金髪にカチューシャをつけた少女が入って来た。

「あら、ようやく起きたみたいね。」

「ぶはあっ！？」

出て来た少女の顔と服を見て、僕は吹いてしまった。まさか、ただど…………

「何よ。私の顔に何かついていたの？」

「ご、ゴメン。何でもないんだ。ここは君の家？」

「そうよ。ああ、名前、言って無かったわね。私はアリス・マーガトロイドよ。」

はい、予想的中。金髪にカチューシャってアリスさんしかいないよね。

「アリスさんね。僕は日向未奈斗。いきなりで悪いんだけど、何で僕はここに？」

「いきなり地響きがして家から出てみたら貴方が家の前に倒れていたのよ。」

「そうだったんだ……。ありがとう。助けてくれて。」

「ええ。それで、貴方は何で倒れていたの？」

「えーっと……。帰り道を歩いていたらいきなり地面に吸い込まれて気持ち悪い空間を通ってその空間が終わったと思ったら今度は空にいて落ちてきたんです。」

そう言うと、アリスさんは頭に手を当てて首を振った。

「またあのスキマね……」

……。スキマ？ちょっとまってよ……

「あの、アリスさん。スキマって……」

「ああ。その話をする前に、一つ、貴方に言っておかなければならない事があるのだけど……」

「何ですか？」

僕は既にその答えを予想できていたが、敢えて聞いてみる。すると、予想通りの答えが返ってきた。

「ここは貴方が住んでいた世界とは違う、『幻想郷』と言うところ。貴方は、世界を飛び越えて来たのよ。」

「……それで、僕がここにいるのは、八雲 紫って言う妖怪のせいなんですわね。」

「その通りよ。もしかしたら、元の世界に戻るかもしれないけど、交渉してみる？」

「いえ、幻想郷に残ります。」

あの後、幻想郷の知識と、アリスさんの事を話してもらい、今に至る訳だが、元々行きたかった場所に來れたのに、帰る気なんて起くる気もない。

「決断早いわね……大丈夫なの？」

「はい。元の世界でもそこまで楽しく無かったですし……」

「そう。なら、住む場所はどうするの？」

「あ……」

駄目だ、一切考えていなかった……

「少し家事を手伝ってくれるなら、ここに住んでもいいわよ？」

「本当ですか！？やります！」

「分かったわ。じゃあ、先ずはここで住んでいくのに必要な事をしなければね……」

「必要なこと？」

ある程度、分かってはいたのだが、間違っていたら困るので聞いておく。

「貴方は人間だから、まず護身用の武器、後、弾幕を出せるようになることと空を飛べるようになること、そして、能力を付けることの四つね。」

ほとんど予想通り。しかし、武器なんて物、必要なのか……？

「わかりました。でも、どれからすれば……？」

「まず、能力を見つけたらいいのじゃないかしら。瞑想していれば見つかるって言うしね。」

そう言われ、すぐに目を閉じて考える。すると、すぐに能力が見えてきた。それは……

「『身体であらゆる概念を破壊する程度の能力』？」

「また凄まじい能力ね……」

僕はこれを見つけるのに時間はかからなかったが、精神は色々と疲

れていたので、今日は休む事にした。

明日から、頑張ろう………

闇の中の紅き館（前書き）

涼
s
i
d
e

闇の中の紅き館

「ふむ……落ちているな。」

地面に吸い込まれた俺、涼はかなり冷静にこの気持ち悪い空間を見ていた。

「俺が分かる範囲内ならば……紫の仕業かコンチクショウ」

勿論、犯人も分かっている。しかし、分からないのが一つ。

「どこに繋がっているか、だな。紅魔館なら洒落にならねえぞ……」

そんな心配と共に、光が見えてきた。先程、紅魔館と考えていたからか、仄かに紅く見えた。

「いたあつ！」

……光に頭から突っ込み、かなり痛い。痛みを堪えながら辺りを見回すと、嫌な予感が当たった。

「……………紅い、な。」

どう考えても紅魔館です。ありがとございました。

「そして、目の前にある豪勢な扉……嫌な予感しかしないが、開けてみよう。」

そう言い、大きな扉を開けると、奥に椅子に座っている羽を生やした少女がいた。

「あら、人間如きがここまで来るのは珍しいわね。」

「どう考えてもレミリア・スカーレット嬢ですね。グッバイ、俺の人生」

「何で私の名前を知っているのかしら？ 後、取って食う事は敵意がないかぎりしないから落ち着きなさい。」

少年沈静中……………

「すまない、レミリア・スカーレット嬢。いきなりだったからパニツクしていた。」

「ええ、まず聞きたいのだけど、貴方の名前とどこから来たのかを言いなさい。」

「俺は彩華 涼だ。一応、今来ただかりの外来人だ。」

「外来人が何故私の名を知っているのかしら？」

「ああ、外の世界では有名だぜ？」

嘘はついてない。東方を知っている人は皆知っているはずだ。

「へえ……………なら、これからどうするのよ？」

「ここに泊めてくれないか？一応、家事は出来るから手伝おう。」

「……………条件があるわ。」

「……………条件とは？」

そういつて、レミリアを見ると、何故か臨戦体制に……………あれ？

「私の攻撃をある程度避けなさい！」

「何でそうなるんだあつ！」

レミリアはいきなり俺に向かって弾幕を放って来た。ひでえ。

「ちょ、いい加減にしろよ！」

「まだ始まったばかりよ？まあ、これを耐えたらいいわよ？」

「早くそれをやってくれ！……………つて、あ」

「良い度胸ね……………」

レミリアの右手に光が集まり、槍の形になってきている。ヤバイ、あれは……………

「ちょ、やっぱタンマ！」

「意味分らないことを言ってるんじゃないわよ？神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

そう言つて槍を投げて来た。気が付いた時には目の前に……………これ、死んだかな……………未奈斗、悪いな……………

そう思つた刹那、俺の頭に電流が走つた。

「終わった、わね……………」

私が投げたグングニルは、あの人間に当たると、砂煙を上げた。それから、音も無かつたため、終わったと思つた。

「なかなかやるかと思つただけどね……………」

そう言つたとき、あの人間の声が聞こえた。

「仕返した、弾槍『バレット・ザ・グングニル』ッ！」

砂煙の中から、小さいながらもグングニルが、連続で打ち出されてきた。

「なッ!？」

私は何とか全てのグングニルを避けると、砂煙の晴れた場所に、あの人間が倒れていたのを見た。

「…………ク、ククッ、アハハハハ！面白いじゃない！」

決めた。
あの人間は私の所に置く。
しみだ。これから、どう化けるのかが楽

闇の中の紅き館（後書き）

初めての後書きです。

とりあえず、口調間違いが多かったと思います。そのところは申し訳ありませんでした！

次は一応、未奈斗サイドに戻すつもりです。

森の中での買物（前書き）

未奈斗 side

森の中での買物

「ふぁ……………」

欠伸をしながら多分目を開けると、アリスさんの顔が僕の目の前にあった。

「うわっ!？」

「そんなに驚かなくても良いじゃない。朝食はあなたが起きるのが遅いから作っておいたわよ。」

「あ……………すいません。」

「別に良いわよ。後、敬語は出来るだけ止めてくれない？慣れてないのよね。後、呼び捨てでお願い。」

「わかりま……………わかったよ。」

「じゃ、朝食を食べましょうか。」

そう言うアリスさ……………アリスについて行き、朝食をとることにした。

少年食事中……………

「で、今日はまず、香霖堂って所に一緒に行くわよ。そこで未奈斗の護身用の武器を買っわよ。」

「あ、お金は……………」

「別に後々返してくれば良いわよ。もしかしたら、外の世界の物を売れば物凄い値段で返ってくるかも。」

「そっか。じゃあ、一応外で使ってた財布を持って行っておこうかな。」

「そうしてちょうだい。さ、行くわよ。」

少女少女移動中……………

「ここよ。ここが香霖堂よ。」

「……………ガラクタ屋敷?」

仕方ない、だってすこしぼろっちい小屋に色んなガラクタがあるんだから。でも、ちゃんと看板があるし、ちゃんとした店……………だと思いたい。うん。

「じゃあ、私は行くところがあるから、自分で入って自分で調べて自分買っておいて。」

「あ、うん。わかった。」

「じゃ、また来るから。」

そう言つてアリスは飛んで何処かに行つてしまった。な、なんて理不尽なんだ……

「悩んでいても仕方が無いな………」

僕はドアを開け、香霖堂へと踏み出した。

「おや、珍しいね。人間が一人で来るなんて。」

「アリスの案内で来れたんです。あ、僕は日向未奈斗つて言います。」

「ああ、あの人形使いね。僕は森近 霖之介。この香霖堂の店主さ。それで、今日は何を御所望だい？」

「えっと、護身用の武器を買おうと思つて………何がありますか？」

「うーん、特定は出来ないけど、外の世界の物はある程度あると思うよ。その辺りにいろいろあると思うから、決まったら教えてよ。」

霖之介さんは、乱雑な店の中で、更に乱雑になつてゐる部分を指差した。そこには、本当にいろいろな武器があつた。剣、弓、短刀、槍………しまいには外の世界でもゲームの中でしかないガンブレード………日本名にするなら銃剣が雑に重なつていた。

「うわぁ………なんだか、どれも捨て難いなぁ………」

「本当にそれだけ買うつもりかい？」

「外の世界のお金がこちらでいくらになるかによりますが。」

今、僕が買うと言った武器は、刀、二丁拳銃、槍、弓、ガンブレード、チャクラム、双短刀と、半端無い数の武器があった。多分、足りない……

「ふむ……じゃ、見せてくれるかい？」

「はい。これで……」

僕は一万円札を始め、いろいろな札、硬貨、そして昔の札まで出してみたら、霖之介さんの目が変わった。

「そ、それは……！」

「どうしたんですか？」

「僕が見たことがない……未奈斗君、これ一枚でその武器全てを売るよ。それほどの価値がある。後、ここでも一応は外の世界のお金は使えるよ。ただ、価値が高くなるから。」

「え、本当ですか！？」

「うん、大丈夫だよ。あと、鞆をつけられるベルト、銃と双短刀、チャクラムのホルスター、槍を背負う為の紐、矢が何故か無限に出

て来る矢筒もプレゼントするよ。」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

「まあ、まずは使えるようにならないとね。この近くにすこし開けた場所があるから、ちょっとやってみたらどうだい？僕も見てみたいしね。」

「そうですね。じゃあ、すこし案内をお願いします。」

「うん、じゃ、行こうか。」

少年青年移動中……………

「ここだよ。」

「たしかに、良い場所ですね。」

霖之介さんに連れてこられたのは本当に開かれた場所だった。

「さ、まずは刀かな……………」

そう言うと、刀の鞘に手を掛け、少し前傾姿勢になる。勿論、抜刀術の姿勢だ。

「シッ」

普通に振ったはずなのに、軽くソニックブームが起きました。何故に……………」

そして木の中のみ木っ端みじんに。もうどうにでもなれ……………」

あの後、全ての武器を試したけど、全てが達人レベルの疾さと威力が出た。僕的能力、本当は『全ての武器を扱える程度の能力』じゃないかなあ……………」

「ほう……………」凄いな。刀は流石に白玉楼の庭師には負けるけど、他の武器はどんな人、いや妖怪にも負けないはずだよ。」

「はあ。そうですか……………」

「……………」そうだ。もう少しである奴が来るんだが、そいつに模擬戦を頼んでみよう。」

「……………」はい？」

死亡フラグーっ！！

森の中での買物（後書き）

駄作になってしまいました。実はまだ何故こんなに未奈斗君が武器を扱えるか考えておりません（汗

次は一応未奈斗君 side です。

少女との遊び

弾幕VS格闘（前書き）

とりあえず、魔理沙が上手く書けなかった……魔理沙ファンの皆さん、すいませんでした！

未奈斗side

少女との遊び

弾幕VS格闘

「鬱だよ……………」

絶つつつ対、霖之助さんは霧雨魔理沙を連れて来る。小説、ゲーム、同人誌等を読み漁った事のある僕が言うから間違いない。確かに、霧雨ならば乗ってくれるとは思うが、僕が死ぬ可能性が出て来てしまう。

「はあ……………」

「あら、未奈斗、こんな所でどうしたの？」

「あ、アリス。いや、香霖堂で武器を買ったんだけど、霖之助さんが練習場所を提供してくれて、練習したら練習相手を連れて来ると言って……………」

いきなり出て来たアリスに驚くことなく、今あった事を話した。すると、アリスが話し出した。

「あら、ちょうど弾幕と飛行方法を教えてあげようと思っていたのよ。今、やり方を言うから覚えて。」

「え、あ、うん。」

少年勉強中……

「分かった？」

「うん、一応は……じゃあ、スペルカードはどうしたら？」

「この白い札に念じれば完成するわ。」

「分かったよ。ありがとう。」

「いいわよ。……さ、未奈斗。実践の時間みたいよ。」

アリスがそう言って顔をある方向に向け、僕もその方向を見ると、霖之助さんの横に、黒と白の服をきた少女が歩いてきていた。

「お前が日向未奈斗か？」

「うん、そつだよ。」

「私は霧雨魔理沙だ。よろしくな。」

「うん。よろしく。」

「さ、始めるか？」

「でも、ただの模擬戦みたいにするだけだからね。」

「大丈夫だぜ。殺しはしないぜ。」

「うん、じゃあ行くよ？」

僕はそう言ってまず一番使いにくかった、ガンブレードを手に持った。

「興味深い武器だぜ……………」

「盗まないでね？」

「そいつは出来ない相談だぜ。」

そう言い、箒に乗って突撃してきた。

「魔符『スターダストレヴァリエ』ッ！」

「いきなりスペカアア！？なら、こっちも！」

突撃してきた魔理沙を迎え撃つようにスペカを考え、創り、僕は宣言した。

「遊符『フェイテッドサークル』！」

僕はガンブレードを一回転させ、回りに赤い弾幕をばらまいた。

「おおっと、それをどうするんだぜ？」

「こうするんだ……よっ！」

ガンブレードのトリガーを引くと、赤い弾幕が一つ一つ飛び出していった。

「そんなもの当たらないぜ！」

「それはどうかな？くらえっ！」

もう一度、トリガーを引く。すると弾幕が全て小規模の爆発を起こし、魔理沙の筈に掠らせた。

「やるじゃないか。でも、私のスペルカードを忘れてるみたいだぜ？」

「あ……………」

僕の目の前には大量の星型弾幕と魔理沙がいた。

「大丈夫か？」

「多分、生きてるわね。」

「?」
「……………」

僕は気絶していました。

少女との遊び

弾幕VS格闘（後書き）

未「今回から後書きに僕が涼が登場します。」

作「今回はとりあえずバトル描写下手くそで申し訳ありませんでした。」

未「僕も負けてるし……一体いつ能力を使うのさ……」

作「未定！」

未「じゃあここで使ってやる！『存在』を破壊するーっ！」

作「ぎゃあああ」ピチューン

未「さて、それでは引き続きをお楽しみください。」

紅い館で就職活動（前書き）

前話は霖之助の漢字を間違えたり、もろF〇の主人公の技パクったりしてすいませんでした。

今回も、また酷い状態になっています（泣）

涼side

紅い館で就職活動

「……………ん」

俺が目を開けると、そこには紅い天井が映っていた。勿論、紅魔館だ。にしても……………俺はレミリアに戦いを吹っかけられて、で、グングニル撃たれて……………

「そういえば、能力が発現したな。確か……………」

声に出そうとした瞬間、ドアが開いて見たことのあるメイドが入って来た。

「咲夜さんキタアアアツ！」

「あら、起きていらっしやいましたか。」

頼む、クールに返さないでくれ。俺がイタイ。精神的に。

「あ、はい。先ほど、ですけど。」

「そうですか。お嬢様が目を覚ましたらお連れしろとの事ですので、ついて来てもらって構わないですか？」

「了解です。」

「では、こちらです。」

そう言つて俺と咲夜さんは部屋をでた。あれ？なんかベッドが凄く豪華……………？

少年移動中……………

「お嬢様ー？只今人間が目覚めましたのでお連れしました。」

「わかったわ。入って。」

「失礼します。どうぞ。」

「ああ、有難う。」

咲夜さんが慣れた手つきでドアを開き、俺を入れてくれた。中にいたレミリアは、最初に見た時と同じく、大きな椅子に腰掛けていた。

「なかなか目を覚ますのが早かったわね？」

「いや、俺は知りませんから……………」

「まあ、そのことはどうでもいいの。一つ、頼みがあるのだけど……………」

「内容によります。死ねとか言われたら即刻逃げますよ？」

「そんなことは言わないわ。涼、ここで執事として働いてみない？」

「……………へ？」

今、この方は何とおっしゃった？

「だから、執事になって欲しいの。どうかしら。住居、食事は保障するわよ？」

「勿論やります。寧ろやらせてください。」

何と言う好条件。プラス紅魔館での危険性がガクツとさがる。そして東方キャラと仲良くなれる。断る理由など皆無だ。

「そう。じゃあ、まず涼の能力を教えて頂戴。」

「分かりました。俺の能力は『一度見たものをある程度模倣し、更に工夫して扱える程度の能力』です。良い例が俺が最後に撃ったあれですね。」

「なるほど。それはやられるわね。仕方ないわ。」

「お嬢様、人間……………涼様は最後に何を……………」

「咲夜、もう涼は同僚なんだから様はいらないわよ。そうね、あるうことか、最後の最後に私のグングニルをどうやってか防いで小さくなったグングニルを何本も投げてきたのよ。」

「ええ！？まあ、能力からしたら当たり前ですね……………」

「因みに、既に咲夜さんの時間停止の劣化版も使えるぞ？」

「いつの間に……………」

「さて、涼。その強力な能力があっても、弾幕を撃てるまではまだ弱いわ。だから、一応護身用に武器を渡しておくわ。」

そう言っただけでレミリアお嬢様（一応もう執事だしな）が渡してきたのはいっちゃんわるいが普通っぽい剣。

「レミリアお嬢様、これは……………」

「それは私が250年位前に使っていた剣で、たしか……………フラタニティ、だったかしら？」

……………どこのF〇だよ、おい……………

「有り難く使わせていただきます。」

「ええ。それじゃあ、咲夜、涼を執事服に着替えさせて、館の案内をしてあげて。あと、涼。お願いだからその長い呼び方は止めて。」

「了解しました。」

「分かりました、レミリア様。」

そう言っただけで辞儀をし、咲夜さんと部屋をでた。さあ、これから楽しい日々が始まるな……………

紅い館で就職活動（後書き）

涼「さあ、俺の能力がわかったな。」

作「まあ、簡単にいえばチート。まあ、劣化するだけマシ。」

涼「それでも強いけどな。さあ、次は紅魔館の案内だ。」

作「感想、指摘等お待ちしております。批判以外なら来たら泣いて喜びます。」

紅い館の妹君（前書き）

今回は初めて妹様が登場します。キャラ崩壊の可能性があります（泣）

涼
s
i
d
e

紅い館の妹君

「はい、これで大体は分かったわね？」

やっと殆どの部屋をまわり、さつきまで俺が寝ていた部屋の前まで来た。

「はい。あれ、でもまだパチュリー様やフランドール様に会っていませんよね？」

「よく知ってるわね……」

「外で有名ですから。特にフランドール様は……」

「ど、どうしたの？いきなり涙を流して！？」

俺、かなり苦戦したんだよね……何週間も掛かって、何回もやる気を無くして……

「なんでも無いです……。お二方共、地下にいらっしやいますよね？」

「あー、そういえば最近、妹様は地下から部屋が地上に移ったのよ。もう地下にいない必要が無くなったの。」

「へえ。それじゃ、まずはフランドール様の場所に行きましょう。」

「わかったわ。ついて来て。」

少女案内中……

「着いたわ。ここよ。」

「……またファンシーなドア……」

連れられて来たのはとてもファンシーな装飾がされた扉の前。ここがフランドール様の部屋らしい。

「妹様？今日からここに仕える事になった人間を連れてきました。」

「うん、入っていいよー。」

「失礼します。ほら、涼。」

「失礼します。」

俺の目の前にはベッドの上に座っているフランドール様が。

「貴方が仕える事になった人間？」

「はい。彩華涼と申します。」

「へえ。フランドール・スカーレットだよ。よろしくね。あと、フランドール様よ。」

「了解しました、フラン様。」

「あ、涼ー。一つお願いがあるんだけど……………」

「何でしょうか?」

「フランとちょっと遊ばない?」

「はい?」

「じゃ、はじめるよ!」

「お手柔らかにお願いしますよ……………」

「なんですか、フラン様に弾幕ごっこ……………いや、手合わせをすることに。多分、俺の能力目的だろ……………」

「それでは、このコインが落ちたら始めます。」

「そっ、いい、咲夜さんがコインを弾き、空に舞っているとき、フラン様から声が掛かった。」

「あ、ある程度本気を出してね？」

コインが地面に落ちた。

「禁忌『クランベリートラップ』！」

「いきなりかあっ！」

手合わせが始まった。

「へえ〜。中々やるね！」

「お褒めにいただき光栄です……………っ！」

魔法陣からの弾幕を一方的に受け続けているが、一応はEXシューター。全てグレイズしている。そして、魔法陣が消え去った。

「くそ……………」

「次はこっちですよ……………！」

そういつて始まる前に咲夜さんがくれた白紙のスペカに念を送る。

「行きますよ！禁忌『スリーオブアカインド』。」

そういつと俺は三人に分裂した。勿論、能力を使用して、外で見た禁忌『フォーオブアカインド』をコピーしたものだ。しかし、弾幕を俺は撃てない。だからまだある白紙のスペカに剣を使ったスペカを作り、放った。

「まだまだ！気砲『フォースレイン』！」

剣にスペカに使った念を送り、剣に光を貯め、そして、

「放てえっ！」

三人の俺が一気に光の弾の弾幕もどきを放った。勿論、この技は某RPGのパクリだ。

「ふんふん………まだまだ甘いよ？」

「へっ！？」

放った瞬間、フラン様の声が俺の真後ろから聞こえた。

「はい、フランの勝ち！」

その言葉とともに、弱い弾が俺の背中に当たった。

紅い館の妹君（後書き）

涼「ああ……………疲れた。」

作「またパクリ使ってすいません……………」

涼「ま、ある程度は仕方ないだろ。」

作「皆さん、嫌ならば嫌とコメントを……………ここから自重します。」

涼「そういえば俺のスペカは決まっているみたいだな？」

作「一応、未奈斗君と涼のスペカは殆ど決まってます。」

涼「みたいだな。じゃ、また次話でー。」

目が覚めると人形館（前書き）

この章を簡潔に言いますと、デレます。はい。ファンの方々、申し訳ありません。

未奈斗 side

目が覚めると人形館

「……………んあ……………」

僕が目を覚ますと、アリスの家の天井が見えた。

「あ、起きたわね。」

「アリス、運んでくれたの？」

「正確には人形が、だけどね。さて、未奈斗。あれだけの武器を買って、一体いくら使ったのかしら？」

何故か笑っているはずなのに目が笑っていないアリスが問い掛けてきた。めちゃくちゃ怖い……………！

「霖之助さんが安く売ってくれたんだよ。それに、まだこれだけお金があるよ。」

そう言つて、外のお金を見せる。アリスは驚いた表情で納得してくれた。

「まあ、これからお世話になるんだし……………改めてよろしくね、アリス。」

そう笑いながら言っておいた。

「え、ええ。こちらこそよろしく。」

あれ？アリス、なんでか顔が赤いよ……………？

アリス side

「これからお世話になるんだし……………改めてよろしくね、アリス。」

その時に未奈斗が見せた笑顔は、私にとって殺人…………いや、殺妖級の威力だった。何とか理性を保ち、顔が赤くなっているのを感じながら、返事をした。

「え、ええ。こちらこそよろしく。」

……………べ、別に好きになんかなっては無いわ……………多分。うん。

さて、月日は経ち、僕がここに居候してから三ヶ月がたった。今、外では何かおかしい事になっているらしい。

「へ？赤い霧が広い範囲で発生してる？」

「ええ。けど、ここに何の影響も無いし、動くつもりは無いわ。」

「……………これって……………紅霧異変じゃ……………」

「？何か言った？」

「うっん、別に？早く食べよう！」

因みに、朝食中でした。さて、そろそろ訓練に入ろうか。

「あ、未奈斗。ちょっと久しぶりに一緒にやらない？」

「うん、じゃあ、行こうか。」

因みに、この三ヶ月間で、僕とアリスの距離は縮まった。ちょっとした親友になっている。

「さ、行くわよ。」

「うん。」

少年少女移動中……………

「さ、行くわよ!」

「ふう……………今日は、これで行こうか。」

そういつて、僕はチャクラムを取り出し、手首でクルクルと回した。

「行きなさい!」

アリスの人形達が槍や剣をもって突撃して来た。それに向かって僕はチャクラムを投げつけた。

「つけええ!」

「その手にはもう乗らないわよ!」

「そうだよね……………じゃ、これはどうかな?」

人形達に投げつけたチャクラムを強制的に戻し、弾幕の応用で、チャクラムの数を二個増やす。

「行くよ、新スペルカード！遊符『エンジェル・フェザー』！」

僕の背中から羽が生え、まるで天使のようになると同時に、四個のチャクラムが人形目掛けて貫こうと空中を走った。

「やるわね……。さあ、こちらからも行くわよ！」

「ふう……………疲れたなあ……………」

「いつの間に新しいスペルカードを作ったのよ……………」

「今、確か……………六つ位かな？」

「ふうん……………多いわね……………」

「まだ武器に頼った物しかないから……………もうちょっとで、僕のオリジナルを作ろうと思う。」

「その時には手伝うわよ。……………未奈斗じゃなきゃ手伝って無いけど……………」

「ん？何か言った？」

「な、何も言つて無いわよ!」

「そう?ならいいんだけど.....」

あれ?またアリスの顔が赤く.....?

目が覚めると人形館（後書き）

未「で、デレってなんなの？」

作「黙れこの朴念仁」

未「そ・れ・よ・り・も……………僕的能力は……………」？」

作「二人の再開時……………かな？」

未「遅いよ！」

作「まあ、一応、今の時期が紅魔郷だし、次は涼君です。」

未「こんな駄目作者の小説をよんで下さってありがとうございます。
今後からもよろしく願います。」

紅霧異変前日

動き出す紅き月（前書き）

この話では、ある方がブレイクします。ご注意ください。

涼
s
i
d
e

紅霧異変前日　動き出す紅き月

俺が紅魔館の執事になって二週間。何時ものように、館内の見回りをしていると、後ろから声がかかった。

「やっと見つけたわ、涼。」

「あ、咲夜さん。どうしました？」

「じつは、お嬢様が皆を集めているの。後は貴方だけだから、来て。」

「了解しました。」

少女少女（？）移動中……………

「全員、揃ったわね？」

そう言いながら、レミリア様は俺達を見回した。俺達と言うのは、俺、咲夜さん、パチュリー様、中国……違う、美鈴、そしてフラン様だ。

「ところでレミィ。今度は何をやらかそうとしているの？」

呆れたような顔で言ったのはパチュリー様。初めて会った時は何故か本の山に埋もれていた。

「あら、パチエ。そんな言い方をしたらつい最近きた涼が疑うじゃない。」

「事実でしょう……まあ良いわ。面白いし。」

「なら良いじゃない。今回は、ちょっとした異変を起こそう、と思っ
てね。」

その言葉を聞いた時、俺の体がぴくりと動いた。

「あら、涼。どうしたのかしら？」

「いえ、俺が外にいたところにも、何だか同じような事が
ありましたから……」

「そう。ならいいわ。」

このフラグ、まさか……いや、フラン様が地上にいるから、原作が破壊されていない限り……

「私がやろうと思ったのは、この幻想郷に、紅い霧を発生させよう
と思ったの。理由は、昼間に私が外出したかったからとでもいいえ
ばいいでしょう？」

原作、破壊されました……紅霧異変かよ……

「で、俺はどうしてれば？」

美鈴は何時もの通り門番を。パチユリー様は大図書館で待機、咲夜さんは徘徊するだけ（嫌、本当は違うんだけど……………）、フラン様は少しだけ前の地下室に戻ってもらうことに（レミリア様曰く、面白く無くなるから）。ここまで来ると、俺の場所が……………

「貴方には、美鈴が突破された時の保険よ。まあ、美鈴がやられるとは思わないけれど……………」

レミリア様、多分突破されます。そして俺も。

「了解しました。では、そろそろ弾幕の練習がありますので……………」

「わかったわ。じゃ、皆、解散。私は紅い霧を発生させるわ。」

そういつて、皆がバラバラに出ていった。

「さあ、俺にとって初めての異変。楽しませてくれよ！……………あ、そういえば……………未奈斗、大丈夫かなあ……………」

「涼、その未奈斗とかいう人間、どういう奴なの？」

「レミリア様！？何時の間に居たんですかっ！？」

「良いじゃない。さ、話さない？」

「はあ…………まず、幻想入りしたのは確かだと思いますけど、あいつは縛られるのが嫌いなんで…………あわよくば、なんてやめてくたさいね？」

「ええ、約束するわ。」

そう上を見ながらいつてくるレミリア様…………

「…………やべえ、やっぱり可愛いです……………」

「……………！！！？／／／」

カリスマブレイク…………レミリア様はこうでなきや。

涼「やっちまったな。」

作「いや、紅魔郷以前なのに、フランを出してしまってた結果がこれだ。」

涼「阿呆。そっちじゃねえ。」

作「俺の中でレミリアはあれなんだ。うー」

涼「よし、逝って来い。」

作「あ、弾幕すげえやああー！」ピチューン

涼「では、次の話では紅魔郷に入ります。こんな駄作者の小説を見てくださいありがとうございます。」

紅霧異変

関係ない森（前書き）

本当に関係が無いです。

未奈斗 side

紅霧異変

関係ない森

「あー、紅霧異変かぁ……………」

そう言いながら、僕はアリスの家のリビングで、アリスとティータイムをしている。アリスには、外の世界で、この世界があったことを話している。

「未奈斗の世界では、これが最初の異変だったんでしょ？」

「うん。確か首謀者はレミリア・スカーレット。紅魔館の主だったはず。」

「また面倒な奴ね……………私は会ったことは無いけど、変な噂しか聞かないわよ？」

「例えば？」

「何やら、メイドをペットとして扱ってるとか……………」

……………何やつてるんだろ、咲夜さん……………そう思いながら、顔をしかめて言った。

「……………信じたくないなぁ……………」

「ええ。全くよ。……………それにしても暇ねえ。」

「うん。外に出たら出たで気だるさが来るし……………あ、アリス。こ

「の家に楽器ない？」

「一応、あるにはあるけど……未奈斗、弾けるの？」

「鍵盤ならね。」

少女搜索中……

「あつたわ。」

「これは……キーボード、かな？」

「ちょっと前に幽霊の三人組がいて、その赤い幽霊に譲ってもらったの。弾けなかったけれどね。」

「プリズムリバー三姉妹か……」

僕は心の中で、まだ春雪異変って起こってないよね……？と呟いた。

「さ、何を弾いてくれるの？」

「うーん……そうだ。外でのアリスのテーマソングを弾こう。」

「そんながあるのね……」

そうやって弾き始めたのは、人形裁判の歌バージョン、少女人形だ。

「あら、なかなか上手じゃない。」

「ありがとう。ま、この曲は結構練習してたからね。」

弾きながら、僕は言葉を返した。

少年演奏中……

「どうだった？」

「とてもよかったわよ。」

「よかったあ……」

そう言って胸を撫で下ろすと、ドアが破壊される音が聞こえた。

「アリス、邪魔するぜ！」

「なら帰りなさい。」

勿論、破壊してきたのは魔理沙。これで（僕の記憶上）累計三十二回目だ。魔理沙だとわかったアリスは、すぐに人形達で攻撃を開始した。

「おっと！今日は借りにきたんじゃないんだぜ？」

「それなら何よ？」

「この紅い霧をどうにかさ」断るわ。「最後までいわせてくれよ……でもなんでなんだ？」

「あんたは単細胞だから分からないだろうけど、この霧、ちょっとずつ妖力とかを吸ってるのよ。だから私は無理。未奈斗もダウン。」

「しかたねえな。なら私一人で行ってくるぜ！」

そういつて今にも飛び出しそうな魔理沙に僕は言い放った。

「湖に向かって行けばなんとかかなると思うよ！」

「情報提供感謝だぜ！」

そして、嵐のように去っていった。

「……………はあ、直しますね。」

「お願い。全く。魔理沙は……………」

僕は目を閉じて、イメージを膨らませる。僕的能力、『身体によって概念を破壊する程度の能力』を発動させた。

「…………『壊れている』という概念を破壊。」

そう宣言して扉の残骸を蹴る。すると、バラバラになっていた破片全てがもとの扉の形になり、もとの場所に戻った。

「本当、その能力は強力ね。」

「自分に関係するか、無機物にしか反応しませんけどね……………」

勝手がいいのか悪いのか……………僕だけでは分からない。

「……………そういや、元気かな……………」

「涼って子？多分大丈夫よ。……………紅魔館に落とされてなければ。」

「……………そう願っておくよ。」

そうして、紅霧異変に関係を持つことなく、僕とアリスは過ごすことになる。

未「ま、始まって解決に向かう寸前ってとこだね。」

作「そういうこと。一応、次は涼君のお話。この中では弾幕ごっこは完全に格闘ゲームのようになっております。そこをご注意下さい。」

未「そういえば、能力出したね。」

作「一瞬で思い付いたから実行した。ま、マシなはず。」

未「そうだね。さ、じゃあ次の話もお楽しみに。」

作「お気に入り登録してもらえれば感無量です。泣いて喜びます。」

紅霧異変

紅魔館の二重門番（前書き）

アクション系弾幕ごっこの開催です。

涼side

「さあ、もう霊夢がそこに来てるな。」

いきなりなこの展開。ずーっと庭をうろろしていたら、いきなり爆音が聞こえた。いや、来るとは思ってたけどこんなに速かったっけ？ルーミア、チルノはどうした？

「印！」

何か聞こえた後に、美鈴の悲鳴が聞こえた。多分、夢想封印でやられたんだろう。

その声が聞こえると、俺はレミリア様からもらった剣を構え、どこぞの庭師と同じような雰囲気纏う。

「さあ、来いよ。」

そう呟いた瞬間、門がド派手に破壊され、予想通り、博麗霊夢がずかずかと入って来た。

「誰よアンタ。私は忙しいからちよつとどいて。」

「生憎、その用事の邪魔が仕事なんでな。その願いは聞き入れられないな。」

「はあ、なんでこんなに武闘派の奴がいるのよ……………」

「ま、ある程度邪魔してやるぜ、博麗霊夢？」

「何でアンタが私の名前を知ってるのか知らないけど……邪魔するなら力付くよ。」

その瞬間、霊夢の後ろに大量の札が展開された。

「追尾機能付きか？ま、俺の弾幕も楽しんで行けよ。」

俺も霊夢に負けじと弾幕を展開させる。その形は札のものやナイフのもの。そして独自の剣の形をした弾幕だ。

「さっさと終わらせるわよ。霊符『夢想封印』」

「甘いな、こつちからも行くぜ？火符『アグニブライト』！」

霊夢からは特大の追尾弾、俺からはパチュリー様のスペカを模倣したものが放たれ、その二つは二人の中間点で衝突し、爆ぜた。

そして次の瞬間、通常弾幕での応酬が始まった。俺は剣を振ってそこから弾幕を発射し、霊夢は札をそのまま投げってくる。俺はいつ陰陽玉をやられるか心配しながら、剣を降り続けた。

「アンタ中々やるじゃない。本気の私にここまでついて来られるなんて。」

「そいつは光栄だな。だが、嘘は付くなよ？」

俺がそう言つと、霊夢ははあ、と溜め息をついて言った。

「何でもお見通しな訳ね……なら、終わらせるわよ。」

そう言つて霊夢はスペカを取り出そうとした。
それを阻止しようと、俺が先にスペカを発動させた。

「お先に失礼、だぜ！終幕『テラーオブレッドキャッスル』！」

そう言つた直後、俺は何回も剣を霊夢に向けて振り回し、大量の弾幕をばらまいた。

「くっ…………邪魔ね……………」

「…………さあ、終幕だ！」

「なっ！？」

目の前の弾幕に気を取られ、上に飛び上がった俺を霊夢は見失い、見つけた頃にはもう遅かった。

「ぶっ飛びな！」

俺は空中で作つた超特大の弾幕を霊夢に向けて蹴り飛ばした。

「だから甘いだよ。」

そう言つて霊夢は二つのスペカを取り出した。

「夢符『二重結界』。」

「なっ！？それは……………！？」

二重結界により、俺の放つた最後の弾幕は防がれ、最後のスペカと

思われるものを発動された。

「終わりよ。宝具『陰陽鬼神玉』。」

俺は放たれた特大の陰陽玉に吹き飛ばされ、壁にぶつかって意識を失った。

紅霧異変

紅魔館の二重門番（後書き）

涼「あー、負けた。」

作「そりゃ、いくら何でもストーリーを完全に止める訳にもいかんしねえ。」

涼「つか、なんで紅魔郷なのに二重結界と陰陽鬼神玉使ってんの？妖々夢とすいむそう（漢字忘れ）でしょ？」

作「これくらいは許されるかと。ま、大丈夫でしょう。」

涼「ま、いいか………それでは、また次の話で。」

作「お気に入り登録して下さった皆様、本当にありがとうございました。これからも精進して参りたいとおもいます。」

紅霧異変

解決後のお話（前書き）

昨日、友達から初めて東方を借り、プレイしたらある方に泣かされました。

この話では、その方がちらりと登場します。

涼
s
i
d
e

「き……な……り……」

未だ朦朧とする意識の中で、俺は誰かの声を聞いた。

「……なさ……りよ……」

にしても、どうなったんだ？原作通りになったのか……………？

「起きなさい、涼！」

「はっ……………！」

はっきりとした声が聞こえ、目を開けると、レミリア様が腕をくんで立っていた。

「あ、レミリア様……………」

「やっと起きたわね。」

「すみません……………あ、そういえば！」

「あー、言いたい事は分かったわ。結論から言うと、私は負けたわ。」

「そうですか……………」

「でも、貴方、あの腋巫女に善戦したそうじゃない？」

「したかどうかはわかりませんが……………」

「そこで、貴方を”紅魔館の執事”から、位を上げようと思っわ。」

「……………え？」

「涼、貴方は今から、フランの専属執事よ。」

「……………はい！」

俺は咲夜さんと同じ位を手に入れた！

少年移動中……………

「とても嬉しそうね、涼。」

「そりゃ嬉しいですよ。何てったってフラン様の執事ですよ。」

「そうね。……………実は、お嬢様は言わなかったと思うけど、妹様が一番懐いているのが、涼なのよ。」

「へっ？」

「ほら、私たちって、妹様に少しばかり畏怖の念を抱いているのよ。でも、涼は違った。一主人として、そして友人として接してるのよ。貴方は自覚してないかも知れないけどね。」

そうだったのか……俺は本当に自覚してなかったけれどな。そう咲夜さんに言われた時、フラン様の部屋の前に着いた。

「じゃ、涼。頑張ってるね。」

「ありがとうございます。」

咲夜さんはそう言って消え、俺はドアをノックして入室の許可を取った。

霊夢 side

私はあのチビ吸血鬼をボコボコにした後、博麗神社に戻ろうとしていた。

「にしても……主人の次に強いのが只の執事なんて……」

そう、あの吸血鬼の次に強かったのがあの執事だったのだ。実際、あの執事を倒した後、私はこの先にいる主人とまだいるであろう従者の強さを思うと、背筋が凍る思いだったのだ。

「あ、そういえば……………あの氷精、あの執事と同レベルだったわね。あの氷精、今度神社に招こうかしら……………」

そう呟いて、私は神社へと飛んでいった。

涼side

「フラン様ー？」

俺はフラン様の部屋（地上）に入っただが、肝心のフラン様が見当たらない。

「フラン様ー、いらっしやらないんですかー？」

「ここにいるよー！」

と、床の下からフラン様の声が聞こえた。

「へ？」

「あ、涼は見えないんだった。ちょっと待って！」

そう聞こえた後、フラン様のベッドの下から、ガコン、という音がして、フラン様がベッドの下から出てきた。

「フラン様、どこに居たんですか？」

「えっと、ベッドの下に通路を作って地下の部屋と繋げたの。そこにいたんだよ！」

「そうなんですか……あ、ちょっとフラン様に報告したい事があったんですよ。」

「そうなの？ なになに？」

可愛く首を傾げながらフラン様が聞いてきた。一瞬悶えそうになったが、何とか持ち直して話し出す。

「今日から、俺、彩華涼は、フラン様の専属執事をやらせていただくことになりました。フラン様、今後から改めてよろしく願います。」

「ホントに！？ やったあ！ 涼、よろしくね！」

フラン様がみせたこの笑顔は、俺の見てきた笑顔の中で一番のものだった。

紅霧異変

解決後のお話（後書き）

涼「二連続で俺か。何だか俺が第一主人公みたいになってないか？」

作「大丈夫。次の異変は未奈斗が主役だ。そして……あ、こっからはネタバレだわ。」

涼「おいおい……」

作「さて、日常編に戻りますか。引き続き、感想、指摘、お気に入り登録をお待ちしています。」

涼「それでは、また次の話で。」

人里にご挨拶！

魔法の森からこんにちは

（前書き）

捏造がございます。ご注意ください。

未奈斗 side

人里にご挨拶！

魔法の森からこんにちは

「はぁ……………なんでこうなったかなぁ……………」

僕は今、魔法の森から人里方面（教えられた通りなら）に向かって飛んでいた。いつもなら、アリスが着いていくと言って一緒にのだが……………

「ま、仕方ないか。さっさと挨拶を終わらせよう。」

何故僕が人里へ行くことになったのか。それは、数刻前に遡る。

「へっ？人里に？」

「そろそろ未奈斗も幻想郷になれてきたと思ったから、人里位知っておかなきゃダメだって思ったからよ。」

「たしかに……………じゃ、行こうか。」

そういつて、僕がアリスの方を向くと、アリスは申し訳なさそうに、

「ごめんなさい。今日は約束があるから、そっちに行かなければな

らないのよ。」

「わかった。それじゃ。」

そういつて僕はドアから出、飛び出そうとした。

「未奈斗、どこにあるか分かってるの？そっちから丸つきり反対方向よ？」

……………穴があつたら入りたい……………

「はあ、まあいいか……………もう、出口の光も見えてきたし……………」

そして、僕は光へと飛び込むと、そこには村への入口があった。

「ここか……………こっからは歩いて行くか。」

僕は飛ぶのを止め、歩き始めた。

「……………なんだか凄く活気づいているんだな……………」

僕は大通り（であろう場所）を歩きながら、そう呟いた。すると、後ろから声が僕に向かって放たれた。

「そうだろう？この幻想郷にはこれ程活気づいた場所は他には無いと私は思うな。」

その声に振り向くと、人里を語るには欠かせない人（妖？）物が立っていた。

「上白沢 慧音……………」

「私が君を知らなくて、君が私を知っているのはどういう事だ？君は一応、人間のようだが……………」

「ああ、すいません。僕は、この幻想郷とは違う世界からやって来たんです。そこで、慧音さんがよく知られてるんですよ。申し遅れてすいません。僕は日向未奈斗と申します。今は、とある魔法使いの家に居候させてもらっています。」

「ほう。そうだったのか。わかった。覚えておこう、未奈斗。ところで、その居候させてもらっている家の魔法使いの名前は、霧雨魔理沙と言う名前か？」

「いえ、アリス・マーガトロイドさんです。魔理沙と慧音さんは何かご関係が？」

そう言うと、慧音さんは少し落ち込んだように肩を落とし、話して

くれた。

「いや、私の教え子に魔法使いになった子がいてな。その子は魔法使いになったからという理由で勘当されて、一人で住むようになったんだ。その子の名前が、霧雨魔理沙なんだ。」

「そうだったんですか……………」

そう思うと、何故魔理沙があんな性格になったのか理解に苦しむ。

「まあ、ちょっと懐かしかっただけさ。そうだ。幻想郷に来て初めてここに来たなら、君に会った方が良い人があるんだ。ちょっと着いてきてくれ。」

「あ、はい。」

そう言われ、慧音さんの後を、僕は歩いていった。あれ？なんだか、殺気が……………

少年先生移動中……………

歩き始めてから十数分。ようやく慧音さんの足が止まった。

「着いたぞ。ここが、君に言った行くべき場所、稗田家だ。」

指を指しながら言ったその先には、とても大きい屋敷があった。

「え、稗田家って………幻想郷縁起の著者の………」

「よく知っているな。その通りだ。さ、中に入るうか。」

そう言いながら、大きい屋敷の中に入って行った。いや、そんな普通に入らないで………

人里にご挨拶！

魔法の森からこんにちは

（後書き）

未「あ、ここで終わり？」

作「やばい、なんかグダグダ……………」

未「多分大丈夫……………のはず。」

作「ちなみに、何故あの家に行かせたのかは……………また今度明らかになります。」

未「では、また次の話で。」

作「次は涼の人里訪問です。感想、指摘、お気に入り登録をお待ちしています。てか指摘はどしどししてください。そうじゃないところの小説がどんどん腐敗していきます（泣）」

人里へご挨拶！ どう見ても執事なお使い (前書き)

取りあえずやってしまった。何の特徴もない話はここ限りにしたい。

涼
s
i
d
e

人里へご挨拶！ どう見ても執事なお使い

「はい？フラン様を連れて？」

「そうよ。頼めるかしら？」

「いや、俺は良いんですが、フラン様が……………」

「貴方から言ってくれない？駄目だったら一人である場所へ言っ
貰うから。」

「はぁ……………」

俺はレミリア様に呼び出され、フラン様と二人で人里に行つて来い
という事を言われたのだが……………それって、夜に行けつて事です
よね？

「ま、何とかなるでしょ。ちなみに、行ってきて欲しいのは、稗田
の者の場所……………と言えば分かるかしら？」

「え、まさか幻想郷縁起の著者に会つてこいと？」

「そういうこと。さ、フランに話しにいきなさい。そして今日中に
行くこと。分かったわね？」

「了解しました。では、失礼します。」

そう言つて、俺はレミリア様の部屋から出て、フラン様の部屋へ行

こうと廊下に出た瞬間、

「涼、話は聞いてたよ！さ、行こう！」

「え、あ、はいいいい！？」

フラン様に引つ張られ、人里へと向かった。

少女少女（？） 移動中……………

「見えてきたー！」

「あ、ちよつ、フラン様ああ！！いきなりスピード落とさないで下さいいいい！！！」

フラン様に引つ張られながら飛んできた俺は、フラン様が入里が見えていきなりスピードを落としたので、慣性だったかなんだかの法則に従い、そのままフラン様から吹っ飛ばされて入里の入口付近に落とされた。

「うゝあゝゝ。」

「おい……………大丈夫か？強力な妖力があると思って出てきたらいきなり空から降ってきたが……………」

「た、多分大丈夫……………です。」

「涼ー！無事ー！？」

誰かわからない（暗過ぎるため）人と話していると、フラン様が空から降りてきた。

「ん？貴様は……………吸血鬼のようだが……………人里に何の用だ？」

「あ、この涼と一緒に行って来て欲しい場所があるって聞いたから付き添いで来たの。フランドール・スカーレットだよ！」

「ふむ、この里に被害をもたらさないなら歓迎しよう。私は上白沢慧音だ。ところで……………」

「あ、俺は彩華涼です。紅魔館という場所で執事をやらせて頂いてます。」

「そうか。それで、涼の用事とは？」

「えと、稗田の人物に会わせて欲しいのですが……………」

「そうだったのか。ん？もしかして、外来人か？」

「あー、軽く違いますね。異世界人と言っていただければ。しかし、何故そう思われたのですか？」

「ああ。今日の昼間に同じ異世界人が来てな。そいつに雰囲気似ていたからな。」

「そうだったんですか!？」

「ど、どうしたんだ?そんな声を出して？」

出すのも無理はない。だって、もしかすると、未奈斗の可能性もあるんだ。

「ま、まあ、取りあえずその話は次の機会にしよう。私が稗田家まで案内しようか？」

「あ、よろしくお願いします。」

「…………フラン空気…………」

「すみません、フラン様。さ、行きますよ。」

「……………うん!」

ちよつとふて腐れていたフラン様もまた可愛い……………はっ!？何を考えてるんだ!？

俺は頭を振って平常心に戻し、慧音さんの方を向いた。

「では、お願いします。」

「うん、任せてくれ。」

そう言つと、慧音さんは歩きだし、俺とフラン様は着いて行った。あ、何かこっちに誰か殺気を飛ばしてる……………

人里へご挨拶！

どう見ても執事なお使い

（後書き）

涼「だから殺気って？」

作「東方ファンなら分かるはず。」

涼「で、俺も稗田の家へと。ほんと、何するつもりだ？」

作「それは次の話（？）で明らかに。いや、読者の皆様はもう予想が着いてると思います。」

涼「はあ……じゃ、次回も頼むぜ？」

作「任せろ。次回は涼、未奈斗共に出る久し振りの話だ！」

涼「感想、指摘、お気に入り登録をよろしくお願いします。あ、もうつつとうしくなったか。」

作「俺のセリフをとった拳句なんだその言葉は！」

幻想郷縁起

異世界人　く人を超えし人く（前書き）

本来の幻想郷縁起とは掛け離れている可能性大です。

ご注意ください。

幻想郷縁起

異世界人　く人を超えし人く

名：日向　未奈斗　（M i n a t o　H y u g a）

能力：身体で概念を破壊する程度の能力　あらゆる武器を操る程度の能力（自覚無し）

危険度：低（　1　）

人間友好度：高

住んでいる場所：魔法の森

紫に落とされたらしい異世界人

何時も大量の武器を持ち歩いているため、少し恐れられている（
2）

性格：内気であり、軽くビビリ。しかし友好関係を築くと活発になる。

何故か子供達に人気大。私も一緒に居ると何故か落ち着く。

身体で概念を破壊する程度の能力：蹴り、拳などで存在している、地面についている、等の概念を破壊できる。しかし、何を破壊するか宣言しなければならず、無機物か、自分に関係するもの（　3　）しか破壊できない。

あらゆる武器を操る程度の能力：全ての武器を達人級に扱える。以

上。

目撃報告例

「この前、人里に来たな。どうやら魔法薬に使える物を探していたらしい。」（寺子屋の先生）

魔法使いの家に居候しているらしい。決して、あの泥棒の方ではない。

「アリスの家に行ったら何故かいきなりトラップが発動して武器を大量に持って出て来たぜ。あの時は死ぬかと……」（白黒の魔法使い）

私は貴女がいい加減諦めないといけないと思う。しかしトラップを使えるのは初耳だ。

対策：基本的には、人間に対しては全くの無害。しかし、私情が挟まると本気で潰しにかかる。時々暇な時に人里に来る時、頼み事をする和聞いてくれる可能性があるのです、その時は普通に頼めばいい下手に出ると、疑われる。

1：とある人を侮辱したりすると高になる。対策を読むべし。

2：武器の種類は、刀、双短刀、弓、二丁拳銃、チャクラム、ガンブレードである。

3：例えば、自分と相手の距離、自分が浮かないということ、等である。

名：彩華 涼 （S a i k a R y o）

能力：一度見たものをある程度模倣し、工夫して使用できる程度の能力

危険度：中

人間友好度：高

住んでいる場所：紅魔館

紫に落とされた異世界人。

フランドール・スカーレットの専属執事である。

性格：人（妖？）当たりが良く、どんな人からも好かれる。そして仲間思い。

一度見たものをある程度模倣し、工夫して使用できる程度の能力：既にどのような能力か言っている様なものだが、簡単に書くと、劣化コピーし、変換して使用できる。

目撃報告例

「とても助かっているわ。私の能力のコピーで私以上に働いてくれるしね。」（紅魔館のメイド）

とても頑張っているようだ。私の手伝いもしてほしい。

「この前慧音と仲良く歩いていやがったな。会ったら消し炭に……」（不死の人）

貴女は少し自重して下さい。

対策：この男も、何もしないと無害である。しかし、主であるレミリアやフランドールに刃向かうとその相手に本気で相手をする。

幻想郷縁起

異世界人　く人を超えし人く（後書き）

未「あ、久し振り涼。」

涼「なんでここで再開するんだ……………」

作「大丈夫。この時の記憶は抹消するから。」

涼「ならいいか……………」

未「これが稗田家に行った理由か。何とも安直な……………」

作「ま、やっとキャラ紹介が出来たから良し！」

涼「はあ……………さて、今度からまたちゃんとした話になります。」

未「次はあの異変。目茶苦茶なボス設定になりますのでご注意ください！」

作「もう少しで累計PV1000越え。頑張れ俺！」

涼・未「取りあえず黙れ！！！」

寒い寒い春の日（前書き）

ちよつとグダグダ。そして日曜に更新出来ない可能性が……

涼
s
i
d
e

寒い寒い春の日

「寒っ！」

「寒いわね。今何月よ？かなり長い間寒い様な気がするんだけど？」

俺が紅魔館に来てから早半年。俺と咲夜さんは二人で紅魔館の庭で休み時間を潰していた。しかし、雪が積もっていて、座ることもないまま歩いていた。咲夜さんに言われて持っていた日記で日にちを確認した。

「今……………うげ、五月です。」

「嘘でしょう？もう春じゃない。春告精もないじゃない。」

「でも事実です。……………あれ？まさか……………」

そう言っただけ俺は頭を現代へと切り替え、五月に雪が降る異変を調べると、一つ当て嵌まる大きな異変があった。

「……………咲夜さん、レミリア様に報告しましょう。」

「いきなりどうしたの？……………まさか。」

「ええ、これは異変です。立派な。その名も……………」

「え、今から？」

「ええ。ちよつと魔法薬の材料集めにね。今はもう春でしょう？」

アリスがいきなりそんなことを言い出した。しかし、僕は窓を見てから首を傾げて言った。

「え？何で？雪がまだ積もってるよ？」

「あら？本当ね……………どうしよう、もう暖を取る魔法薬が切れかけているのよ……………いつもならもう春なのに……………」

「仕方ない、僕が行ってくるよ。どんな材料？」

「悪いわね。材料は紅色をした向日葵のような薬草よ。いつもならこの近くに群生しているんだけど……………無かつたら香霖堂まで行くしか無いわね。」

「ふむ。なるほど。じゃあ行ってくるよ。」

「あ、待ちなさい未奈斗。寒いだろうからこの上着を着て行きなさい。」

ドアを開けようとしたとき、アリスが黒いフード付きの上着を貸してくれた。

「ありがとう、アリス。」

「あ、あの、未奈斗が風邪でもひいたら困るから貸すんだから……
……ほんとは心配だからだけ。」

「ん？何か言った？」

「い、言っていないわよ。早く行ってきて。」

「うん、了解。」

貸してくれた上着を羽織り、僕はドアを開けて飛び立った。

「うー、寒いなあ。早く見つけられないとなあ……………」

涼side

「……………で、少し行かせろ、と。」

「真に勝手ながら……………ですけどね。」

「いいわ。そのかわり、咲夜も連れていきなさい。一緒の方が大丈夫でしょう?。」

「了解しました。」

俺はレミリア様に何とか外出許可をもらい、咲夜さんと合流しに動いた。

「あ、いたいた。咲夜さん!。」

「涼、どうだった?。」

「ああ、二人で行って来いって言ってましたよ。」

「そう。じゃあ、まずは魔法の森の方に行ってみるわよ。」

「ん、了解。」

咲夜さんと合流した俺は、二人で魔法の森を目指して月が光る夜の空へと飛び立った。

さて…………春雪異変…………開幕だな。

寒い寒い春の日（後書き）

涼「おい、どうした作者。」

作「どうやらマジで扁桃炎になったみたいだ……………」

涼「このように、マジで死んでますので更新出来ない可能性大です。」

作「出来る限り……………二日に一回更新を続けたい……………と思います……………ゲホゲホ」

涼「作者の代わりに。感想、指摘、お気に入り登録をお待ちしております。あと、PVがついに100000越え！皆様、本当にありがとうございました。いつか、100000突破記念話でも書かせていただきます。」

春雪異変

舞い踊る雪の精・黒き謎の刀使い（前書き）

やっと一つの動きが……

涼
s
i
d
e

春雪異変

舞い踊る雪の精・黒き謎の刀使い

「うむ…………魔法の森ってどこだっけ…………？」

俺はいま、絶賛迷子中である。何故なら…………

「咲夜さん、時止めて一人で行かないでくれよ……………」

このような訳である。そして置いてきぼりを食らった俺は、フラフラしながら、魔法の森らしき場所を探し回っているという訳である。

「あー、ヤバい、マジでどこだ？」

「どうしたの？お困り事？」

俺が呟くと、後ろから声がしたので振り向くと、白い服を着た女性
がいた。

「こんにちは。良い雪日和ね？」

冬の忘れ物 レティ・ホワイトロック。確か妖々夢第一ボス。

「みたいだな。一つ、聞きたい事があるんだが……………」

「何？まあ答えてあげるよ？勿論、条件付きで。」

「…………まずその条件を。」

「私と、弾幕ごっこして、貴方が勝ったら教えてあげる。」

「…………仕方ないな。やるぞ。」

「交渉成立。じゃ、始めるよ?」

刹那、レティから弾幕が大量に発射された。

「いきなりか!」

なんとか避けながら、レティに剣型の弾幕を放っていく。そのような通常弾幕の応酬に、レティが痺れを切らした。

「ああもう…………面倒臭い。白符『アンデュレイションレイ』」

「え、それ!?」

予想外のスペカに驚いたが、冷静に対処していく。そして、ふよふよと浮かんでいたレティに剣型の弾幕をありったけ放った。

「うーん、負けちゃったし、魔法の森への行き方……………ってか方向を教えるよ。ここから多分北に行けばいいよ。」

「ありがとな。じゃあな。」

そういつて俺は北へ向かって飛んで行った。しかし、俺は見てなか

った。レティが悪戯な笑みを浮かべていることを……

「フフッ……… 本当は魔法の森の方向なんて”知らない” んだけどね。ま、多分って言ったし、嘘は言っていないしね。」

「くそう、嘘は良くない……… あ、多分って言ってたから嘘じゃねえ………」

レティの言った通り来ると、何故か変な森に着いてしまった。だってキノコが動いてるんだもん……… 何なんだこれ？

「はあ……… って、あれは……… 咲夜さん？よかった、ここが魔法の森なんだ。」

俺は遠くに咲夜さんが誰かと戦っているのが見えた。

「…………… あっ……………」

「きゃああっ！ー！」

「っ！咲夜さん！時符『リタルダンドタイム』！」

俺は時を一時的に遅らせ、地面へとたたき落とされている咲夜さんの下へ潜り込んだ。

「よ……………つと。大丈夫ですか？」

「く……………つ、気をつけなさい、涼。あいつ……………相当強いわよ。」

そう言われて、咲夜さんの視線を辿ると、俺の記憶上、見たことのない黒いコートを頭まで被った男がいた。

「ああもう、十六夜咲夜の次は誰だよ、ほんと。で、邪魔するの？」
……………何か聞いたことある声だな……………

「邪魔する気は無かったが、咲夜さんを傷付けられて黙ってはいないな。」

「ああ、やっぱり邪魔するんだ……………もういい、ぶっ飛ばす。」

奴はそう言った瞬間、コートの中から武器を大量に出現させ、構えた。

「へっ……………そう来なくっちゃ、本気だせねえな。」

「ああもう、時間かかり過ぎ……………アリスに説教されるな、これ。お前に八つ当たり感覚で行くからね。」

「あんまり紅魔館の執事をなめるなよ？」

俺は剣を構え、奴は刀を左手で構え、突進した。

涼「おい、あれって……………」

作「ストップ。考えつかなかったからああなったんだ。」

涼「ちっ……………当初の考えと全く違うじゃねえか。」

作「うぐ、確かに当初なら……………っと、こつから先はネタバレかな？」

涼「いや、もう皆分かってるから。」

作「でしょうねえ……………さて、そろそろ薬を飲まないと」

涼「まだ治ってねえのかよ」

春雪異変

突然の訪問メイド・異世界の激突（前書き）

初めての連続投稿。指が死にそうです……

未奈斗 side

「……………見つからない……………」

僕はアリスに頼まれた薬草を探し回っているのだが……………一向に見つからない。どうすれば良いものか……………

「これはもう香霖堂に行くしかないかな……………」

「あら？何をしているのかしら？」

いきなり後ろに気配がし、振り向くとナイフが目の前にあった。：

……………十六夜咲夜か。

「いや、只単に薬草を探していただけですが。ナイフをしまっただけですか？」

「そう？じゃあ、一つ聞いていいかしら？この春に降る雪の原因、知ってるかしら？」

「あ……………」

どうしよう、春雪異変だから分かるから、言うべきなのか？いや、言わなくても最終的になんとかなるはず。面倒だし言わないでおく。

「すみません、分からないですね。僕もこの雪で困っているもんでして。ほんと、誰がやったんでしょうねえ？」

「嘘ね。貴方、原因を知ってるわね？」

「……………はい？」

何でバレた？よくあるカマかけと言う奴か？

「何でバレた？って顔ね。私は原因しか聞いてないのに、貴方は人と決め付けた。自然災害かもしれないのにねえ？」

…………… やつちやつたああああ！！！！

「あー、でもどこにいるかは知りませんよ？僕はここに来てまだ間もない異世界人なんで。」

「そう……………なら、その首謀者と、貴方の名前を教えなさい。」

「首謀者は未だしも、何故僕の？」

「うちの執事の友人の可能性があるからね。」

執事の友人……………？まさか。

「その人、名前は涼、ですか？」

「正解。じゃあ、貴方が未奈斗ね？」

「その通りです。日向未奈斗ですよ。」

「うちの執事が会いたがってたわよ？何時か会いに来なさいよ。」

「わかりましたよ……………しかし、首謀者の名前、簡単に教えてもつまらないですね。弾幕ごっこで勝負しません？」

「いいわよ。異世界人の実力、見せてもらっわ。」

話がかなり脱線したような気がするが、弾幕ごっこをすることにした。咲夜はナイフを構えたので、僕はチャクラムを構えた。

「珍しいわね。」

「あんまりこれに目を取られてると通常弾幕に被弾しますよ？」

僕はチャクラムを咲夜に向かって投げ、通常弾幕を展開させた。咲夜もナイフを象った弾幕を展開させ、通常弾幕の応酬となった。

「く……………、流石、紅魔館のメイド。強いね。」

「貴方には言われたくは無いわね……………うちのお嬢様クラスじゃない。」

「嘘は言わなくていいよ。さ、僕の初スペカだ。」

そう言って、僕はスペカを取り出した。そこには、数珠が破裂している絵が描かれていた。

「行きますよ！破符『百裂爆珠』！」

その瞬間、爆発的に僕の体から弾幕が放たれ、咲夜に向かっていったが、この弾幕、東方のNormalレベルである為、弾幕間がスカス力な訳で……………

「貴方……なめてるの？本気で来なさいよ？」

楽々とかわされてしまう。だが、このスペルは油断が命取りだ。

「ふふふ……まだ、5秒しか経ってませんよ？このスペルの名前は『百裂”爆”珠』。まあ、漢字の違いはあるかもしれませんが……まだ来ますよ？」

「なんですって……？」

咲夜が後ろを振り向いた瞬間、通り過ぎた弾幕が、爆発し、そこら中にランダム弾がバラ撒かれる。しかし、これでまだHardレベル。

「さあ、まだ……行きますよ。これを避けたらスペルブレイクですよ！」

「嘘……まだ来るの!？」

バラ撒かれたランダム弾が、更に爆発し、自機狙い弾とランダム弾、そして更にはランダムレーザーまで放たれた。

「こんなの、無理……!」

そして、咲夜は為す術無く被弾した。

咲夜が被弾し、弾幕ごっこが終了した僕達は、一旦地上に降りて話していた。

「負けてしまったわね……………」

「まあ、僕は元の世界で見えてきましたから。」

「そうなのね……………そういえば、何故あの時紅魔館のメイドだって分かったの？」

「それも元の世界での知識です。」

「そう……………」

話が途切れた所で、咲夜が気が付いたように話しだした。

「涼がこっちに来たわね。」

「涼が？……………そうだ、咲夜。ちょっと一芝居うつてくれないかな？」

「何で私の名前……………ああ、元の世界ね。……………話によるわね。」

「僕は、あいつと闘ってみたい。でも、僕だと分かってたらあいつは手加減すると思うんです。」

「でも、私がいる必要が無いんじゃない？」

「更にあいつを本気にさせるには、身内の敗北を目の当たりにすれば……失礼ですけどね。」

「……面白いじゃない。少しお嬢様と涼には悪いけど、協力するわ。」

「ありがとう。咲夜。」

二人で空中に待機し、涼の到着を待ち続けること30分……

「涼が私を見つけたわね。」

「じゃ、行くよ……」

咲夜の合図と共に、僕は咲夜を気合いと共に下に落とした。

「…っ、らあっ!」

「きゃああっ!」

咲夜が地面に着く瞬間、何だか一瞬視界が揺らめき、次の瞬間には涼が咲夜を支えていた。

「よ……っ。大丈夫ですか？咲夜さん。」

「く…………っ、気をつけなさい、涼。あいつ……………相当、強いわよ。」

そう咲夜が言った瞬間、涼が僕を睨む様に見た。

「ああもう、十六夜咲夜の次は誰だよ、ほんと。で、邪魔するの？」

そう言った時、涼が一瞬思考するような顔をしたが、すぐに返答が来た。

「邪魔する気は無かったが、咲夜さんを傷付けられて黙ってはいないな。」

「ああ、やっぱり邪魔するんだ……………もういい、ぶっ飛ばす。」

そう言っ僕は持っている武器全てをコートから出し、アリスに教えてもらったやり方で浮かせる。何か、自分が浮くと同じ感覚らしいが……………

「へっ……………そう来なくっちゃ、本気出せねえよな。」

「ああもう、時間かかり過ぎ……………アリスに説教されるな、これ。お前に八つ当たり感覚で行くからね？」

「あんまり紅魔館の執事をなめるなよ？」

涼は剣……………あれ、フラタニティじゃねえの？F○の。それを構え、僕は左手に刀を持って構え、突進した。

未「やっと出会えたね。あつちは気付いて無いけど。」

作「無理矢理感全開……………うあー、これ絶対指摘来るわ。」

未「来るだけマシじゃない？来なかったらそんな価値も無いって事だし。」

作「……………あはははは、俺、終わったな。」

未「おーい、作者？あーあ。壊れてしまった作者の代わりに。いつの間にかユニークも3000越えていてビックリ。これからも精進致しますのでよろしくお願いします。」

作「ばるばるばるばるゲホッゴホッばるばるばる……………」

未「ばるばる言う前に扁桃炎治せ！」

春雪異変

雪降り積もる森で（前書き）

頑張った結果。スペカはあんまり文章に出来ない……

涼side

春雪異変

雪降り積もる森で

「よいつ……………しょおっ！」

「随分と大振りだな？」

奴は左手に持っている刀を一度引いてから横に薙いで来る。それに合わせて剣を添わし、受け流す。そして刀が俺を避けていき、奴に出来た隙を狙って剣を振った。

「甘いな。」

「そつちがな！」

剣を振り、奴に当たったと思った瞬間、奴の刀が戻って来て、俺の剣とぶつかった。

「ぐ……………っ、何でそんなに速く戻って……………？」

「教えると思ってるの？はあ……………面倒臭い、行くよ。」

そういつて奴は空いている右手でスペカを取り出し、宣言した。

「やべっ……………！」

「遊符『八刀一閃』」

俺は直ぐさま奴から離れ、奴の攻撃に備えた。

「まだまだ攻撃範囲内だぞ？」

「何っ！？」

瞬間、奴の刀が八つに分かれた様に見え、その全てが俺を狙って襲ってきた。しかし、俺はこの技に聞き覚えと見覚えがあった。

「予想が正しければ……………！」

そう言つて、俺は真横に回避行動をした。なぜなら、この技、予想通りなら俺のいた場所で全て交差するはずなのだ。そして、予想は的中した。

「ちっ……………何で当たらないんだよ、当たったら楽なのに……………」

「当たつてられるか馬鹿が。それでも喰らつてろ、禁忌『スリーオブアカインド』！」

俺はスペカを発動し、三人に分裂した後、更にスペカを発動した。

「……………これで終わりだ、気爆『フォースレイン』！……………」

三人の俺が、その場から跳躍し、剣に気を溜めて放った。しかし、奴は何故か分かつていた様に空中へと飛び上がった。

「その技、知ってるよ。ああ、ここから爆発する地面からも避けなくちゃならないし……………面倒臭い！」

「なっ！？」

俺は驚愕した。今まで知らなかった奴にこのスペカの最後まで当てられたのだ。地面が爆発し、破片が奴に向かうが、全てを宙に浮いていたチャクラムと銃で破壊された。

「なにぼーつとしてるの？」

「！くっ！」

いきなり二つのナイフに持ち替えて接近してきた奴に、俺は剣を振って距離を取った。

「…………ち。やるじゃねえか……………」

「面倒臭い面倒臭い…………早くやられてよね。」

一声ずつ言い合い、再び剣と刀の応酬が始まった。

咲夜 side

「何よ……これ……」

私は、未奈斗と涼の闘いを傍観するはずだったのだ。しかし、今となっては、傍観しているだけでは勿体ない位に接戦を繰り広げている。

「あの二人……一体何者なの？ふふっ……知らない間に、私を抜かして行っていたのね……」

私には、到底追いつけそうには無い。しかし、見て、今後お嬢様に刃向かう者がいたときに備えよう。今の私に出来る、唯一の行動だ

未奈斗 side

「くそっ、結構しぶとい……」

双短刀で連続して切り掛かっている為、押してはいるが、全く涼に当たらない。ふと呟いていると、涼が話し掛けてきた。

「お前………何者だ？俺の技を知っていたなら異世界もしくは外来人だ。だが、お前は空も飛べるし物質も浮かせられる………不可解なことが多過ぎるんだ。」

「答えるとしても？ま、僕に勝てたらね。さあ、もう一度スペカ行くよ。さっきのは元の世界のだけど、今度のはオリジナルだから気を抜かないでね？」

そいつって僕はスペカを発動させた。使ったのは、先程も使った………

「破符『百裂爆珠・lunatic』！さあ、避けつつけることが出来るかな！？」

先程と同じく、Normalレベルの弾幕がばら撒かれる。咲夜は油断していたが、流石に東方経験者、油断は無い。

「良く油断はしなかったね。それだけは褒めてあげるよ。」

「lunaticレベルがこんなに簡単な訳無いからな。さあ、来いよ？」

「後悔するからね？」

先程ならばランダム弾のみだったのだが、今回はlunatic。

最初にランダム弾、自機狙い弾、ランダムレーザーが放たれた。

「ふんふん、レーザーを避けて、そこから気合い避けだな！」

「うわ、もう解かれた。」

その通り。このスペカ、規則性が殆ど無く、気合い避けしか方法が無い。

「けど……最後のこれ、避けれるかな？」

そう、このスペカは三段式。この三段目が最も発狂しやすい。

「……………うえ、吐きそう。」

「だろうね。さ、クライマックスだ！」

ランダム弾、自機狙い弾から超高速自機狙い弾が狂った様に飛んて来る。しかし、これも涼は軽々と避けていく。

そして、スペカブレイク。その瞬間、いつの間にか一人になっている涼が宣言した。

「終わりだ。終幕『テラーオブレッドキャッスル』！」

瞬間、俺の目の前に弾幕の壁が現れた。俺はもう、スペカが無く、対抗手段が無いに等しかった。しかし、俺は避け続けた。

「まだなのか……………！？」

「終わりだ。これでなあっ！」

上から涼の声が聞こえ、上を向くと、巨大な妖力玉が僕の目の前に広がっていた。僕は観念し、呟いた。

「……………ははっ。やっぱり強いや、涼。」

「　　っ、お前、やっぱりっ！」

「僕の、負け。」

僕は妖力玉に激突し、地面へめり込んだところで、意識を失った

春雪異変

雪降り積もる森で（後書き）

涼「……………えーと、俺の勝ち？」

作「うん。今の今までどっち勝たせようか迷ったけど。」

涼「そうか……………っておい、春雪異変……………だよな？」

作「大丈夫。オチは考えてある。」

涼「ってちよつと待てやオイイイ！」

作「扁桃炎も治りましたし、頑張って執筆して行きたいと思います。
では、また次の話で。」

春雪異変

思い出したら時既に遅し（前書き）

何と学校から投稿。 勿論休み時間ですよ？

涼
s
i
d
e

春雪異変

思い出したら時既に遅し

「……………っ！大丈夫か！」

俺は奴の最後の言葉を聞き、奴が未奈斗であることに気がついた。
そして、走って未奈斗がめり込んでいる場所へと行き、未奈斗を揺すぶった。

「おい、大丈夫か！？しっかりしろ！」

「……………うあああゝ！、頭があああゝ！？」

「あ……………」

とりあえず、落ち着こうか……………

「まったく、何でこんな芝居したんだか……………」

「悪いね。ちょっと力を見たくてね。」

「……………貴方達、どんな仲なのよ……………」

「ま、また今度話すよ。」

「僕が遊びに行った時に話すよ。さて、僕は薬草をアリスに届けなきゃならないから、失礼するよ。またな、涼。」

「ん、ああ。」

「来るときは何か持ってきてきなさいよ。」

「了解。それじゃ。」

そう言い、未奈斗は空を飛んで森の奥へと入って行った。

「……………何時か、貴方達に追いついてやらないとね。」

「直ぐにやられますって。さ、行きましょうか。」

「ちょっと、首謀者がどこにいるか分からないのよ？どつするのよ？」

「あ、俺分かりますよ。ここから冥界に行くんです。」

「冥界……………もしかして、死人が行く？」

「正確には靈魂、ですけどね。その主、西行寺 幽々子が発生させているはずです。」

「……………そういえば、貴方も異世界人だったわね……………最初から頼れば良かったわ。」

「あはは……さて、行きましよう。今度は置いて行かないでくださいね？」

「分かったわよ。」

そして、俺達が森を上から脱出しようと飛び上がり、魔法の森の上空に出た。そして、北の方を見た。

「あらら……」

「……時既に遅し、ね……」

何を見たか。それは、咲き誇る桜の花だった。

……手柄取られた……

未奈斗 side

「ただいまー。」

「お帰り、遅かったじゃない。」

「いや、喧嘩を吹っ掛けられてさ。遅くなってごめんよ。」

そう言って頭を下げる。ま、こっちが根本的に悪かっただろうしね。

「ちょ、ちょっと！別に謝らなくて良いわよ。もう……………心配した位だから、大丈夫よ。」

「ありがとう。アリス。心配してくれてたんだ。」

「あっ！？…………しゅう……………」

「ア、アリスーツ！！？」

僕が笑って礼を言うと、いきなりアリスが顔を朱くし、頭から煙を出して倒れた。…………そろそろ話を切り出そうかな……………？

霊夢 side

「ああ、面倒臭い異変だった……………」

私は白玉楼にいた幽霊をボコボコにして、春気を解放させ、その後に突っ掛かってきたスキマを使う妖怪をボコボコにした帰りを飛んでいる。

「そういえば、まだあの氷精を呼んで無いわね……………呼んだら行くかも知れないって言ってたし、あのスキマ妖怪に連れていってもらいますか。」

「そういう事なら今からごあんない」

「って、スキマいつの間にいたあああ!？」

そういつて、何処からか湧き出てきたスキマ妖怪に私は境界の中に放り込まれた。

「ふふっ、ずっと後ろに居たわよ?さて、私はあの二人に会いに行きましようか。」

「あら、やっと帰って来たのね。」

「遅れて申し訳ございません、お嬢様。」

「すみません……………」

ゆつくりと飛んで帰って来ると、レミリア様が外に出て（いり日傘）俺達を待っていた。

「ま、いいわ。春も戻ってきた事だし。さ、持ち場にもどりなさい。」

「分かりました。」

「了解しました。では、失礼します。」

そう言って俺は、フラン様の部屋へと急いだ。

少年移動中…………

妖精メイドのサボリ等を見てしまい、余計な手間をとってしまった俺は、ようやくフラン様の部屋までたどり着き、扉を叩いた。

「フラン様、今帰りました」「涼——！！」「ぐあっ……………」

いきなり扉がフラン様の声と共に開き、俺は扉に吹き飛ばされ、その後、フラン様のヘッドタックルが腹に突き刺さった。そのフラン様の目には、涙が溜まっていた。

「フ、フラン様……………」

「涼お……………何も言わないで行くなんて、心配、したんだからね……………」

「……………申し訳ありません。」

「今度からは、少しフランに言うてからにしてね……………」

「了解しました。さ、とりあえず部屋に。」

「うん……………」

俺は未だに涙を目に溜めているフラン様をお姫様だっこし、部屋のベッドへと運んだ。

「大丈夫ですか？」

「うん……………もう大丈夫。」

そう言ってフラン様は涙を拭いて、俺を見て言い放った。

「今日は、離れないでね……………」

「……………はい。了解しました。」

俺はフラン様に自分の中で最高の笑顔を見せると、フラン様も笑顔で返した。

春雪異変

思い出したら時既に遅し（後書き）

涼「ついに春雪異変が終わったな。そして作者、謝れ。」

作「g d g d な才子で申し訳ありませんでした！」

涼「はあ……………つか、アリスと未奈斗って……………」

作「言うな！分かってるだろうけど言うな！」

涼「はいはい。てか俺にも恋愛フラグを……………」

作「はあ……………では皆様、また次話で。」

涼「え、スルー！？」

紅魔館へ行こう

カリスマブレイク（前書き）

次の異変が分からない……………どうしよう（爆

未奈斗 side

紅魔館へ行こう

カリスマブレイク

「そうだ、紅魔館へ行こう。」

「いきなり何を言ってるの？」

春雪異変が解決した翌日、俺は咲夜に誘われていた紅魔館へ行こう
と思い、アリスを誘ってみた。

「でも、吸血鬼の館でしょ？怖いわよ……………」

「大丈夫、常識持つてる人、いや妖怪ばっかのはずだから。」

「……………何か引つ掛かるけど、良いわ。いきましようよ。」

「よし、じゃあ出発だ！」

アリスが了承した所で、土産（健康に良い魔法薬。メイドイン僕）
をもち、出発した。

少年少女飛行中……………

「あ、あれかな？」

「紅いわね。確実にあれね。」

家を出てから10分程度で紅魔館を発見。そして、何があるわけでも無く紅魔館の正門まで辿り着いた。しかし……

「zzz...」

「寝てるな……」

「寝てるわね……」

門番が何と立ちながら寝ていた。

「……起きるまで待とうか。」

「ええ、勝手に入って殺されたら、と考えたらね……」

そう言って待とうとすると、門が開き、中からメイド……つまりは咲夜が出て来た。

「あら、気配がすると思ったら、未奈斗、貴方だったのね。」

「や、咲夜。友達の勤め先に遊びに来たよ。」

「未奈斗……あの女、誰？」

僕が咲夜と話していると、何だか怖いオーラを纏ったアリスが話し掛けてきた……いや、怖いから！

「アリス、別にそんな関係じゃないから。昨日弾幕ごっこで戦った人。」

「そうだったの。悪いわね。勘違いして。」

「い、いえ……」

……何だろう、心なしか、咲夜が震えているような……

「と、ところで、未奈斗と……」「アリスよ。」すいません。アリス様「様は止めて。」……分かりました。アリスはどうして入られないのですか？」

「いや……あれ。」

そう言っ僕は咲夜の横で立ちながら寝ている門番を指差した。

「……入っていいいわよ。中で名前を呼んだら来ると思っから、まずはお嬢様の部屋に行っ面識をとっきて。そうじゃなきゃ、この館に自由に入れないわ。」

「ありがとう。さ、行こうかアリス。」

「え、ええ。ありがとう、えーと……」「十六夜咲夜です。」ごめ

んなさい。咲夜、失礼するわね。」

「ええ、ごゆつくり。」

僕はこうして紅魔館に入る事が出来た。すると、門の方でこんな会話が…………

「いい加減にしないでよ中国ー!!」

「咲夜さんすいませーん!!」

…………聞かなかったことにしよう。特に最後に聞こえたナイフが刺さったっぽい音は。

少年少女移動中…………

「さあ、迷った。」

「何で最初に呼ばなかったのよ？」

「涼に頼んだら負けたような気がして……………」

「はぁ……………」

僕達が館内に入ってから数分、僕が「シックスセンスで何とかする！」と言ったばかりに迷ってしまった。

「ってか呼んでから一分くらい経ってるよ？まだなのかなぁ……………」

「そんなに早く来るわけ無いでしょ……………」

アリスが言った瞬間、涼の姿がいきなり前に現れた。

「うわぁっ！？いつの間に!？」

「今さっきだ。それと……………初めまして。アリス・マーガトロイドさんですね？俺はこの紅魔館でフランドール様の専属執事をさせていただいている、彩華涼です。以後、よろしくお願いします。」

「ええ。初めまして。こちらこそよろしく頼むわ。後、敬語は外してもらいたいわ。」

「了解、っと……………で、未奈斗、レミリア様に会ったろ？」

「うん、てか専属執事だったんだね。しかもフランドールの。」

「いきなり命じられてな……………さて、未奈斗が勝手にウロチヨロシたお陰で、レミリア様の部屋はすぐそこだ。行くぞ。」

「ほら、やっぱり僕のシックスセンスは正しかった！」

「とりあえず黙りなさい。」

アリスに的確につっこまれた後、レミリアの部屋へと涼に連れていってもらった。といっても、本当にすぐそこだったが。

「じゃ、入るぞ。……レミリア様ー、俺の友達とそのお連れ様を連れて来ましたー。」

「入りなさい。」

涼が確認を取ると、扉の向こうから幼い声が聞こえてきた。

「失礼します。……さ、二人とも。」

「よく来たわね。私が紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ。」

扉の向こうには、羽が生えた小さい吸血鬼が椅子に座って威厳を放っていた、のだが……

「貴女がレミリアね。私はアリス・マーガトロイド。魔法の森にこの人間と一緒に住んでいるわ。」

「僕は日向未奈斗といえます。よろしくお願いします。後、頭の寝癖をどうにかされた方が……」

「えゝ！？り、涼！」

「はいはい、了解しましたー、っと。」

寝癖のせいで放っていたカリスマがブレイクしていました。……
本当に大丈夫か、この主人……

「で、入館の許可がほしいと。」

「そういうことになるわね。」

「いいわよ。これからたまには来なさいよ?」

「ありがとう。レミリア。」

寝癖を治したレミリアに入館の許可をもらい、そろそろおいとましようかと思った時、涼が話しだした。

「あ、レミリア様。ちょっと昔話をしたいんで、皆を呼んでくれませんか?」

「え? 僕達の話?」

「そう。良いだろ?」

「うーん、そうだね。まだ話して無い友達もいるしね。」

「面白そうじゃない。良いわ。貴方の部屋で良いわね？」

「はい。じゃ、先に行っていますね。」

そういつて、涼は部屋を出て行った。

「あ、僕達も行っていますね。」

「未奈斗………あんたはまた迷子になる気？」

「すみませんでした………」

次迷子になるともうおしまいな気がする………

未「ねえ、まさかまた新キャラだすの？まだちゃんと僕達のキャラも確定してないのに？」

作「いや、もとより出す予定だった奴だ。断じて思いつきで書いた訳ではない。」

未「ならいいんだけど……にしても、フラグがまた立ったね。」

作「大丈夫、まだまだだよ。にしても、ネタバレ多数になった気が……」

未「ま、良いじゃないか。さて、そろそろ時間だよ。」

作「では、次の話で。PV15000越えやつほおい！」

未「とりあえず黙れ！」

紅魔館へ行こう

落とされる前のお話（前書き）

今回は少し短めで、読者への語りのようになっています。いつもとは勝手が違います。

未奈斗 side

紅魔館へ行こう

落とされる前のお話

涼の部屋に集まったのはレミリア、フラン、パチュリー、小悪魔、咲夜、美鈴、アリスと当事者の僕と涼だ。

「さ、始めるか？」

「早くしなさい。気になって仕方無いのよ。」

「涼の友達かぁ……………楽しみだなあ。」

「異世界人の話は興味深いわね……………」

「早くして下さいよ涼さん！」

「助けてくれてありがとうございます涼さん……………」

「この前言っていた話ね……………」

「未奈斗、始めて？」

「ん、了解。僕達は元の世界ではここの寺子屋の更に勉強する所で勉強してたんだ。そこで、僕と涼、後三人でよく話したり、遊んだりしてたんだ。」

「交代な。その三人は、皆この世界を知っててな。それで話がよく合ったんだ。一人目の名前が、刻麗^{コクレイ} 碧菜^{ヘキナ}。二人目が、深見^{フカミ} 紫幻^{シゲン}。そして三人目。この名前は覚えて置いてくれ。いつか、幻想入りし

てくる奴だ。」

「え？幻想入りって事は……幻想郷に来る、という事かしら？」

「レミリア様、その通りです。三人目の名前、それは」

東風谷 早苗。後に、神様と共に幻想入りする巫女です。

回想

僕達が五人揃ったのは、中学……まあ、寺子屋八年目の秋だった。その日、転校生って言うて、途中からこの寺子屋に入る子がいたん

だ。

「おい未奈斗！今日、転校生が来るらしいな！」

「知ってるよ。昨日先生言ってたじゃん。」

「はあー。なんであんたは覚えて無いのよ。」

「……………碧菜、こいつ寝てた……………」

「し、紫幻！言っとなって！」

「へえー。寝てたんだー。」

「涼、御愁傷様。」

「んなこと言っでないで助けろおお！」

僕達の中では、寝たら体罰が落ちると言う規則みたいな物があった、涼が罰を受けてた時だ。

「おーい、ホームルーム始めるからその馬鹿を蹴るのを止める刻麗。」

「ちっ……………はい、分かりました。」

「今舌打ちしたよな？」

「してませんよー？それより先生、早く転校生を紹介してくださいよー！」

教室の中から、早くしてくれと言つ声が飛び、先生が折れて転校生を呼んだんだ。

「よし、入ってくれ。」

「はい。」

そう言つて入つて来たのは、緑の長い髪の子で、その瞬間……

「んなつ!？」

「ぶつ!？」

「へえつ!？」

「がつ!？」

「おい……彩華、日向、刻麗、深見。どうした?知り合いか?」

「い、いや、違うぜ。続けてくれ先生。」

そう言つて言い逃れをした涼が、ちょうど近くに座っていた僕達に話し掛けてきたんだ。

「おい、あれつて……」

「涼、まずは最後まで聞こう……」

そう言つて、僕達は転校生の話を聞きはじめた。

「東風谷早苗といいます。こんな髪で申し訳ないですが、これは生まれつきなので勘弁して下さい。それと、私は実は神社に住んでい

て、休みの日は巫女をしているので、良かったら来て下さい。皆さん、よろしく願いしますね!」

そこらの男子が声を上げたが（可愛かったため）、僕達の驚きはそれを越えていた。

「……………東風谷早苗。後に幻想入りし、神様二人と博麗神社を乗っ取るうとする人物……………」

「がここにいてことは……………」

「まさか……………幻想郷が……………?」

「……………存在する。しかも、この世界に。」

回想終了

「……………つてええええええ!!!!??」
「……………」

「叫びたくなると思うが、事実だ。」

「ちょっと休憩しようか。びっくりすることが多かっただろうしね。」

「助かるわ……じゃあ、10分ね。」

「了解。」

僕は次に何の話をするかを考え始めた。

未「ちょ、早苗さんは外の世界の人でしょ！？何で異世界にいるの！？」

作「それについては考えてある。心配するな。」

未「信用していいんだよね！？」

作「……………多分、ね。」

未「すつごく心配……………」

作「この章の矛盾点はハンパなく多いと思われますので、指摘をしていただきたいです。よろしく願いします。では、また次の話で。」

未「ホントに大丈夫！？」

落とされる前のお話2

神様との出会い（前書き）

さて、またもグダグダになっている……かもしれない。

涼
s
i
d
e

落とされる前のお話2

神様との出会い

「さて、始めようか？」

ちょうど10分経った時、未奈斗がレミリア様達に声を掛けた。

「ええ。始めなさい。」

「了解しました。そうだな……早苗が転校してきた日の昼の休み時間に、俺達四人は早苗を屋上に連れ出したんだ」

回想

「えーっと、皆さん、改めて初めまして。東風谷早苗です。」

「すまん、いきなり連れ出して。俺は彩華涼だ。」

「僕は日向未奈斗。よろしくね。」

「刻麗碧菜よ。よろしく。」

「……………深見紫幻だ。」

「あ、朝に先生に言われていた四人だったんですね。」

「ま、そーいうこと。で、僕達から聞きたいことがあるんだ。」

「ええ。何でも聞いてください。話せる範囲で話しますよ?」

そう笑いながら答えたので、まず俺から質問した。

「んじゃ、俺から。早苗が巫女をしてる神社の名前って守矢神社であつて?」

「はい。私が巫女をしているのは守矢神社です。住み込んでいますよ。よく知ってましたね。」

ここで、俺達は軽く分かったんだ。幻想郷の物語に出て来る早苗と同一人物だつて。そこで、碧菜が確証を得るために、深い質問を繰り出した。

「へえー。ま、ここらじゃ守矢神社位しか無いからね。じゃ、私から。その神社って、神様が二人奉られていない?」

「よくご存知でしたね。一般の方は知られていないんですけど………」

「…………俺から。その二人の信仰の名前ではなく、本当の名前は洩矢諏訪子と八坂神奈子。違うか？」

「っ！何で……………」

ここで確信が持てたから、未奈斗が止めの質問をした。

「多分これが最後。その二柱は、想像上の神ではなく、実際に人の形をしてこの世界で生活している。よね？」

その質問に早苗は驚愕の目をして答えたんだ。

「…………はい。その通りです。じゃあ、こちらからも一ついいですか？」

「ああ。何だ？」

「…………あなたたちは、何者ですか？神様の使いですか？」

その質問に俺達四人は声を揃えてこう言ったんだ。

「「「「ただの幻想を知る高校生だぜ（だよ）（よ）（だ）。「「「「

」

それから、俺達四人と早苗は一気に仲良くなり、初日にして守矢神社に入ることができたんだ。早苗が、俺達に諏訪子様と神奈子様を紹介したいと言ってきたからだった。

「着きましたよ。ここが守矢神社です。」

「へえー。綺麗な神社じゃないか。」

「本当だね。早苗、二人はどこにいるの？」

「今呼んで来ますので少々お待ち下さい。」

そう言い、早苗が神社の小屋みたいな場所に入っていく、俺達は散策することにした。そして、紫幻がここが幻想郷の守矢神社と同じなのだと再確認できるものを発見した。

「……………ん？こんな所に柱なんてあったか……………？」

「ああ、御柱じゃないの？ほら、神奈子のスペカに、なんとかオンバシラってやつあるでしょ？」

「……………なるほど。ありがとう、碧菜。」

「つたく、そんなことで感謝しなくてもいいって……………」

二人で話していると、早苗が走って俺達の場所まで来た。

「遅れてすいません……………中でなら会っても良い、とのことなので、

ついて来てもらえますか？」

「よし、行こうぜ！」

「では、こちらです。」

こうして俺達は、神様二人との面会に臨んだ。小屋の中に入り、中にいる人物を見ると、俺達がよく知っている姿のやつだったんだ。

「あんた達が早苗の言ってた幻想を知っている高校生かい？私が八坂神奈子だよ。」

「そして私が洩矢諏訪子だよー。よろしくね。あーうー。」

この後、早苗にもした自己紹介を神様二人にもし、この日は日が落ちるまで話していた。

回想終了

「と。ま、こんな感じかな。」

「だな。ま、後は何にも変わらない日常だったし。」

「中々楽しかったわ。それにしても、異世界の話は興味深いわね。」

「そうね。……あら、もうこんな時間………未奈斗、そろそろ帰らないと………」

「あ、ほんとだ。じゃあ、皆さん、失礼しますね。」

「また来なさいよ。歓迎するわ。」

「アリス、未奈斗。今度来た時にはとびっきりの紅茶をご馳走するわ。」

「楽しみにしてるわ。さ、未奈斗。いきましよう。」

「うん。じゃ、失礼します。」

そう言つて未奈斗とアリスは部屋にある窓から出て行き、紅魔館の人々のみが残った。

「さ、今日はもう寝るわ。咲夜、後は任せたわよ。」

「承知しました、お嬢様。中国、寝ずに門番をなさいますよ?」

「は、はい!」

「フランも……涼、ついて来てえ……」

「はい、フラン様。」

「私も図書館に戻るわ。こあ、ついて来て。」

「あ、はい！」

レミリア様達も思い思いの場所に行き、この昔話は幕を閉じた。
俺はフラン様と二人で、フラン様の部屋で話していた。

「ねえ、涼……涼って、好きな人いたの？」

「いえ、いませんでしたよ。急にどうしたんですか？」

「ホント!？」

「本当ですよ。先程も聞きましたけど、どうしたんですか？」

そう聞くと、フラン様は顔を赤くしながら口を開いた。

「え……っとな、フラン、実は……う、ううん! やっぱ何でもない! じゃ、寝るね!」

「え、ちよっ……分かりました。お休みなさい、フラン様。」

「う、うん……」

そのまま、フラン様は眠りについた。その傍らで、俺は呟いた。

「……………明日、話して見ようかな。」

そう呟いた後、咲夜さんがノックもせずに入ってきた。

「あれ、どうしたんですか？」

「涼、今から宴の準備をすることになったから、今から買い出しに行くわよ！」

「ええ！？今からですか！？分かりました！」

今日もまた、忙しい一日になりそうだ。

涼「やっぱり考えてなかったじゃねえか。」

作「甘い。本当の直前までどうやっていくか考えるのが俺のポリシーだ！」

涼「おいおい……さて、どうするよ？次の異変は？」

作「歴史的にいくと、翠夢想なんだが……行けるかな……？」

涼「頑張れ。」

作「しかないな。皆さん、次の話からはまた異変です。が、すぐに終わる可能性が高いのでご了承ください。」

涼「では、また次の話で。」

紅い館の大宴会

未奈斗の挨拶回り・冥界編（前書き）

急ピッチで仕上げた為、微妙な仕上がりです。

未奈斗 side

紅い館の大宴会

未奈斗の挨拶回り・冥界編

「え、明日？ 今日行ってきたばかりなのに？」

「今慌てて咲夜が言いに来たわ。どうやら、急に決めたらしいね。」

僕はアリスの家に戻った後、自分の部屋でのんびり（という名の魔法薬調合）していると、アリスが入ってきて、明日、紅魔館で宴会があるから来いと言われ、今に至る。

「ふーん……………誰が来るか聞いた？」

「勿論よ。まず魔理沙でしょ、後霧の湖の妖精達でしょ、博麗の巫女でしょ、冥界の住人達、それと人里の守護者よ。」

「……………？妖精？」

「私も附に落ちないのよ。何で妖精なんかが吸血鬼に招待されているのか……………あ、あと常闇の妖怪も呼ばれていると聞いたわ。」

「……………駄目だ、何故か全く思い付かない。」

「ま、明日になれば分かるでしょ？ 今日早く寝ましょう？」

「うん、そうだね。じゃ、お休み。」

そういつて頭を傾げながらベッドに入ろうとすると、アリスが、

「み、未奈斗……明日、一緒に挨拶回りしない？」

と言ってきた。それには賛成なので、僕は振り向いて笑顔で答えた。

「うん。じゃ、明日はよろしくね。」

「……っ！お、お休みっ！」

顔を赤らめてドアを思いっきり閉めながら出て行った。……毎回ながら分かりやすい……

翌日の夕方

僕達二人は、日が沈んですぐに、紅魔館へと向かった。のだけど……

「ねえ、今まだ夕方だよね？」

「…………ええ。」

「宴会って、夜からだよね…………？」

「…………そうよ。」

「何でもう酔ってる人いるの…………？」

「私が聞きたいわ……………」

もう酒瓶が何本か空けられ、いつの間にか宴会は始まってしまっていた。

「…………ま、まあいいや。アリス、とりあえず…………行こうか。」

「ええ。じゃあ、私の知り合いがいるからそこに行きましょう。」

そう言い、アリスは一番近くにいた赤い帽子を被った人（妖怪）に話し掛けた。

「久しぶりね、リリカ。」

「あ、アリス。久しぶり！アリスも呼ばれてたの？」

「ええ。それと、今日は貴方達に紹介したい人もいてね。」

「アリスが？珍しいね。」

「そう？」

「そつだよ。あ、紹介したいってのはその男の子？」

そついつて、リリカは僕を指差した。

「そつよ。未奈斗、お願い。」

「うん。日向未奈斗と言います。よろしく、リリカ・プリズムリバーさん。」

「うん、よろしく………と言いたい所だけど、なんで私のフルネームを知ってるのかな？」

「それは私が説明するわ。未奈斗はこの世界とは違う人なのよ。で、その世界では私達は有名なのよ。」

そう言い、アリスは僕を見た。

「その通りだよ。中でも、僕はこの世界の事をかなり知っている方だからね。たしか、リリカにはお姉さんが二人いるよね？」

「本当に知ってるんだね………じゃ、二人を連れて来ようか？」

「いや、僕から行くよ。アリスも来る？」

「勿論よ。さ、行きましょう。」

僕とアリスは、走るリリカの裏をついていき、何人かが集まってる場所に着いた。

「ルナサ姉、メルラン姉！とっても変わってる人を連れて来たよ！」

リリカは黒い帽子を被った人と白い帽子を被った人に話し掛けると、白い帽子を被った人が振り向いて言った。

「リリカ、人を変わってると言っちゃダメ。まあ、この宴会来る人は変わってるとしか言いようが無いけど……………」

「……………それが君、か。私はルナサ・プリズムリバー。そこにいる白い服を着ているのがメルラン・プリズムリバーだ。よろしく。」

「よろしくね。」

「こちらこそ。僕は日向未奈斗。この世界とは違う世界から来ました。僕の元の世界では、貴女方の事が有名なので、話はよく聞いていました。」

「そうか。それと、敬語はやめてくれないか？少し堅苦しくてな……………」

「はい。了解だよ。」

そう言って、プリズムリバー三姉妹と話していると、いきなり後ろから話し掛けられた。

「あら？あんまり見ない顔ね？」

後ろを向くと、青い帽子に白い三角巾が巻いてある、桃髪の女性がいた。

「まあ、宴会に来たのは初めてですんで。貴女は西行寺 幽々子さんだと思つのですが……………」

「あら、中々有名になったのね。そうよ、私が西行寺幽々子よ。よろしくね。」

「日向未奈斗です。こちらこそよろしく。」

僕が幽々子も入れて先程のメンバーで話していると、こちらに走って来る音が聞こえた。

「あら、妖夢が来たみたいね。よーむー。ここよ？」

「幽々子様！あんまりふらふらしないで下さいと言っていたじゃないですか！」

「まあまあ、新しい顔もいるのに、そんな大声出さなくても良いじゃない。」

「へっ………？あ！すみません！取り乱した所をお見せしました！」

「いや、別に良いよ。僕は日向未奈斗。よろしく。」

「未奈斗さんですね。私は魂魄 妖夢です。」

「よろしく。後、こっちが………って、あれ？」

僕がアリスを紹介しようとする、アリスはいつの間にかプリズムリバー三姉妹とどこかに行ってしまった。ああ………どこにいったんだろ………

紅い館の大宴会

未奈斗の挨拶回り・冥界編（後書き）

作「今回は私ひとりで。じつは、すいむそう（漢字わからなかったため平仮名）をここで消化してしまえという魂胆。そして、二日に一回更新がこの後書きを書いている時に崩れてしまい、申し訳ありません。次からはしないように致しますのでどうかお許し下さい。

さて、次話は涼君編です。宴会はまだまだ続きますよー。」

紅い館で大宴会

涼の挨拶回り・霧の湖・冥界編（前書き）

何人か、キャラの話し方が掴めていない奴がいます。ご注意ください。
い。

涼
Side

「さて、と。仕事も一段落したかな？」

俺は宴会が何故か早く始まった後、未だ残っていた仕事を片付け、ようやく自由な時間になった。

「フラン様はいないし……どうしようか。」

俺がそう呟くと、フラン様が向こうから走ってきた。

「ねえねえ！フランのお友達が来てるから、一緒に行こ！」

「フラン様の御友人？ああ、この頃いなくなっていることがあると思ったら、御友人の所へいつてらっしゃったんですね。」

「うん！だから、ちょっと紹介しようと思ったの！ついて来て！」

そう言ってフラン様は走り出し、俺もフラン様の後を追いつけた。

少年主人移動中……

「おい！チーちゃん！連れて来たよー！」

フラン様の後をついていくと、そこには俺も見ただことのある青い妖精と緑の妖精、そして黄色の髪をした妖怪がいた。

「遅いじゃない、フラン！……で、あんたがフランの執事の涼ね？」

「その通り。フラン様の専属執事をやらせていただいてる、彩華涼だ。」

「あたしはチルノ。よろしく。」

そう言つてチルノは手を差し出してきた。あれ？チルノってこんなにしっかりしてたっけ……？

「あ、ああ。よろしく。」

「それと、あそこの二人は大ちゃんとルーミア。」

「初めまして。大妖精です。大ちゃんとよんで下さい！」

「ルーミアだー。よろしくなのかー。」

「よろしくな。」

俺が二人に挨拶をすると、フラン様が三人に話し掛けた。

「ねえねえ、皆大丈夫？」

「はい。大丈夫ですよ。」

「あたしも。ルーミアは？」

「おっけーだよー。」

「フラン様。何かするのですか？」

「んーと、内緒！後で分かるよ！」

「……………？了解しました。」

そういい、俺は気にしない事にして、四人で談笑を楽しんでいると、チルノ（カリスマチルノと判明）が思い出したように話した。

「そういえば。サニーとスターとルナは？」

「あの三人は……………あ、きたきた。」

フラン様が言うと、向こうからとんでくる三つの影が見えた。

「ごめん！皆で練習してたら遅くなった！」

「ごめんなさい……………」

「ごめんね。」

「良いと思うー。練習なら仕方ないのかー。」

「そうよ。気にしないで良いわよ。」

「そっか。で、この人だれ？」

「フランの執事の涼だよ！」

「………よろしく。スターサファイア。スターって呼んで。」

「あたしはサニーミルク！サニーって呼んで！」

「初めまして。ルナチャイルドよ。ルナと呼んでね。」

「ああ。よろしくな。フラン様、この三人もですか？」

「うん！ま、期待しててよ！」

「了解しました。」

この後、七人で談笑すると言うことになったが、フラン様が、

「あーごめん涼！今から行く所があるから、好きなところに行つてて
！」

「はあ………了解しました。」

そう言つて、フラン様達は飛んで行つた。

「そうだな……………今からどうしようか。そうだ。冥界の二人に会おう。」

そして、俺は冥界のあの二人を捜しに行った。

少年捜索中……………

「あ、いたいた。」

俺の目の前には、冥界の二人……………幽々子と妖夢、そして、その二人と話している未奈斗がいた。

「おーい、未奈斗!」

「あ、涼。フ란の所にいなくていいの?」

「今は暇なんだよ。んで……………幽々子さんと妖夢さんだな?」

「そうよ。あなたが涼ね。」

「あ、あなたが涼さんですか。初めまして。魂魄妖夢です。」

「彩華涼だ。フランドール様の専属執事をやっている。」

挨拶をすると、幽々子がいきなりこんなことを言い出してきた。

「そうだ、涼。うちの妖夢の婿さんにならない？」

「はい！？何を言っているんですか幽々子様！？」

「いやいや、俺にはフラン様の執事という何事よりも大切な仕事がありますので……………」

とりあえず冷静に返すと、幽々子がどこから取り出した扇子で口元を隠しながら笑って言った。

「冗談よ。妖夢の驚いた顔が見たかっただけよ。」

「そんな理由で言わないで下さい！」

妖夢が幽々子に注意（？）をしていると、未奈斗が幽々子に話し掛けた。

「幽々子さん、今日の宴会って何かあるんですか？プリズムリバー三姉妹とアリスがいなくなってるんですけど……………」

「何かね、何人かで曲を歌うらしいのよ。」

「あ、そういえばフラン様も練習がなんとかって言ってたな。」

「私達はやりませんよ？確かに出来ますけど、二人ではちょっと……」

妖夢がそう話すと、俺はにやりと笑って未奈斗の方を向いた。

「……………未奈斗。」

「え、まさかやるの？」

「もちろんだ。幽々子さん、ギターとキーボードありますか？」

「あるわよ。」

「二人でやられるんですか？」

「ああ。昔、元の世界でやってたんだ。」

「そついえば異世界人でしたね……………」

「涼、曲は？」

「え？勿論俺達が一番弾いたあの曲だろ？」

「はあ……………確かにかぶりはしないだろうね。じゃ、ギターボーカル頼んだよ。」

「任せろ！」

そう言った後、二人に練習してくる事を告げ、二人と別れた。

「さあ、久々のライブだな。」

「うん、三人足りないけど……あの曲は大丈夫だよね。」

俺達は紅魔館から少し出て、練習を始めた。

涼「昨日更新出来無かったからってこんなに早く更新するか。」

作「いや、なんかね………思い付いたから書いたんだ。」

涼「にしても三妖精の口調グダグダじゃねーか。どうすんだこれ。」

作「これだけはやってしまったと思っている。反省はしている。」

涼「後悔しろよ。」

作「では、次話は曲を知ってるだけ注ぎ込みます。ぐだぐだにならないようにします。」

涼「また次の話で！」

紅い館の大宴会

L e t ' s p l a y t h e m u s i c ! (前書き)

知っていて、なおかつ好きな曲を三曲注ぎ込みました。

未奈斗 s i d e

紅い館の大宴会

L e t ' s p l a y t h e m u s i c !

僕達が練習を終えて、紅魔館に戻ると、庭に何やらステージが設置されていた。

「あれだね。」

「だな。さて、参加するには……咲夜さんに言ってみるわ。未奈斗はまっけてくれ。」

「分かった。」

涼は走って咲夜を捜しに行き、僕はステージの前にたった。

「結構しっかりしてるな……」

「あら？未奈斗じゃない。」

ステージの前で呟くと、後ろにはレミリアが立っていた。

「やあ、レミリア。いつの間にこんなの立てたの？」

「ついさっきよ。」

「ここで何を？」

「それぞれがグループを組んで曲を演奏するのよ。勿論、私達もするから楽しみにしなさい。」

「うん、そうするよ。後ね……………」

僕が話そうとした瞬間、涼が僕の横に現れて話した。

「未奈斗、許可をとったぞ。」

「ありがとう、涼。」

「あら、もしかして貴方達二人でやるつもり？」

「あ、レミリア様。そうですよ。これでも元の世界では結構有名でしたから。」

「そうだね。」

「へえ……………なら、期待するわよ。」

「了解です。」

「それじゃ、失礼するわね。」

そう言つてレミリアは立ち去り、僕は涼に話した。

「さっき結構有名って言ったけど、それってネット上だからあんまり有名じゃないんじゃない……………」

「……………お前のその頭をかち割つてやろうか。」

え？ネット上つてそんなに有名になるの……………？

「皆様。只今より本日のメインイベントの、楽曲の演奏、歌唱を始めたいと思います。」

咲夜がステージの上に立ち、いつの間にか集まっていた小妖怪、妖精達を含む僕達全員に話した。

「では、まず始めに、博麗霊夢、霧雨魔理沙、アリス・マーガトロイド、森近霖乃介による演奏です。」

そう言った後、咲夜が消え、変わりに四人がステージの上に上がってきた。

「あ、アリス。あんなどこにいたんだ。」

「みたいな。つか、この四人がやる曲って……………？」

僕達が話していると、霖乃介がシンセサイザーを操作し、軽快なリズムを取り出した。

「……………未奈斗、これは……………」

「うん、あの曲だ。」

魔理沙のもつギターからも、音が鳴り出し、アリスはキーボードを叩きはじめ、霊夢はマイクを持ち、歌いはじめた。

『流れてく時の、中でも気怠さが、ほらぐるぐる廻って、私から離れる心も、見えないわ、そう知、ら、な、い』

「Bad appleか……」

「僕が東方に興味を持ったきっかけだよ。」

僕達が話していると、曲がサビへと入っていた。

『今夢見てる？何も見てない。語るも無駄な、自分の言葉。悲しむなんて、疲れるだけよ、何も感じず、過ごせばいいの。』

「戸惑う言葉、与えられても、自分の心、ただ上の空。」

「もし私から、動くのならば、すべて変えるのなら黒にする……流石に覚えてるね。」

「だな。」

僕達はこの後、静かに聞き、次の組になった。

「次は、プリズムリバー三姉妹の演奏です。」

プリズムリバー三姉妹はやはり人気があるのか、小妖怪達が熱狂し始めた。

「さて、何の曲かな？」

そう僕が言っと、リリカのキーボードから高い綺麗な音が流れはじめた。

「あ、分かった。」

「流石だな、プリズムリバーファン。」

そう、僕はプリズムリバーの曲が好きで、良くキーボードで弾いていた。勿論、この曲も分かる。

「これ、Phantom Riverismだ！」

『むーきーしーつーなー、はーこーのーなーかー。』

「少しだけ背伸びしてちょっと触れてみた。失われた過去の道標、いま手繰り寄せ。」

僕はそのまま小声で歌いつづけた。

「終わったあー。」

「だな。」

プリズムリバー三姉妹が引っ込むと、咲夜が僕達の前にいきなり現れた。

「涼、未奈斗。次が貴方達だから準備してちょうだい。」

「了解しました。」

「了解、と。」

本当に連絡事項だけ述べ、咲夜はステージへと現れた。

「プリズムリバーの御三方、ありがとうございます。さて、次は異世界からきた二人の演奏です。彩華涼君、日向未奈斗君です。」

咲夜はまたステージから消え、僕達の場所へ来た。

「じゃ、期待してるわよ。」

「任せてください。」

「任せててよ。」

僕達はステージに登り、前を見ると、物凄い数の観客がいるのが見えた。

「緊張するな……………」

「びーくーる、びーくーる。」

僕はキーボードを設置し、涼はギターを持って準備を整えた。
そして、涼が僕に目配せをした。

「それでは、皆さん聞いて下さい。『ネクロファンタジア』！」

涼のギターが音を奏ではじめ、僕もキーボードの音の設定を変え、
叩きだした。

そして、歌が始まった。

『果てない月と声の間に浮かぶ過去とえいこの夢を、ループする
結末はきつと感覚を刺して。』

『いつか見た幻想ははーるかー、頼りなく揺れる火は永遠の籠の
中。』

『出口なき現実は一こーこーにー、結晶は歪むノイズ掻き消して鮮明
に。』

ここで僕と涼はキーボードとギター、そして僕達自身も空中に放り
出し、リズムを打った。

『『夜を越え、境界線を見るいつかの記憶を手繰り寄せ。いつまで
も、そこに在り続ける夢に身を委ねて。』』

こうして、僕達の演奏は終了し、その後には壮大な歓声がステージ

に向かって放たれた。

紅い館の大宴会

L e t ' s p l a y t h e m u s i c ! (後書き)

未「うわあ、結構なぐだぐだ加減。」

作「ちなみに出た曲ほとんどは作者が歌える曲です。」

未「ていうかネクロファンタジアは紫の曲でしょ？紫がやるかも知れないのに何でやったの？」

作「いや、結構考えた結果、ネクロファンタジアに落ち着いたんだ。一番無難策かな、と。」

未「最悪だこの作者……………」

作「では、まだまだ宴会のメインイベントは続きますよ！後はレミリア組とかです。因みに、二人の曲の候補には、天子の曲、ネイテイブフェイスがありました。」

未「そっちにしとけばよかったのに！では、また次の話で。」

紅い館の大宴会

主人達の大演奏（前書き）

一回全部本文が消えてしまうというハプニングにくじけず書いた！

涼
Side

紅い館の大宴会

主人達の大演奏

「ふう、疲れた……………」

「そりゃ、いつもとは違うやり方だったからな。」

俺達はステージから降り、胸を撫で下ろしていた。

「そういえば、フラン様がやると思っただが……………」

俺がそう言っていると、咲夜さんがステージに現れた。

「次は、この館の主人の妹様、フランドール・スカーレット様とその御友人の皆様です。」

「ちょうどみたいだね。」

フラン様が手を振りながらステージに上がってきた。

そこには、ギターを持っているルーミア、サニー、キーボードを設置している大妖精、スター、ドラムのスティックをまわしているルナ、そしてマイクを持っているフラン様と……………チルノ！？そういえば、ここのチルノはカリスマ溢れていたな……………

「え、チルノがボーカル？絶対人選ミスでしょ……………」

「見てれば分かる。」

ルナがドラムスティックでリズムを取り、四人が一斉に弾きはじめた。

バンドのようなリズムが流れ、フラン様が歌いはじめた。

『I wanna play with you once Ar
e you a fragile baby? If so, I
throw you away after use. I do
n't know why I'm alone now. Wh
y don't you play with me? Hey!
You can never refuse my askin
g.』

フラン様の流暢な英語の歌詞の後、チルノが歌いはじめた。

『Everything has the spot to be
broken away. I only know where
e it's hidden away. Comon baby
! Comon baby! Come in to my ha
nd. Oh, it's so easy to Grip a
nd Brakedown!』

チルノの発音の良さに俺と未奈斗が啞然としてみると、フラン様とチルノの二人でのサビが始まった。

『Let's get along baby, I'm nev
er insane. You must enjoy to p
lay this game more and more an
d more. Hey! How are you feeli
ng? It's funny isn't it? Never
ever to be seen, the game! Le
t's get along baby, beautiful
fire works. You can never run

away because we're the friends .
So , don't mind to be dead , pl
ay the funny game , yeah ! Grip
and Brakedown ! Fire works ton
ight !
」

二人の歌が終わり、ギターが響いて曲の終わりを告げた。ステージには、惜しめない拍手の嵐が降り注いだ。

「皆様、これが最後の演奏です。我が主、レミリア・スカーレット様が演奏されます。」

今度は咲夜さんはステージから消えず、そこにパチュリー様、小悪魔、レミリア様、美鈴が上がってきた。「さて、何の曲かな？」

「おいおい、レミリア様だぜ？分かるだろ？」

咲夜さんがシンセサイザーを操作し、何回も繰り返すリズムを打ちはじめた。

美鈴はドラムを叩きはじめ、パチュリー様はキーボード、小悪魔はギターを弾きはじめて、レミリア様の歌が始まった。

『時の中にただ、漂う我が身よ、安らかに、眠る日を、待ち焦がれている。古城の片隅、咲き誇る薔薇よ、儚さと、切なさで、満たさ

れて散れ。』

「あれ？こつち……………」

「お前は何を期待していた。鬼畜姉妹と受難メイドでも期待していたか。」

『立ち塞がるものは刹那に消えて無くなればいい。この体に触れる事もさせずに引き裂いてあげるから。』

一瞬、音楽が止まり、爆発的にサビ部分が始まった。

『廻りはじめた、運命がもし、この手を離れ、旅立つとしても。儚く消える、魂ならば、私の中で、悪戯に踊れ。』

レミリア様が歌い切り、咲夜さんのシンセサイザーとパチュリー様のキーボードがフェードアウトし、曲が終わり、今までで一番大きい歓声が巻き起こった。

「レミリア様、フラン様。お疲れ様です。」

「二人とも上手だったよ。」

「当然よ。」

「えへへ……………ありがと、二人とも。」

俺達は今、レミリア様とフラン様を含めた四人で、紅魔館の屋根の上で談笑していた。

「そつえば、なんでこんな急に宴会なんかしようと思ったの？」

「やりたくなったからよ。それ以外に理由は無いわ。」

「そつか……………」

「フラン様、御友人のチルノさん。いつもはどんな方なんですか？」

俺がちよつと気になった事をフラン様に聞いてみた。未奈斗も興味津々な顔でフラン様を見た。

「チーちゃん？チーちゃんはとっても頭がいいんだよ！この前、えーつと……………外の世界の本の内容で、ふえるまーの最終定理つてものを教えてくれたよ！」

「ぶっ！？」

「うそお！？」

フェルマーの最終定理って……………数学界屈指の難問を解いた定理だろ……………！？

「未奈斗……………ここのチルノはバカじゃない……………カリスマだ……………！」

「カリスマにも程があるよこれ……………しかも幻想郷だよ？元の世界より学力は低いはず……………！」

「あ、そういえばこの前、チーちゃんが博麗大結界の大きさを計算してたよ！」

「もうチルノ式神作れるんじゃない……………」

俺が呆れていると、俺と未奈斗の間に隙間が開いた。

「うわっ!？」

「こんにちは、レミリア。」

「あら、スキマじゃない。」

「もう、私にはちゃんと八雲紫って言う名前があるって言うてるでしょ？」

隙間から出て来た金髪の女性は、多分、俺達をこの幻想郷に落とした犯人……………

「それよりも……………一応、初めまして、よね。」

「ああ、初めまして、だな。」

「初めまして。スキマ妖怪、八雲紫。」

これが、俺達と紫の初めての対面だった。

紅い館の大宴会

主人達の大演奏（後書き）

涼「おお、急展開。」

作「前に紫が二人に会いに行くなってフラグを立たせたから、それを回収した結果だ。」

涼「つまりは、やっと核心に近付くと。」

作「そういうこと。次話は紫との会話がメインとなります。」

涼「では、また次の話で。」

五色の紡ぎ糸

白と黒（前書き）

短いですが、物語の核心をつく話です。

未奈斗 side

紫が僕達を落とした……………そう確信していた僕達は紫に聞いた。

「紫、貴女は僕達をこの幻想郷に落とした。それはあつてる？」

そう聞くと、紫は口元に持っていた扇子を降ろし、真剣な顔で話しはじめた。

「あなた達は確かに、私が落としたわ。でも、それは私の気まぐれでは無いわ。」

「……………どういうことだ？」

「そうね。説明する前に……………お二人は席を外してもらってもいいかしら？」

紫はレミリアとフランに向かっていい、レミリアとフランは空気を讀んだのか、頷くだけで屋根から飛び去った。

「さて……………今、私は気まぐれで落としたのではない、と言ったわね。つまりは、あなた達は落とされるべくして落とされたのよ。」

「僕達のどこに、落とされる理由があるのさ？今となつては落とされてよかったこともあるけど。」

「……………あなた達は”幻想”を知りすぎたのよ。」

「その”幻想” ってのはこの幻想郷の事か？なら俺達以外のやつも落ちている筈……………」

「いえ、あなた達はその中でも異質だった。あなた達は能力を発現してしまっていたのよ。」

僕達は首を傾げた。能力はこの幻想郷で発現したはずだ。

「ふざけないでよ。僕達は幻想郷で能力を自覚したんだよ。来るまで能力があることなんて知らなかったし。」

「そう、この幻想郷で”自覚”したのよ。”発現”したのは元の世界。未奈斗、あなたは元の世界で直ぐに感情が元に戻せたのではなくて？涼、あなたは皆がやっている事を真似できたでしょう？」

「なっ……………」

確かにそうだ。僕はどんなに嫌な事があってもその感情が次の日になれば無くなっていた。涼は僕達の東方プレイを見たらそのプレイを直ぐに真似できた。

「心当たりはあるでしょう？それは、能力の一端が既に出て来ていたのよ。」

「そうか……………だから、僕達は現実にはいなかった……………いや、それなら早苗は！？」

「早苗？……………ああ、あの巫女？あの子は人間では無いわ。現人神だから、能力をもっているもおかしいわ。」

「そういえばそうだったな。現人神だもんな。」

僕達が納得していると、紫がまた扇子を口元に持って行きながら言った。

「それと、私から今から頼みがあるのよ。」

「頼み？」

「そう。頼まれてくれるわね？」

「……………内容によるな。」

「そう？ただ……………今ここに異質な妖力がうごめいているのよ。この妖力をどうにかしてほしいのよ。」

「僕達に妖力関係を言っても……………」

「もしかしたら、あなた達が知っている異変かも知れないわよ？」

そう紫に言われ、考えると、涼が顔を上げて言った。

「分かった。翠夢想だ。未奈斗、どっかに口リ鬼がいるはずだから見つけてボコボコにするぞ！」

「連宴異変、てか。了解。じゃ、紫。何か見返りを要求するよ。」

「ふふつ。考えてあげるわ。」

そして僕は屋根から飛び降りた。

紫side

「さあ、この幻想郷の異変を全て知る者達よ。頼むわよ。あなた達が知らない異変が近付いているわよ。……………白と黒は招かれた。残りには三本。緑は自ら、黄は友を探す為、紫は自分を殺める為……………五色の物語の紡ぎ糸はまだ揃わない。揃った時、この幻想郷に異変が起こる。私はそれには関与出来ない。紡ぎ糸達の物語なのだから。」

私はそう言ってから、空を見上げた。

「ま……………今は今を楽しみましょう。さ、霊夢でも弄りにいきますか。」

スキマを開き、私はそのスキマに入った。

未「紫との対話なのに……………短すぎでしょ。」

作「これは私の力不足です、マジ申し訳ありません。」

未「まあ、何か紫が言ってたけど……………」

作「余り言わないでね。目茶苦茶考えてあんな中二発言になったんだから。」

未「はあ……………さて、次話はやっとな翠夢想です。」

作「久々のバトルシーンでグダグダになりそうですが、頑張ってくださいと思います。では、また次の話で！」

連宴異変

疎と密の概念を持つ者（前書き）

久々のバトルシーンです。上手く書けただろうか……

涼
s
i
d
e

連宴異変

疎と密の概念を持つ者

「どこだツルペタ鬼い！」

「いないね……………もしかしたら紅魔館のそとかもね。」

「じゃあ頼む！」

「うん、分かった！」

俺は紅魔館の外を未奈斗に任せ、紅魔館の庭を走り回っていた。庭では、酔い潰れた霊夢やパチュリー様達が倒れていた。

「ちっ……………どこだ!？」

「何をそんなに焦ってるんだい？」

俺が探していると、後ろから幼い声が聞こえ、振り向くといびつな形をした角を持った幼女がいた。

「あんたを探してたんだよ、伊吹萃香！」

「へえ、大方私のこの妖力だろ？」

「分かってんなら早くしまえ。強行手段に出るぞ？」

「ん、私は強者と戦いたいだけなんだよね。だから私と戦ってく

ればいいんだけど？」

「つまりは、強行手段、と。弾幕が御望みか？」

「いや、純粋な戦いさ。弾幕なんて面白くないじゃないか？」

「そうか。なら……………始めるか？」

「ああ、さ、行くよ！」

萃香が俺に向かって飛び出す。その速度はレミリア様を越えている。

「速……………っ!？」

「ほらほら、行くよ！」

萃香の拳が俺に当たる瞬間、俺は弱体化時止め……………時遅れを発動し、萃香の後ろに回り、フラタニティを振ると同時に解除した。

「食らえっ！」

「おおっ？」

俺が振ったフラタニティは萃香を切った……………筈なのだが、何故かすり抜けた感覚がした。

「甘いね。私の能力は疎と密を操る程度の能力。そう簡単に当たらせないよ？」

「ちい！」

俺は少しムキになりながら、時遅れと剣での突進の連続を繰り返しても、全てすり抜ける感覚がする。そこで、俺は一旦時遅れを止めた。

「さあて……何回も斬ってくれたみたいだけど、密度をスカスカにしておいたから、全然当たって無いんだよ。」

「くそっ！」

くそっ……どうすればいい……！？

未奈斗 side

「やばい、いないな………」

僕は涼に頼まれて紅魔館の外を探していたが、紅魔館から出た瞬間、なんだか圧力が無くなった感覚がした。その時に外にはいないよう

な気がしたが、それでも探した結果、いないという結論に達した。

「多分あいつは萃香との戦闘に突入しているはず……やばい、速く戻らないと……あいつじゃ、萃香は倒せない……！」

僕は急いで紅魔館へと飛び戻った。

涼side

「くっ、駄目か!？」

「まだまだ甘いねえ。そんなんじゃ私の密度じゃ当たらないよ?」

俺はさっきから何度も剣で切り続けているが……何の感触もしない。

「くそっ!どうすればいい……?」

「よそ見してる場合かい？」

「ッ！」

俺が考えていると、いつの間にか萃香を視界から外してしまったよう
うで、萃香はもう既に俺の懷まで潜り込んでいた。

「これで、終わりだね。意外と楽しかったよ！」

萃香の拳が俺の腹に突き刺さり、俺は一旦中に浮き、そのまま地面
へと吸い込まれて行った。

「ちく………しょう………」

朦朧とする意識の中、俺は、弾幕が俺の目の前を通り過ぎるのを見
た。

萃香 side

私がこの人間に拳を沈め、地面に落ちると、一息をついた。

「ふう。人間のくせに……なかなか楽しめた。」

そう言っていると、一発の弾が私に向かって飛んできたので、慌てて回避し、飛んできた方向を見ると、何か分からない物体を手に持ち、大きな上着を着た人間がいた。

「……………つぎはあんたかい？」

「そうなんじゃないかな。今そこに倒れている人と同じことを要求するよ、伊吹萃香。」

「そうか。なら、楽しませてくれよ？」

「概念を操る力、とくと見せてあげるよ！」

新たに来た人間は、手に持っている物体から弾を撃ちだし、それが、私の第二ラウンドの開始のゴングだった。

未奈斗 side

急いで来てみると、やっぱり涼はやられていた。僕は急いで萃香に宣戦布告と同時に上着から出した銃で発砲、その弾を萃香は密度を下げて避け、僕に突っ込んできた。

「あんまり涼と同じと思わないでね。『僕と萃香が零距离になる』事を破壊するよっ!」

僕が冷静に、かつ直ぐに言い放ってから空間を殴り、概念を破壊した。

「……………何をしてるんだい?」

萃香はこの能力を知らない故、拳を避けたそぶりもせず、期待ハズレだと言っているような目を向けて僕の懷で拳を突き出そうとしたが、

「なっ……………?拳が、動かない……………?」

「どうしたんだい?さあ、来なよ!」

「くっ!なめるんじゃないっ!」

そこから、萃香は連続して拳を放っていくが、全て僕が破壊した概念により届かない。

「あんた………一体何をした？」

「いったでしょ？僕と萃香が零距离になる事を破壊したんだ。つまり、今僕達は互いに触れられないのさ。」

「面倒な能力だねえ………！」

「お褒めの言葉と取らせて貰うよ。でも、これじゃ決着がつかないからね。」

そういつて、僕は萃香から離れ、拳を引いた。

「『僕と萃香が零距离にならない』概念を破壊、そして『僕は妖力を使って動くことが出来ない』概念を破壊！」

二回殴った後、そのまま萃香へと双短刀を持って飛び掛かった。

「ふん、つまり、今あんたは妖力を使用できる状態って事か。侮れないね！」

萃香は僕の双短刀の攻撃範囲から一旦逃れ、僕が着地した瞬間に突撃してきた。

「さあ、行くよ！」

「臨むところ！」

僕が萃香に双短刀を振り、それをかわした萃香が僕に向かって拳を放つ。それ残っている銃を操り防ぎ、また双短刀の連撃を放つ。正直、泥試合になりはじめた。

「ハアッ…………ハアッ…………」

「おや？疲れてきた見たいだね？」

泥試合になればなるほど僕には不利に動いていく。あいては底無しの体力があるが、こつちには限界がある。そこで、僕は賭けに出た。

「くっ…………『僕と萃香の距離が三メートルにはならない』概念を破壊！」

「何っ……………うわぁっ！」

無理矢理ほぼ零距离でやった強制距離延長に、僕と萃香両方が吹き飛ばされたが、僕は直ぐに体制を整え、次の行動に移った。

「これに賭ける……………！」

僕はその場に地面を叩き、尋常ではない量の砂埃を撒き散らした。

萃香 s i d e

私がいきなり吹き飛ばされたと思うと、次の瞬間には私の視界は砂埃でいっぱいになった。

「どこだ………？」

この時、私は焦っていた。先程の人間より遥かに強く、戦い慣れている。そんな奴に、私は恐怖を抱き、直ぐに終わらせようと躍起になろうとしていた。だから、聞き逃してしまった。

勝負を決める、あの一言を。

「『僕と萃香の距離が三メートルになる』概念を破壊、『僕と萃香の能力が十秒間だけでも共有できない』概念を破壊。」

次の瞬間に見えた奴は、一直線に私の身体をねらって大きな刀を振り抜いていた。私は避けられないと悟り、密度を下げようとしたが、なぜか直ぐに戻されてしまった。この現象に驚きを隠せなかった私は、奴の刀をもろに食らった

涼「俺負けた……………フラン様に示しがない……………」

作「おい、戻ってこーい。にしても、今回の投稿が過去最長記録。バトルシーンはやっぱり長くなってくれる。」

涼「俺よりも未奈斗の方が強かったんだな。」

作「あの時は未奈斗がちゃんと能力使ってなかったからな。」

涼「俺……………修業しようか。」

作「頑張ってくれ。では、次回はそのままあの異変に飛び込みます。」

涼「では、また次の話で。」

涼のショック解消

出来損ないの満月（前書き）

今回は、前回やられてしまった涼君のお話です。

チルノside

「……………」

「ちょっと涼！落ち込み過ぎじゃないの!？」

「涼……………大丈夫……………?」

「はぁ……………よっぽどショックだったようね……………」

あたしが紅魔館にフランと遊ぼうって思っで行くと、フランの部屋にたどり着く前に、何だか物凄いオーラを放っている部屋があったから開けると、そこには心配そうにみるフランと呆れる咲夜さん、そしてオーラの元凶である涼がいた。

「フラン、これ何時からこうなってるの?」

「えーと……………今日起きたらこうなって……………」

「つまりは原因は昨日、かぁ……………」

「私が聞いた話だけど、涼は昨日鬼と戦って負けたらしいわ。そのショックじゃないかしら?」

「かもねえ。」

そう聞いて、あたしは一つ、考えが閃いた。

「涼！今からあたしと弾幕ごっこしなさい！」

「……………え？」

少しだけの反応をした涼をあたしは紅魔館の外へと連れ出した。

涼 side

俺が暗いオーラを放っていると、チルノに無理矢理連れ出され、弾幕ごっこをすることになった。

「さあ、本気で来ないと……………怪我するよ。」

チルノの声が途中から低くなったことから、本気であることが分かった。俺も暗い雰囲気何とか取り払い、いつも背中差しているフラタニティを構えた。

「じゃ、やるか。」

「あたしの最強の弾幕を受けきってみろ！」

チルノから放たれたのは、L u n a t i cでも放たれないであろう、隙間はあるが、その先を読まなければ避けられない弾幕だった。

左、右、上、右斜め上前、後ろに下がってから左斜め下等、立体的に避けなければ被弾する。これがゲームなら開始二十秒の今でグレイズを50回以上している。そんな避け方をしながら俺はフラタニティを振って弾幕を放っていった。

「ふーん、なかなかやるじゃない。時々こっちに避けにくい弾幕撃つて来るし。」

「お前の弾幕が細かすぎて上手く撃てないがな！」

「それもそうね。じゃあ、最初のスペルカード！」

チルノは弾幕を途切れさせることもせず、そのまま移行するようにスペルを発動させた。

「氷符『アイシクルグレネード』ッ！」

「!？」

俺は聞き覚えのないスペルに一瞬動揺したが、直ぐに平常心に切り替え、スペルの弾幕を待った。

「避けなくていいの？来るよ。」

チルノの言葉に辺りを見回すと、自分の上に巨大な氷塊の形をした弾幕があり、慌ててその場から離れた。

「ほらほら、まだまだ避け続けなよ！」

「っ！」

俺がさっきまで居た場所で、氷塊は散開し、全方向に弾幕を展開すると同時に、またも巨大な氷塊が俺の上に出現した。

「まさか……………これがずっと続くだけ……………？」

「そんなわけないに決まってるじゃない！一回使った弾は何回も使いまわしをするのよ！」

その言葉通り、また俺が避けると、氷塊が散開するだけでなく、先程放った氷塊がホーミング弾となって全てが襲い掛かった。

「くっ！」

段々と増えていく氷塊と氷片は、フラタニティを振って破壊しなければ避けられないレベルまでになっていた。

「さーで、ラストっ！」

チルノの掛け声と共に今までの氷片が一旦離れ、俺の回りに球体状に並んだ。

「いけえっ！」

圧倒的、その表現が一番正しかった。一気に漂っていた氷片が俺に襲い掛かった。先程のように、フラタニティで破壊しようとしても、破壊した後の破片が今度は襲い掛かって来る。

「くそっ……………！」

俺は悪態をついてから、懐からスペルカードを取り出し、宣言した。

「禁恋『アカインドスパーク』！」

俺の回りに何個も光の球が現れ、迫り来る氷片に向かって極太の光線を放った。このスペルは、魔理沙のマスタースパークを模倣したもの。その破壊力は健在で、氷片を一気に消し飛ばし、チルノへと襲い掛かった。

「う、嘘！こんなの、避けられ

」

最後まで言葉が発せられる前に、光線はチルノを飲み込んだ。

「どう、涼？少しはすつきりした？」

「ああ、ありがとうチルノ。」

どうやら、俺のモヤモヤを解消するために弾幕ごっこを仕掛けたい。やはりこのチルノ、カリスマだ。

「さ、て。こっちから一つ頼みがあるんだけどいい？」

「ああ。貸しがあるからな。何だ？」

そう俺が快諾すると、チルノは嬉しそうに話し出した。

「実は、この頃月がおかしいの。」

「？月が？」

「そ。あたし達妖精や妖怪は月によって強さが変わり、満月になるほど強くなる。しってるよね？」

「ああ。」

「続けるよ。そんなあたし達がこの頃満月になっても調子が悪いんだ。」

「……………あ。」

ここで、俺は分かった。これは、あの異変だ。

「ん？何か分かった？」

「よし、レミリア様に今から許可もらって解決して来る。」

「え？どういこと？」

困惑するチルノに、俺は言い放った。

「異変だ！」

俺は紅魔館へ戻り、レミリア様の部屋のドアをノックした。

「入って、ちょうど呼ぼうと思ったのよ。」

「はい。」

レミリア様の部屋に入ると、咲夜さんが待機していた。

「さて、まずはそちらから用件を話して。」

「実は、もう御存じかもしれませんが、満月になっても力が出ない
と言う異変が発生しまして。」

「ああ、なら用件は同じよ。私もその事で呼ぼうと思ったのよ。話
が早いわ。咲夜、涼。貴方達でこの異変の首謀者を見つけ、この異
変を解決しなさい。いいわね？」

「はい。」

「了解しました。」

俺と咲夜さんは返事をする、一礼してレミリア様の部屋を出た。

「さて、貴方は大丈夫なの？」

咲夜さんが心配そうに聞いてきたので、元気な声で返した。

「もう大丈夫です。でも、満月にならない理由を突き止めるには、この夜中に解決しなきゃいけないんですよ。」

「ええ。ちょうど今日は満月。急ぐわよ。涼、どこに行くの？」

「まずは……………この森を抜け、人里に向かいます。」

「分かったわ。それと、貴方は妹様に一言言ってきたさいよ？」

「あ、そうですね。」

俺はフラン様の部屋へと向かったが、フラン様はすぐその廊下を歩いていたので、そこで声を掛けた。

「フラン様！」

「あ、涼。大丈夫？」

「はい。もうすっかり。そこで、今からちょっと問題を解決しに行ってきますから、一言言っておこうと思ひまして。」

「そうなんだ……………涼、絶対、帰ってきてね。」

「はい。もちろんです。」

そう笑顔を向け、フラン様に手を振られながら咲夜さんの場所に戻った。

「早かったわね。ちゃんとやってきた？」

「はい。さ、いきましよう。夜が明けてしまいます。」

「そうね。」

こうして、俺達は異変

永夜異変の解決に向かった。

作「初、主人公キャラ以外のキャラが前書きのsideになる！」

チルノ「それがあたしってことは、やっぱりあたしったら最強ね！」

涼「チルノめちゃくちゃ強かった……まだスペルあったみたいだし。」

チ「手のうち全て見せる程バカじゃない！」

作「？好きの皆さん、申し訳ないです。私の中ではカリスマなんです。」

涼「次の話では、ついに永夜異変か。」

作「永夜異変……多分、霊夢達との戦闘は省きます。原作持っていないから……」

チ「はぁ……こんな作品だけど、また次話もよろしくね！」

涼「では、また次の話で。」

作「私の台詞ー！」

永夜異変

永い夜にお似合いの雀（前書き）

どうも。今回は久々の弾幕描写。やっぱり難しい……

未奈斗 side

永夜異変

永い夜にお似合いの雀

「アリス、何だか調子悪いね。」

「ええ。満月の日はいつも上海達を総動員できるのに……おかしいわね。」

僕はアリスと二人で森を散歩がてら魔法の実践をしていた。あ、僕も少しなら魔法が使えるようになりました。

「一応、僕はまだ人間だからね。あんまり分からないけど、魔法が出しにくい感じはするね。」

「私は何故か分からないけど新月の日より不調よ……」

僕はふと満月が照らす夜空を見上げ、呟いた。

「満月じゃないのかなあ……」

そして、自分で言ったことにハツとした。これは……！

「アリス、これは確か異変だよ！」

「何ですって？貴方が言っていた次に来る異変？」

「うん、永夜異変。満月の本当の一部分が欠けて、満月じゃ無くなるんだ。」

「なら、その犯人をボコボコにするわよ。未奈斗、行くわよ!」

「あ、ちょっと待って!.....よし、全部ある。じゃ、行こう!」

こうして、僕とアリスは夜の魔法の森を低空飛行で翔けて行った。

少年少女移動中.....

「アリス?」

「.....何かしら?」

「何で僕達まだ魔法の森から出てないの?」

「.....やられたわね、あの雀に。」

僕達は何故か魔法の森から出られておらず、どんどん奥に行き、さらには視界も悪くなってきている。

「あー、もう。これ概念じゃないと思うから破壊しようにもできないし。」

「本当ね……出て来なさいよ、夜雀。」

アリスが言うと、人影が向こうから現れてこちらに来た。

「あ、今日のご飯は魔法使いと人間か。どっちも美味しそう!」

「そう簡単に食料になる気は無いわよ?」

「フルボッコにするよ、こんな所で油売るわけにもいかないしね!」

夜雀の怪 ミスティア・ローレライ。

「こんなに綺麗な夜だもの。月見の摘み位にはなってよね。」

「アリス、僕に任せて。準備運動しなきゃね。」

「分かったわ。」

僕は弓を持って、アリスの前に立ち、ミスティアと対峙した。

「行くよ、ミスティア・ローレライ。」

「何で私の名前を知ってるか分からないけど、忠告しとくよ。歌が綺麗だからって油断しないようにね。」

ミスティアが言うと同時に、高速の直線弾幕が展開され、僕は避けながら弓から連続して矢をミスティア目掛けて発射した。

「そんなに少ないのは当たらないよ。」

「だろうなあ。でも未だにスペル使わなきゃ弾幕出ないし……………」

「なら、さつさと私のご飯になれ！」

そして、ミスティアはスペカを取り出し、宣言した。

「暗符『ブラインドサービス』！」

「そんなサービスいらないよ！」

宣言の瞬間、僕の悪かった視界は更に遮られ、ミスティアの姿が見えなくなった。

「何なのよこのスペカは！？殆ど見えないじゃない！」

「僕もこのスペカは見覚えが無いんだ！とりあえず、見えたら避けるしか無い！」

そして、遂に弾幕が僕の視界に入ってきた。入ってきた弾幕は、直線弾幕が機関銃のように連射されたものだった。

「見えない程じゃない……………この弾幕が飛んできた方に矢を放てば！」

僕は直線弾幕がとんでくる方向を感覚で掴み、矢を放った。

「おっと……………私の居るところがわかるなんて、なかなかやるね。」

でも、当たらないよ！」

「くっ……こうなったら、ブレイクまでかわしつづけるか……」

僕が言った時には、既に二十秒が経過していた。しかし、スペル内容が変わることも無く、機関銃のように連射される弾幕のみだった。

「よし……行ける！」

そして、視界が晴れ、ミスティアが佇んでいるのが見えた。

「やるね、お兄さん。でも、これで終わりだよ！」

そして、ミスティアは連続してスペルを発動させた。

「やばいつ………！」

「遅いよ！暗符『盲目のセイレーン』！」

またもや、視界が遮られ、ミスティアが見えなくなるが、今回は何かが違う。僕の第六感がそう告げていた。

「さあ……耐えてみてよ！」

次の瞬間に僕を襲ったのは、先程よりも大量の直線弾幕、そしてその後に残された大量の自機狙い弾だった。それを全てグレイズして避けると、次は避けるスペースの無いような高速直線弾幕が展開された。

「くそっ………！」

「ほらほらあ！早く当たりなよ！」

僕は堪らず、スペカを発動した。

「くらえ、壊符『四方滅陣』！」

スペルが強制解除され、視界が無理矢理広がり、ミステリアの姿が確認された瞬間、ミステリアの前後左右に弾幕を展開する。

「行け！」

まずは前からの連続高速ランダム弾がミステリアを襲う。ミステリアはそれを軽々と避けていたが、十秒経った瞬間、左からゆつくりと迫る自機狙い弾が。この二種類の弾幕でミステリアは少し焦りはじめた。

「くっ……………中々きついわね。」

「まだまだだよ！」

更に十秒。右の弾幕も動き出し、右からは小さな弾を大量に吐き出し、ミステリアの周り何箇所かに飛んで行き、そこで待機した。

「自爆狙い弾……………！」

「さあ、最後だよ！」

ミステリアは焦りで周りが余り見えなくなっていた。その為、後ろにも弾幕が展開されているのを失念していた。自爆狙い弾が吐き出

されて十秒、後ろから高速直線弾幕がミスティア向かって飛び出した。

「え……………後ろからも……………！」

そして、四種類の弾幕が、一斉にミスティアを襲った。

僕は四種類の弾幕が一気に被弾したミスティアを地面に座らせ、安否を聞いた。

「大丈夫？ミスティア。」

「うん……………あーあ、ご飯……………」

と、ミスティアが残念そうな顔で呟くと、アリスが隣でため息をつきながら話した。

「はあ……………今度うちで何か作ってあげるから、我慢しなさい。」

「本当！？」

「ええ。勿論、未奈斗がね。」

「でしょうね。さ、アリス、今度こそ行こうか。」

「ええ、ミスティア、いい子にしてるのよ。」

アリスが頭を撫でながら優しく言うと、ミスティアは目を細めながら頷いた。

「うん。じゃあね、お兄さん、お姉さん。」

「あ、僕は日向未奈斗って名前があるからね。」

「私は、アリス・マーガトロイドよ。」

「分かったよ。じゃあね、未奈斗、アリス。」

こうして僕達はミスティアと別れを告げ、先に進んだ。

「未奈斗……あの竹林、怪しくない？」

「そうだね、行ってみる？」

そして、魔法の森から少し見えた竹林。そこが怪しいと踏んで、僕達は飛んで行った。

永夜異変

永い夜にお似合いの雀（後書き）

未「お、新しいスペルだ。」

作「この現実的にしかありえないスペルになりました。因みに、ミステリアのスペルは携帯版の東方から持ってきました。」

未「だから見覚えが無かったんだ。」

作「私は盲目のセイレーンが避けられなくて……いや、まずNormalシューターでも無いんですが。」

未「Normalシューターでも無いのにLunaticやつちゃ駄目でしょ!」

作「自重します……では、次は涼、咲夜ペアのお話です。」

未「では、また次話で!」

永夜異変

守護者とのすれ違い（前書き）

長い間更新できなくて申し訳ありませんでした！
しかもテスト中に無理矢理書いたのでグダグダ感が物凄いかもしれませんが、暖かく見守って下さい。

涼side

永夜異変

守護者とのすれ違い

俺と咲夜さんは紅魔館から霧の湖を過ぎ、人里へと向かっていた。

「涼、人里に行って何をするの？人里が原因な訳は無いでしょう？」

「はい。まず、人里の守護者に何が起きているのかを聞かなければ。元の世界と完全に合致している訳では無いかも知れませんし。」

「そうね。」

咲夜さんが相槌を打つと、俺はすこし顔を強張らせて言った。

「ただ………一つだけ不安要素が………」

「どうしたの？」

「守護者の気が立ってれば、穏便に話し合いで済まない可能性があります。そうなったらそうなったときですけどね。」

「その場合は弾幕で叩きのめすだけよ。」

「ははっ、そうですね。」

そう言い合つと、人里に向かっていくスピードを上げた。

少年少女移動中……

「おかしい……………」

「ええ、おかしいわね……………」

俺と咲夜さんはずっと人里の方向へと飛んでいるし、スピードも上げているのだが、人里に着くことはおるか、見えやしていないのだ。

「どうしてだ……………」

「む、怪しい気配がすると思ったらお前達か。」

俺が呟くと同時に、俺達二人の横から厳格な声が聞こえてきた。

「あら、人里の守護者である者にもかかわらず、人里をほっぽりだしているのかしら？」

「既に人里は隠してある。問題は無い。」

歴史を食べる半獣、上白沢 慧音。

「慧音さん、俺達はまず人里に行かなきゃならないんだ。出来たら戻してくれないか？」

「それは出来ない。まだ違和感が残っているし、お前達は一度異変を起こしている。だからこんな時は余り信用できない。」

「…………じゃあ、力ずくで戻してもらおうわ。涼、私に任せて。」

「分かりました。頼みますよ、咲夜さん。」

そう言つて俺は一步分下がり、慧音さんと咲夜さんが対峙した。

「さ、どこからでも来なさい。」

「その余裕、へし折つてやろう！」

二人は、弾幕を一齐に発射し、互いに距離を取った。

「さあ、さつさと決めるわよ！」

「私をあんまり舐めるなよ！」

咲夜さんのナイフが慧音さんへと放たれるが、慧音さんは何処に来るか分かつていたように回避する。そして慧音さんからは一定のスピード、そしてコースを走る弾幕が放たれる。

「なかなか避けにくい物を撃つわね……………」

「お前が弱いだけではないのか？」

「あら、先生が年下に挑発かしら？」

「ふん、お前に使うほど挑発は安っぽい物ではない！」

その言葉と共に、慧音さんはスペルを取り出した。

「悲劇『火産霊の誕生』！」

直後、慧音さんの回りに球体が発生し、そこから剣の形をした弾幕が放たれた。

「……………何も無いわね。」

「咲夜さん、剣から目を離さないで下さい！」

咲夜さんが一瞬、剣から目を離しかけた時、そう叫ぶと同時に、剣から弾幕が放たれた。

「なっ！？」

「慌てないで下さい！あの弾幕の隙間を縫って行けば何とかかなります！」

咲夜さんは一瞬戸惑いを見せたが、何とか弾幕の間を通っていく。

「やってくれるわね……………」

「ふん、油断していただけだろう？」

「そう、ね！」

球体から次々と剣が現れ、そして弾幕を放っていく。慧音さんからも大きい球体弾幕が放たれ、咲夜さんの逃げ道をじわじわと削っていく。

「くっ…………仕方ないわね。」

咲夜さんはそう呟くと、メイド服からスペカを取り出し、発動した。

「食らいなさい、幻符『ジャック・ザ・リッパー』！」

「なっ…………？」

咲夜さんが発動したスペルに、俺は聞き覚えが無く、どんなスペルなのか分からなかった。

しかし、直ぐにこのスペルがとんでもないものだということになった。

「切り裂かれなさい。」

スペルを発動した為、慧音さんのスペルが解除され、次の瞬間、俺の目に映ったのは、おびただしい数のナイフが慧音さんの回りに不規則に並んでいた。

「くっ……………！」

「さあ、よけられるかしら？」

その言葉とともに、ナイフが慧音さんに襲い掛かった。だが、全てのナイフが不規則に並んでいるため、明確な避け方が分からない。慧音さんもそのことで戸惑っているようだ。

「くっ………咲夜、いつの間にかここまで………」

「私は、完璧なメイドでいなければならないの。そのために必要だった。それだけよ。」

「成る程な………しかし、まだ終わるわけにはいかない！」

慧音さんは避けながらスペルを取り出し、頭上に掲げた。その時、俺はスペルの名前がちらりと見え、咲夜さんに叫んだ。

「咲夜さん！あれはヤバイ！」

「上等よ。来なさい！」

「いい心掛けだっ！想符『黄泉国の悲劇』！」

スペルが強制解除され、咲夜さんは真剣な目で慧音さんを見た。そして、咲夜さんの左右に弾幕の壁が展開された。

「……………これだけかしら？」

「そんなはずは無いに決まっている。さあ、受けられるか！？」

慧音さんの周りから、球体弾幕、円盤弾幕、そして銃弾型弾幕が咲夜さんに先程と同じようにじわじわと迫って来るが、咲夜さんはそれを慌てずにかわし、左右にあった弾幕の壁が崩れて行った。

（今！）

咲夜さんはこれを見て、一気に慧音さんへと詰め寄ろうとした。が、

「まだまだ甘いぞ。」

慧音さんの前にまたもや弾幕の壁が出来ようとしていた。

「くっ……………こうなったら……………！」

咲夜さんは持っていたナイフを弾幕の隙間を通らせ、慧音さんへと思いつき投げつけた。慧音さんは弾幕の隙間を通つてくるとは思わなかったらしく、驚愕の顔を浮かべ、そのナイフに被弾した。

涼「やつと更新したと思ったら凄い低クオリティだな。」

作「言わないでくれ……………必死こいて考えて書いた結果がこれだ。」

涼「まあ、更新をずっとほっぽり出すよかマシだけども……………」

作「それに、慧音のバトルシーンは難しいんだよ。つか弾幕シーンの描写が難しい。」

涼「おい。それなら弾幕ごっこじゃなくて完全格闘バトルにすりゃよかったじゃねえか。」

作「……………ちよつと次から考える。」

涼「そうしてくれ。次話は未奈斗達だな。」

作「そしてあの苦労人が登場。あのキャラが一番難しそう……………」

涼「あまり期待はしないで下さい……………では、また次話で。」

永夜異変

狂う程に赤い瞳（前書き）

アリスファンの皆様、真に申し訳ありません！

未奈斗 side

「未奈斗、ここは……………」

「よし、ビンゴみたいだ。」

「本当に？……………はあ、何でよりによって迷いの竹林なの……………すでにやられてるじゃない。」

僕達二人は竹林に入って数分進むと、いつの間にか迷ってしまっていた。

「やっぱり厄介だなあ……………同じ竹に見えるし、何より方向感覚がやられる。」

「私の方向探知魔法も何故か機能しないしね。はあ……………」

僕達は戻る訳にもいかない為、竹林を高速で移動していた。

「あ、アリス。もしかしたらだけど、この竹林には有り得ない程の数の「キヤアアツ！」……………罾があるかも知れない……………」

「そうなら早く言ってよ！後降ろして！」

僕が言いかけた瞬間にアリスが縄の罾に引っ掛かり、木の下に吊り下げられている状態になってしまった。

「ごめん。今降ろすよ。」

そういつて僕はチャクラムを投げようとするが、一旦止まってアリスに言った。

「もしかしたら二重トラップかも知れないから、僕が切った後、すぐに飛べるように準備しておいて！」

「分かったわ。早く切って！」

僕はチャクラムを縄に投げ、アリスを自由にした。アリスもすぐに空中に浮かび、事なきを得た。

「ハア……………何なのよこの竹林は！」

「多分、悪戯兎がやったんだと思うんだ。確かいたはずだし。」

僕がそういうと、アリスから何か黒い、いや、どす黒いオーラが発せられた。

「フフフ……………見付けたら……………」

（うわぁ……………これだと勘違い起こりそう……………まあいいか。そうになったら棚から牡丹餅だし……………）

僕が心の中で思っていると、竹林の向こうに”ピンと立った”耳が僕とアリスの目に映った。

「フフフ……………研究材料……………」

「ア、アリスーッ！」

僕は知っているから無視したが、兎としか聞いていないアリスは突撃して行った。

「あーあ……………」

僕はとりあえずアリスの進行方向にあつた罠をチャクラムと銃で破壊した。

少女暴走中……………
アリス side

私の目の前には兎の耳を付けた意味が分からない服を着ている女がいた為、とりあえずスペルを発動した。

「私の実験材料になりなさい！絆符『親愛の外来製人形』！」

私の目の前に黒いフードを被った人形が現れ、チャクラム型、矢型、

「フッフ…………早く堕ちなさい……………」

「だから私が何をやったって言うんですかああ……………」

「…………ほつとこうかな。でも話が進まないし……………」

うどんげがもうアリスの人形にやられるがままになっていたので、僕はとりあえず、アリスの近くに行き、アリスを後ろから拘束した。

「離してよ未奈斗！私はまだやりたりないのよ！」

「アリス、多分その人は兎違いだよ！それに、続けてるとずっと話が進まないよ？」

僕がそういうと、アリスは落ち着いたのか、人形を操るのを止めて、先程までボコボコにされていたうどんげを見た。

「ふう…………ごめんなさいね。私としたことが我を忘れていたみたいね。」

「は、はい……………」

「あなた…………この竹林に罾を仕掛けた兎を知っているかしら？知っていたなら案内してくれないかしら？」

そう笑って言うアリスの顔には、満面黒い笑みがあり、それをみたうどんげは首をブンブンと縦に振り、僕達の前に立った。

「さ、未奈斗。行きましょ。」

「う、うん……」

……教訓、女の方は怒らせてはいけない……
そう思った僕は、うどんげの横に立って話し掛けた。

「大丈夫……？」

「ひゃあっ！？は、はい……」

「まあ、さっきまであんなことがあったから驚くのも無理はないね
……」

「す、すみません……」

「まあいいや。案内、よろしくね？」

「は、はいいゝ……」

僕も黒い笑みを浮かべて言うと、うどんげがまた怖がってしまった。
……なかなか楽しいかも。

「未奈斗、とつさに聞いてみたけど、この兎、信用して大丈夫なの
？」

「うん。しかも上手く行けば敵さんの本拠地にいけるかもよ？アリス、いいことやってくれてありがとう。」

そういつて笑いながらアリスの頭を撫でた。すると、アリスの顔が赤くなっていった。

「ふにゃ……………はっ！」

「……………この異変が終わったら、話があるよ。」

うどんげはこっちを見て、さっきとのギャップをみて呆然としていた……………

永夜異変

狂う程に赤い瞳（後書き）

未「おい作者アアッ！」

作「反省はしている。しかし後悔はしていないッ！」

未「しかもアリス……………」

作「永夜異変が終わり次第、進展させるつもり。御期待下さい！」

未「さて、多分次はこうなった元凶だね。」

作「では、また次話でお会いしましょう。」

永夜異変

幸せあるほど畏がある（前書き）

短くてグダグダ感が。まだ感覚が戻らない…………

涼
s
i
d
e

永夜異変

幸せあるほど畏がある

「さてこの糞兎いいい！」

「ふふん、捕まえてみな！」

「涼！はやく捕まえて！頭に血が……………！」

今俺は、あの悪戯兎……………因幡てゐを追っている。咲夜さんはてゐのトラップにより、鋼鉄製の檻の中で宙吊りになっていて、その檻を開ける鍵をてゐが持っている為、今の状態になっている。しかし、なんであの咲夜さんがトラップに掛かってしまったのか。これは十数分前に遡る。

俺達が迷いの竹林に入ってから数分後のこと。咲夜さんは立ち止まって俺に聞いた。

「涼、ここで合ってるの？」

「多分、ですけどね。迷いの竹林内部の屋敷に、首謀者がいるはずです。」

「はあ……………何でこんな所に住んでいるのかしら……………」

そういつて、咲夜さんは一歩踏み出そうとしたが、足を空中で止めて引き戻した。

「涼、畏よ。」

「みたいですな。しかも、いつの間にか俺達の周り全体に畏がありますね。」

そう。俺達の周りに畏の起動装置が張り巡らせてあった。先程まで畏がこの辺りに無かったことを考えると、十中八九、あの悪戯兎の仕業だろう。

「俺が見てきましようか？」

「いや、私が行くわ。時遅れだと誤って作動させるかもしれないでしょう？」

そういつて、咲夜さんは時止めを発動させた。

咲夜 side

「さて……………どうしようかしら。」

私は時を止め、辺りを見回して罾が何処にあるかを把握し、その中の一番被害のなさそうなものにナイフを投げ、涼の元に戻り、時止めを解除した。

「今、一番遠くの罾の起動装置を破壊してみたわ。」

「そうですか……………」

そう涼が返した瞬間、私の目に映る景色が反転し、鉄の棒が私を囲んだ。

「なっ!?!」

そう。私は罾に引っ掛かってしまった。

涼side

どうやら、全ての罫の起動装置が一つの罫に引っ掛かっていたようで、咲夜さんが俺の目の前で宙吊りになり、いきなり出現した鋼鉄製の檻に囲まれた。

「っ！そういうこと……………！」

「今助けます！」

俺がフラタニティを振ろうとした瞬間、幼い声が響いた。

「止めておいたほうがいいよ。その檻、高圧電流が流れているよ。」

「

「ッ！？」「」

俺が振ろうとした腕を止めて振り向くと、黒い笑みを浮かべたてゐがいた。

「くしししつ。鍵はここにあるから欲しかったら私を捕まえてごらん？」

そして、冒頭に話は戻る

「くっ………ちょこまかと………！」

「くししっ、罨に引っ掛からないようにご注意を」

てゐはそこら中に罨を撒き散らしながら俺から逃げているため、俺は迂闊に深追いできない。しかし、てゐの逃走範囲もどんどん狭まっているのも事実。俺は弾幕をある程度撃ち、逆にてゐを罨に掛けようとしている。

「くそっ！」

「あーあ、なんだか飽きてきたなあ………」

てゐがそう言いながら頭の後ろで手を組んだその一瞬を俺は見逃さず、ありったけの弾幕を撃ち込んだ。

「食らえっ！」

「うわぁっ!？」

てゐは大量の弾幕に驚き、咄嗟に横にステップをした。

「よし、チェック！」

そして、ステップした先には、てゐが自分ではらまいていた罨があり、てゐはその罨を自分で踏んでしまった。

「うぎゃああっ!？」

ガアン、という音の後にてゐの悲鳴が。…………どうやら、金だらいの畏だったようだ。そして、てゐがふらつきながら地面に手をついた瞬間、てゐの姿が消えた。

「うわあああ……………ごめんなさいいいい……………」

今度は落とし穴が。てゐは謝罪の言葉とともに消えて行つた。……………てか何メートルあるんだこの穴!？」

なんだかパツとしない終わり片でてゐを何とか下したが、俺はあることに気が付いた。

「あ……………鍵もろとも落ちたか……………?」

そつ。咲夜さんの鍵。あれがなければ本末転倒である。しかし、まとも俺はあることに気が付いた。

「鍵が必要なんだつたら高压電流は嘘なんじゃ……………?」

そつと分かった、俺は咲夜さんの元に急いで戻つた。

「……………」

「咲夜さああん!？」

咲夜さんは意識を失っており、俺は慌ててフラタニティで檻を切り付けた。

「あれ……………」

すると、紙を切るかのようにあっさりと切れ、檻は破壊された。

「まさか、高圧電流どころか、鉄製ですら無かったのか……………」

そう呟くと、急いで咲夜さんの縄を切り、地面に寝かせた。これは……………重症だな……………

少年介抱中……………

永夜異変

幸せあるほど畏がある（後書き）

涼「咲夜さん大丈夫か！？」

作「大丈夫だ。問題無い。後々アリスと同じパターンを入れる。」

涼「まっつっつたく問題くないよ！ありまくりだよ！」

作「しかし、テスト期間でのブランクがかなり効いています。早く直したいです。」

涼「早くしろよ……じゃ、次話はついに永遠亭だな。」

作「まずはあの人から！そう、助ける人！」

涼「完璧ネタバレじゃねーか！では、また次話で。」

永夜異変

千発千中の薬師（前書き）

薬師は強し。

未奈斗side

僕達がうどんげに案内を頼んで（脅して？）、たどり着いた先には永遠亭があり、うどんげは震える声で話し出した。

「ここです……………」

「はい、ありがと。もうどっかいていいよ。」

「次は無いと思うことね……………」

アリスが言った後、うどんげはもの凄い速さで竹林の中へと逃げに行った。あれ？うどんげは中に住んでたよね……………？

「さて……………ここからは引き締めて行かないとね。」

「ええ。この中にいるのね。首謀者が。」

「うん。さ、行こう。」

そして、僕達は永遠亭の中へと足を踏み入れた。

「ぐっ、壊符『四方滅陣』！」

「邪魔よ！絆符『親愛の外来製人形』！」

永遠亭に入って五秒位すると、もの凄い数の武装兎が僕達に襲いかかり、僕達はスペルで応戦していたが、段々と追い付かなくなってきた。

「くっ…………アリス、ちょっと伏せて！」

「ええ！」

アリスが聞いてすぐに伏せ、僕は新しくスペルを作り、宣言した。

「吹っ飛べ、爆符『千連爆炎珠』！」

僕の周り全体にいきなり爆風が巻き起こり、伏せていたアリスと僕以外、つまりは武装兎全員が吹っ飛んだ。

「ふう…………危なかった。」

「なんとか、安全は確保出来たわね……………」

そうアリスが呟くと同時に、僕達二人は動いていないはずの廊下が軋む音がした。

「まずいな……………」

「どうしたの、未奈斗？」

「……………幻想郷最強クラスの人物がくる……………！」

次の瞬間、向こうの方の角から曲がってきた赤と青のナース服を着た人物が現れた。

「あら、珍しい客人ね。」

「うん。ま、病気じゃ無いけどね。」

月の頭脳 八意 永琳。

「そう？なら、さっさとお帰り申したいのだけど？」

「この異変を解決したら帰るからちよつとまってくれないかしら？」

「あら、交渉決裂ね。なら、力付くで帰っていただくわ！」

その言葉と共に、永琳の姿が消え去った。

「なっ！？」

「遅いわね。」

僕が気付いた時には、永琳の足が僕の鳩尾に突き刺さっていた。

「かは……………っ！」

「未奈斗っ！」

「他人の心配をする暇があるのかしら？」

「ッ!!」

アリスが僕に話し掛けた一瞬で、永琳はアリスの顔面を足で打ち抜き、アリスを地面へと叩き付けた。

「な……………っ。」

「弱いわね……………あなた達、この程度なの？」

永琳が余裕の表情でこちらを見ながら言った。僕は心が一気に折れかけたが、弓を取り出して永琳に向けながら言った。

「流石は幻想郷最強クラスの人物……………でも、負ける訳にはいかないんだ！」

「言うわね。そこまで言ったのだから、退屈な戦いだけはしないで頂戴ね！」

永琳も弓を構え、次の瞬間には、この廊下一帯に矢の嵐が巻き起った。

「あああああっ！」

僕は飛んで来たり、跳ね返って来る矢をかわしながら、永琳目掛けて何本も矢を放っているが、永琳はその矢を永琳が放つ矢で打ち落とし、更に矢が五本程一気に返って来る。

「言っただけはあつて、やっぱりなかなかやるのね。私の弓にここまで耐えた人間は居ないわ。」

「褒め言葉と受けとっておく……………よ！」

そう言うてはいるが、永琳は全く疲れた素振りをを見せていないのに対し、僕は既に息が切れ始めていた。

「くっ……………そおおっ！」

僕は自棄になりながら、永琳のしていることと同じこと、五本同時打ちを真似してみた。すると、全ての矢が真っ直ぐ飛んで行き、永琳の矢を打ち落とすことが出来た。

「やるわね……………火事場の馬鹿力ってやつかしら？」

「はっ……………はっ……………」

矢の嵐が止まり、僕は手を膝に当てて疲労感を表していた。

「あなたは良くやった……………だけど。」

「ッ！」

永琳の姿が揺らぎ、僕は飛んで来るであろう蹴りを避けようとしたが。

「私に挑むにはまだまだ早いわね。」

飛んだ所に永琳が現れ、蹴りが僕の鳩尾にまたも突き刺さった。

「なかなかやるわね、あの子。さて……………」

私が倒れたこの子を運ぼうとすると、横から弾幕が飛んできた。

「ハア……………ハア……………未奈斗には……………触らせないわ……………」

「……………相当、この子に惚れ込んでいるみたいね。」

「ふざけないで……………!」

「はぁ……………私は殺す気なんてさらさら無いわよ。この子を殺したくないから介抱するのよ。」

「信用できるとでも……………!」

「あなたも。そんなフラフラなのに。死なたいなら知らないけど。さ、どうするの?」

私が言うと、女の子は歯を食いしばりながら、私に言った。

「変な事をしたら……分かってるわよね。」

「はいはい。さ、私について来なさい。」

そういつて、私は男の子を運び、女の子が私について来るのを確認し、私は廊下を歩いて行った。

永夜異変

千発千中の薬師（後書き）

未「負けたあああ！」

作「初めての敗北だな。」

未「まあ、仕方ないかな。永琳さんだし。」

作「じゃあ、私は次の話にいくよ。」

未「今回短いね。では次話は……ま、次のお楽しみで。」

作「では、また次話で！」

永夜異変

剣と弓と短剣と（前書き）

またもや薬師が出現します。

涼
s
i
d
e

永夜異変

剣と弓と短剣と

俺は咲夜さんが復活した後、永遠亭を目指し飛んでいるが、その邪魔をしようと武装した兎が物凄い数で向かって来ている。

「邪魔だ！時符『リタルダンドタイム』！」

俺はスペルを発動させ、時が止まる寸前まで遅らせ、武装した兎に弾幕を降らせた。

「そして、時は戻り出す……………」

どこそのキャラの真似事をしながら時遅れを解除すると、兎達には一瞬で現れたように見えた弾幕が襲い掛かり、大半の兎を撃ち落とした。

「まだ残ってるじゃない……………メイド秘技『殺人ドール』！」

次はまた一瞬でナイフが残った兎の周りに現れ、残った兎が針山状態になって落ちていく。

「よしっ！」

「さっさと行くわよ！」

俺達は兎を撃退し、兎がやってきた方へスピードを上げて飛んだ。

少年少女飛行中……

スピードを上げてから数分、俺達は永遠亭の前へと辿り着いていた。

「ここか？」

「見たいね。後……またお出迎えがあるみたいね。」

咲夜さんが言うと、永遠亭の扉がゆっくりと開き、俺にはとても見覚えがある姿が現れた。

「あら……今日は来客が多いわね」

「そうなのか？ま、俺達が今日最後の来客だから気にするなよ。」

「その通りよ。さ、ここを通してくれないかしら？」

「それは無理な注文ね。どうしても、と言うなら……分かってる

わよね？」

そこには、真剣な顔をした八意永琳が立っていた。

「さ、二人纏めてでもいいわよ？」

「なめられたもんだな……………行きますよ、咲夜さん！」

「任せなさい、時符『プライベートスクウェア』！」

咲夜さんのスペルが発動し、時が凍りついた。

咲夜 side

私は、時を止めた後、あの女を観察した。

（あの女……………見た目は若いが、かなりの手練れ。まずは背中に持っている弓を取らせないのがいいか……………？）

思考を巡らせ、女の背後にナイフを十数本投げ、時を動かした。

「甘いわね。」

そう、一瞬だった。一瞬で弓を取り、背後を見ずに全てのナイフを矢で撃ち落とした。

「嘘でしょう……!？」

「呆けている暇があるかしら？」

またも一瞬で間合いを詰められ、蹴りが鳩尾へと放たれたが、涼の剣がその攻撃を防いだ。

「そっちこそ甘いぜ！」

涼の姿がぶれ、あの女を剣が捉えたように思えた。

「危ないわね……二人して時間を操るんじゃないわよ……」

「「!!!？」」

女はまた瞬間的に移動し、攻撃を回避しただけではなく、私の能力を言い当ててきた。

「あら、凶星ね？まあ、まだ全く本気ではないから、全然大丈夫なんだけどね。」

「嘘……」

あんなに速い、いや、疾いの、まだ本気ではない。そう言われて、私は柄にもなく膝をつき、涼も信じられないという顔をした。

「ふふっ…………絶望したみたいね。今のあなた達、さっきの来客より無様よ。」

「……………」

「るっせえ……………」

「…………情けないわね。さっきの来客は、あなた達と同じ人間なのに、諦めずに私に挑んで来たわ。」

「知るかよ…………そいつは、なにか自信があつたんだろ……………」

「あなた、本当に駄目ね。…………もういいわ、やられなさい。」

女が涼の頭へ蹴りを放とうとした瞬間、私は時を止め、足のすぐそばでナイフを構え、時を動かした。

動かした瞬間、甲高い音がなり、足とナイフが激突し、ナイフが何処かへと飛んで行った。

「まだ…………終われないわよ…………お嬢様の望みを叶えるまでは、終われないわよ！」

「ふふっ…………そうね、そうこなくちゃ。さあ、本気の私の攻撃、受けてみなさい！」

女が言うとはほぼ同時に、矢が空から大量に降ってくる。それを避け

ていると、次は女からの連射が、私の避ける方向に飛んでくる。

（時止めはもう使えそうにない……………涼はもう駄目、なら、私の集中力が切れた時が最後……………！）

既に私は五分以上避けつづけ、集中力は限界に達していた。

「はっ……………はあっ……………！」

「……………終わりよ。」

私が降って来る矢を避けた瞬間、女から放たれた矢が腕に刺さり、私は意識を手放した。

涼side

俺の目の前で、咲夜さんがやられ、呆然としてみると、永琳が目の前までやってきて、話し掛けてきた。

「……………あなたは十分強い。だけど、それを消してしまうほどに精神が弱い。もっと、強くなりなさい。あなたの主人を守る為にも、必要なことよ。」

そう言つて、永琳は永遠亭へと入っていき、俺は外で立ち尽くしていた。

ぽつりぽつりと降ってきた雨が、俺を慰めるような気がした。

永夜異変

剣と弓と短剣と（後書き）

涼「うわぁ、もう最悪だ俺。」

作「基本的に涼君はこういうセンチメンタル的なことを担当します。そして、今回は短いけど中々の出来だと自負してみたり。」

涼「それは無いな。さ、次はどうなんだ？」

作「次話では、事後のお話です。そして、物語は動き出す……………」

涼「次話もお楽しみに！」

永夜異変

動き出す五色の紡ぎ糸（前書き）

短いですが、物語が進みます。

未奈斗side

永夜異変

動き出す五色の紡ぎ糸

「……………目を開ければ、知らない天井だった。」

うん、言ってみただけ。でも、本当に知らない天井だ。そう
心で思いながら、僕は体を起こし、辺りを見た。

「和風……………じゃあ、ここは永遠亭かな？」

「その通りよ。」

僕の後ろから声がし、振り向くと永琳が笑顔で入って来ていた。

「あ、永琳さん。」

「永琳でいいわよ。さて、体の方は大丈夫かしら？」

「あ、はい。何とか。」

「そう。あの後、アリスちゃんだっけ？その子が凄い剣幕でね。あ
なた、相当好かれてるわよ。」

「分かってますよ……………分かりやすい反応しますしね。」

本当にアリスの反応は分かりやすい。顔赤らめるとか……………

「まあ、アリスちゃんも中々のダメージだったしね。あなたの隣の
部屋に居るから、起きたなら行ってきなさい。」

「あ、はい。それと……………」

「ああ、もう月は戻しておいたわよ？あの巫女、本当に人間なの？」

そういつて、永琳は出て行った。確かに、あの巫女は人間かどうか疑問だ。

少年移動中……………

「アリス、いる？」

扉の前で呼び掛けたが、返って来ないのでとりあえず入ると、アリスが気持ち良さそうに眠っていた。

「ふう……………心配したあ……………」

僕は安堵の息を吐くと、アリスを見て、髪を撫でた。

「アリス……………」

僕はそう呟いて、心の中で永琳が言った言葉を繰り返した。

『あの子、相当あなたを好いてるわよ?』

「……………ははっ。僕、本当に幸せ者だな。こんなに可愛い子に好かれて。」

僕がそう言っていると、アリスが目をゆっくり開けてきた。

「……………ふえ? 未奈斗?」

「あ、起こしちゃった?」

「え!?! ううん、大丈夫よ。」

顔を朱くしながら言うアリス。僕は、その顔をじっと見た。

「な、何よ?」

「アリス……………」

僕はキョトンとするアリスを羞恥心を投げ出して抱きしめた。

「へ、へ、へ……………」

「アリス、僕はアリスの事が好きなんだ。出来れば……………付き合ってくれないかな？」

そう言つて、アリスの返事を待った。

「……………」

「……………うん……………」

「……………え？」

「だから……………浮気したら、許さないわよ？」

「……………うん、わかってるさ。」

そう言つて、僕はアリスをより一層強く抱きしめようとした、その時。

ガアアアアン！

「な、何！？」

「どうやら、すぐに休ませてはくれないみたいだね。」

僕とアリスは頷き、衝撃音があつた方へと飛び出した。

少年少女飛行中……………

僕は衝撃音があつたであろう場所に来たが、今のところ何も見つからない。

「見つからないね……………」

「ええ……………あ、未奈斗、あそこ！」

アリスが指さした場所を見ると、女の人が倒れていた。

「とりあえず、助けよう！」

「ええ。」

僕が女の人に近づいて声を掛けてみた。

「大丈夫ですか!？」

「……………う、ああ……………だ、誰……………?」

呻き声を上げながらこちらに顔を向けると、僕がとても、そう、とてもよく見た顔がそこにあった。

「まさか……………その声は……………」

「あ、れ……………その、声は……………未、奈斗……………?」

「やっぱり……………碧菜か!」

「うん……………久し、ぶり……………」

碧菜は、そういうと共に、気を失った。

「っ!…!アリス、永琳に急患って伝えて!」

「ええ!」

僕は碧菜を担ぎ、永遠亭へと急いだ。

その時、焦っていたからか、その後ろに開いたスキマに気がつかなかった。

紫 side

「ついに……始まるのね。」

私は今まで未奈斗がいた場所に現れ、呟いた。

「連れて来たのは私だけど……まあ、これはあの子の問題。私
とやかく言うことでも無いわね。さ、黄色は見つけた。後は紫と緑
……さ、私も徐々に準備しましょうか。」

私はスキマを開き、扇子で口元を隠して笑った。

「さあ………楽しませなさい。」

スキマの中に入り、私はこの場を去った。

永夜異変

動き出す五色の紡ぎ糸（後書き）

未「なんで碧菜が来たの？」

作「大方、おまえと涼を心配したんだよ。」

未「そつか……………そして、また紫の意味深な言葉が……………」

作「これがこの小説のメイン。さあ、ここから本気だ！」

未「はいはい、頑張れ。さて、次は涼君の場所に……………オイ、この手帳読めないぞ。」

作「勝手にみるなあっ！」

未「では、また次話で！」

五色の紡ぎ糸

絡まる黄と白（前書き）

一日遅れた……………ッ！

未奈斗 side

僕は碧菜を永遠亭へと運び込み、永琳に見てもらったところ、命に別状は無いということだった。

「ふう……………焦ったよ。」

「そうね。ところで……………碧菜ちゃんってどんな子なの？」

アリスが首を傾げて聞いてきたので、僕は悶え死にそうになりながら答えた。

「え、えっと……………とりあえず、元気な子で、運動も勉強も出来るんだ。後、旅行に行った時に、僕も持つてる銃って言う武器で射的をしたら、二十発撃って全て真ん中に当てたって噂があるよ。」

「……………人間？」

「のはずだよ……………」

そう僕が返した時、近くで電気が発生した時のような音がした。

「何!？」

「碧菜が寝てる部屋からだ！」

ちょうどその近くを通っていた僕は、碧菜が居るであろう部屋の扉を開けた。すると、そこには電気を身体からスパークのように発し

ている碧菜がいた。

「え？ええっ！？なんなのよこれ！？」

「碧菜！大丈夫！？」

「未、未奈斗！これ何とかしてよぉー！」

「とりあえず落ち着いて！」

そう言って僕は遠くから碧菜を落ち着かせ始めた。

少年鎮静中……

「大丈夫？落ち着いた？」

「う、うん………何とかね。」

碧菜が落ち着くと、スパークのように発していた放電も止まり、事は余り大きくならなかった。

「何なのよ！私から電気が出るなんて！」

「そうだね……………あ、まさか。」

僕はすぐに一つの結論に辿り着いた。それは、

「碧菜。それ能力じゃない？」

「……………え？」

「そうとなったら、スキマを探さないと……………」

「ここにいるわよ？」

僕が永琳に紫の居場所を聞きに行こうとした時にスキマが目の前に開き、紫が現れた。

「うわっ……………いきなり顕れないでよ。」

「善処するわ。それで？その子の能力を調べればいいの？」

紫は扇子を碧菜に向け、そう言った。

「うん、お願い。」

「分かったわ。」

紫は碧菜に近付くと、碧菜に向かって話し掛けた。

「さ、碧菜。能力を調べるから少しじっとしてなさい。」

「うん。まだ実感無いけどね。」

紫は扇子を碧菜のおでこに当て、目を閉じて集中した。

「……………」

「……………分かったわ。」

「本当に!？」

碧菜が歓喜の声を上げると、紫が答えた。

「あなたの能力は、『電を司る程度の能力』よ。」

「電を司る……………」

「電気、電磁、電波……………電が関係するもの全てを操れるわ。つまり、電を操る中でも最高の能力よ。」

「……………本当に?試してもいい?」

「それは永琳に聞いてちょうだいな。さ、私は帰るわよ。」

「うん。ありがとう。」

紫は笑顔を見せながらスキマを開き、去って行った。

「途中から私空気……………」

「ごめんごめん。」

ふくれながら言うアリスの頭を撫でていると、碧菜がキョトンとした目を見た。

「……………え？未奈斗、アリスと付き合ってるの？」

「え、あ、うん。」

「信じられない……………あの未奈斗が付き合ってるなんて……………」

「碧菜ちゃん、そんなに驚く事なの？」

「うん。だって、未奈斗ったら奥手なんだから。」

「ふーん、それにしても大胆だったわよ？」

「ア、アリス……………」

碧菜のお陰で、僕がさっきやっていた事がどれだけ恥ずかしかったかを思い出した。

「……………!」

「ほらほら。照れない。」

アリスはそう言いながら僕の頭を撫でていると、碧菜は少し呆れながら言った。

「仲良いね……………二年くらい一緒なの？」

「いいえ。一年位よ。未奈斗が幻想郷に来てすぐだったから……………十ヶ月くらいかしら？」

「そのくらいだね。」

僕がそう答えると、碧菜は有り得ない、と言いつてから話し出した。

「有り得ないよ……………だって、未奈斗がいなくなってから二年半位経ってるんだよ！？」

「えっ！？」

僕は驚いて聞き直した。

「そんな事はないはずだよ……………」

「でも、現に私は三年になってるんだよ？」

「嘘……………」

僕が軽くショックを受けていると、アリスが口を開いた。

「たぶん、この世界と未奈斗の世界では時間軸がずれているんじゃない？」

「そっか。」

「ああ、そういうことね。」

僕達は納得し、僕は立ち上がって言った。

「さ、永琳に能力を使ってもいいか聞きに行こうか。」

「そうね。行きましょうか。」

「あ、待ってよ。」

僕達三人はこの部屋を出て、永琳の部屋を目指した。

少年少女移動中……………

未「碧菜の能力……すごいよね。」

作「ああ。何故女キャラを作ると必ず雷的な能力になる……」

未「……それ、某小説の影響受けすぎてるんじゃない……」

作「自分でも自覚してるよ。あ、紫が何で碧菜の名前を知ってるかはまた後々明らかになります。」

未「面識あったみたいだね。さ、次は？」

作「一旦未奈斗から離れ、涼君に移ります。そして、あいつが来ます。」

未「まあ分かりやすいね。では、また次話で！」

作「分かりやすいって……」

五色の紡ぎ糸

裁きを受ける紫（前書き）

ちよつと会話文ばかりになってしまった感が……

涼
s
i
d
e

「……………」

「……………というわけですから、あなたは善行を積まなければなりません。……………聞いていますか？」

「あー、聞いてますよー……………」

今俺の前には何故か幻想郷の閻魔、四季映姫・ヤマザナドゥが座つて俺に説教している。因みに、俺は今紅魔館にいない。四季映姫に彼岸まで連れ出されてきた。

「はぁ……………まあいいです。いいですか？今のあなたの主に命尽きるまで尽くすのです。」

「言われなくともそのつもりだ。」

四季映姫が言う今の主は勿論フラン様のこと。その言葉を返すと、俺は座っていた椅子から立ち上がった。

「じゃあ、帰らせてもらうぞ。」

「帰り道は分かりますか？」

「ああ。それじゃあな、四季映姫。」

「ええ。次は真つ当な理由で会いたいものです。」

そう言われ、俺はこの部屋から出ようとした、その時だった。

ガラガシャガンズドンガッシャアァン！

「何だ！？」

「……………何とも間抜けな音が隣の部屋でしましたね……………隣は倉庫だったはずなのですが……………」

そういつて四季映姫は部屋を出て、隣にある倉庫の扉を開けた。すると、男が扉の向こうから倒れてきた。

「大丈夫ですか？ いやそれ以前にどうやってこの場所に入ったのですか？」

「……………落とされた。そうとしか言いようが無い。」

そう答えた声は、俺の中でとても懐かしい響きがしたので、男の顔を見ると、俺は呟いた？

「……………紫幻？」

「ああ……………涼か。久し振りだな。」

やっぱり。こいつは俺の親友の一人、深見紫幻だ。

紫幻がここに来たいきさつを四季映姫に話すと、四季映姫は頷きながら言った。

「で、八雲紫に幻想入りさせて貰ったと。」

「そういうことだ。ところで四季。俺はどうしたら良い？」

「そうですね……とりあえず、あなたの過去を見せて貰います。涼は帰りなさい。そして主に尽くしてきなさい。」

「わかったよ。じゃあな、紫幻。」

「ああ。また会えたら会おう。」

そう言って、俺は四季映姫の部屋から出て、彼岸から紅魔館へと飛び立った。

俺は四季に部屋に待つように言われると、辺りを見回した。

「……………本当にきたんだな。刻麗や東風谷は大丈夫は大丈夫だろうか……………」

俺は共に落とされた刻麗、後から落とされる東風谷の事を考えていた。東風谷は大丈夫だろうか……………」

「刻麗がどこに落とされただろうか……………あいつは何の能力も無いから、妖怪と合ったらひとたまりも無いぞ……………」

俺はそう呟き、四季が戻って来るのを待った。

少年待機中……………」

「すみません。待たせてしまいましたね。」

「いや、大丈夫だ。」

「どうやら四季は大きい鏡………浄瑠璃の鏡を取りに行っていたようだ。」

「さて、始めますよ。覚悟は良いですか？」

「ああ。俺には罰を受ける覚悟がある。」

「結構です。」

「そついい、四季は鏡を俺に向けた。」

「………あなたは、かなりの悪行をしてきたようですね。」

「………ああ、その通りだ。」

「正直ですね。正直な事は良いことです。更に、あなたはある時点から悪行がとてまもなくなくなっています。」

「………そんなことはない。」

「………あなたは、自分で反省し、そして改善しようとした。それだけでも、積み重ねられた悪行が少し消化されます。」

「……………」

俺が黙ると、四季が真剣な顔をさらに強張らせて言った。

「あなたがやってきた悪行はとても多いです。しかし、それはさほど問題では無いです。あなたの最大の悪行、それは自分の罪から逃げようとしていることです。」

「……………逃げてなどいない。」

「なら……………昔のあなたはどこに行つたのですか？昔の元気で、活発な性格のあなたは。」

そう、昔の俺は今みたいに落ち着いてなんていなかった。故に、悪行と呼ばれることをよくしてしまった。

「昔の俺は……………最悪な奴だ。その俺を変えたんだ。そのことのがが罪なんだ？」

「昔のあなたでも、改善は出来たはずです。だから、罪から逃げていると言っているんです。」

「……………それに、落ち着いていることに慣れてしまったから、もう昔には戻れない。」

「それなら、今後、あなたは罪から逃げるということをしないようにしなさい。それが、あなたが出来る善行の一つです。」

四季がそう言つて一息つくと、もう一度話し出した。

「そして、今まであなたがやってきた悪行、それを消化するために、

何か善行をするのです。いいですね。」

四季がそういい、答えを求めるように俺を見つめた。そして、俺は答えを出した。

「なら、俺はここで手伝いをして、今までの悪行を消化したい。四季、頼めるか？」

「ふう……………言つと思いました。やるからには、厳しくやりますよ。」

「ああ、頼む。」

こうして、俺は四季の下で手伝いをする事になった。だが、一つだけ心配なのは、

（能力も何もない俺に……………出来るのか……………？）

前途多難である。

五色の紡ぎ糸

裁きを受ける紫（後書き）

涼「おい、これは俺の話じゃなくて紫幻の話だろうが。」

作「申し訳ない。展開上、こうするのがベストだと思ったんだ。」

涼「仕方ないだろうけど……………」

作「ならよし！さ、次！」

涼「流したなオイ。次話はまた紫幻の話らしいな。」

作「そうです。紫幻の働きをご覧ください！」

涼「では、また次話で！」

五色の紡ぎ糸

紫と死神の戯れ（前書き）

また一日遅れた……………いつそ三日に一回にしようか……………

紫幻side

俺が四季の手伝いをすると言った翌日、いつものように午前五時半（俺の携帯時間で、だが）に起床すると、ちょうど四季が俺の部屋に入ってきていた。

「意外と早起きですね。」

「これくらいしか取り柄が無くてな。」

そういつて来ている服……昨日四季から貰った紫色の和服を直し、一度欠伸をしてから聞いた。

「で、今日から手伝いをさせて貰う訳だが……何をすればいい？」

「その前に。まずこの幻想郷で生き抜く術……つまり、弹幕と飛行、そして、あなたにあるであろう能力の発現をします。いいですね。」

四季が言ったことに俺は黙って頷き、次の言葉を待った。

「私を手伝っても良いのですが、生憎時間が余り無いので、能力の発現だけ今してしまおうと思います。」

「有り難い。」

「いえ。では……能力の発現をするためには、死の瀬戸際まで追

い詰められると言う方法がありますが、今回は私の能力で無理矢理こじ開ける事にします。」

そついつて四季は十字型の棒を俺に向け、その棒から何やら輪の様なものが俺に向かって放たれた。

「あなたの能力を今からこじ開けます。行きますよ。」

次の瞬間、俺の身体に激痛が走った。

「ッアアアアアッツツ!!」

「我慢してください。」

それから何時間たっただろうか。もしかすると数秒だったかも知れないが。ようやく痛みが引くと、四季が声を掛けた。

「大丈夫ですか？これであなたの能力を発現させましたよ。」

そう言われ、能力の事を考えると自然に頭に浮かび上がって来た。能力は……

「『魔法を扱う程度の能力』、か……」

「そのようですね。では、これから私の部下、小野塚小町のところで弾幕と飛行を学んで来て下さい。手伝いはそれからです。」

「分かった、有難う。」

「ふう……では、私は仕事に向かいます。また夜に来て下さい。」

「分かった。また後でな、四季。」

そう言い、俺は部屋を出て、三途の川にいるであろう小野塚の居所に向かった。

「……………寝ていたら能力で起こすか。」

少年移動中……………

歩き始めてから数分、俺は小野塚の所まで来た、のだが……………

「……………スー……………」

「……………寝ているな。」

先程呟いた通り、能力を使用して起こすことにした。

「…………インデグネーション」

どこぞのRPGの魔法を真似してみると、その魔法そのものの雷が小野塚に降り注ぎ、爆ぜた。

「キヤアアツ！？」

「…………仕事があるだろう、せめて起きている。」

所々に煤^{すす}がついているが、生きてはいるようで、すぐに俺に問ってきた。

「ん？アンタ……………新入りかい？」

「昨日、スキマ妖怪に彼岸の倉庫に落とされ、今日から四季の手伝いをする事になった深見紫幻だ。よろしく頼む。」

「……………また災難だったね。あたしは小野塚小町。よろしくな。ところで、あたしに何の用だい？」

「四季から、弾幕と飛行を習ってこいと言われたから来た。」

「なるほどねえ……………よし、分かった。ビシバシいくから覚悟しなよ！」

「有り難い。早速始めてくれ。」

小野塚がとてもやる気に満ちた声で返事をしてくれ、俺の修業（？）が始まった。

少年勉強中……………

数十分に及ぶ弾幕と飛行の講義が終わり、頭の中で整理すると、小野塚が声を掛けてきた。

「……………わかったかい？」

「ああ、なんとかな。」

「じゃあ、実践してみようか！」

「……………は？」

そういつて鎌を取り出し、小野塚は構えた。

「ちょっとした運動さ。アンタはあたしに能力と体術でかかってき

な。あたしは鎌だけを使うからさ。」

「分かった。胸を借りさせて貰う。」

「よっし！じゃあ、アンタから来なよ！」

そう言っただけで、俺はお構い無しに某RPGの最上級魔法をスぺカのように放った。

「…………行くぞ、雷裁『インディグナイト・ジャツジメント』！」

次の瞬間、小野塚の周りに雷がほとばしる魔法陣が現れた。

「ッ！いきなりこんなデカイもの放つかね……………！」

小野塚は急いで範囲から逃れ、次の瞬間に空から特大の雷が魔法陣の中心に落ちた。

「ふう、アレは危ないね。当たったら死んでいたかもよ？」

「嘘をつけ……………次だ。」

そう言っただけで、またも俺は魔法を放った。

「オリジナルだ……………核符『フレアスタードライブ』！」

俺の周りに相当な熱量を持った球が幾つも出現し、不規則な機動で小野塚に襲い掛かった。

「チィッ！」

小野塚はそう舌打ちし、持っている鎌で球を切り裂こうとした、その瞬間、

「言い忘れていたが……爆ぜるぞ。」

「なっ!？」

球が爆発し、小野塚の体を吹き飛ばした。

「なかなかやるねえ……でも、終わらせて貰うよ!」

そう言つて、俺に驚異のスピードで突っ込み、腹に殴打を入れようとしたが、俺はそれを読んで体を半身にしてかわした。

「……………読んでいたのかい?」

「ああ、一応、元々格闘技をやっていたからな。体が勝手に動いてしまう。さて、俺は次が限界だ。これを避けて、俺を介抱しておいてくれ。」

俺はそういい、限界まで集中して放った。

「嵐符『ブレイクトルネイド』!」

小野塚が居る場所に嵐が巻き起こり、その中で弾幕が暴れ回る。しかし、それを難無くかわしている小野塚を見ながら、俺は意識を失った。

五色の紡ぎ糸

紫と死神の戯れ（後書き）

紫「初の後書き出演だな。深見紫幻だ。よろしく頼む。」

作「はい、紫の紡ぎ糸、紫幻君です。能力が残念なのは気にしない。」

紫「作者、紡ぎ糸の色が誰だか分かりすぎるだろう。実際、リアルで翌日に的中させられていただろう。」

作「うつ！それは言うな……！それに、かなりの過去の話だ！」

紫「実際、俺の能力も「もうめんどくさいからこれでいいや」で決めただろう？」

作「マジすいません。でも、後々の重要キャラですので活躍に期待してください。」

紫「次は………碧菜の話か。」

作「はい、碧菜の能力、そして武器に注目です。では、また次話で！」

五色の紡ぎ糸

放つ穿ち雷（前書き）

遅れている上、中二病全開です。

未奈斗 side

僕は永琳の部屋の前に行くと、扉を叩いて言った。

「永琳、居る？」

「ええ、入っていいわよ。」

その言葉を聞き、僕達は永琳の部屋に入ると、何やら変な薬品を調合している永琳がいた。

「目が覚めたのね。」

「はい、ありがとうございます。」

「いいわよ、まあ、お礼は体で払って貰うから。」

「体って……」

永琳がさらつと言った言葉に僕は不安を感じたが、とりあえず、こちらの用件を話すことにした。

「永琳、この子、碧菜って言うんだけど、能力があるみたいんだ。」

「だから、その能力を試したい……と。いいわよ。私も興味あるし。」

僕が言いたかった事を永琳が頷きながら言った。

「話が早いや。じゃあ、外でやっていい？」

「能力によるわね。」

「あ、私の能力は『電を司る程度の能力』です。」

「……………そうね、今の時間だと……………」

そう言いかけた瞬間、この近くで爆発音が鳴り響いた。

「何がおきたの!？」

「はあ……………碧菜ちゃん、今から外に出て、能力を試すわよ。」

「いや、今の爆発音どうするの!？」

「それを収めに行くのよ。さ、行くわよ。」

そう言つて、永琳は部屋から出て行き、僕達も永琳を追って部屋を後にした。

少年少女先生移動中……………

「いい加減くたばりなさいよ焼鳥屋あつ！」

「それはこっちの台詞だ二ート野郎おおっ！」

「……………何このカオス。」

僕達が外に出て来ると、和服を着た黒髪の少女ともんぺを履いている白髪の少女が弾幕を撃ち合っている光景が広がっていた。

「さ、碧菜。あなたの能力であの二人を止めて頂戴。」

「エエエエエツツ！？無理ですよこんなの！」

「大丈夫よ。」

そう永琳に言われ、うなだれながら碧菜は目を閉じた。

「はぁ……………」

そう溜め息を碧菜がついていると、アリスが首を傾げて僕に聞いた。

「未奈斗、碧菜は何をしてるの？」

「ん？ああ、碧菜が射的をするとき、何時も目を閉じて集中するんだ。」

「え、じゃあ……………」

「うん、碧菜はあの二人を撃ち落とすつもりだよ。」

「不可能に近いわよ！？だって、私でも当てられるか分からない速さなのに……………！」

そう、先程話した二人の少女は、僕達の数メートル先をもの凄い速さで飛び回っているのだ。そして、アリスが言った後、碧菜が目を開いた。

「……………うん、ターゲットロックオン。」

そう言い、碧菜は両手を別々の方向に向けた。すると、両手の指先から電気がスパークのように飛び散り始めた。

デュアルバスター
「二連電磁銃、ファイア！」

「うわ、中二病」

すかさず名前にはツッコミを入れておいたけど、その名前に相応しい、光速とも言える速さで雷の弾が指先から放たれ、それぞれが何かに当たり、当たった場所で爆発が起きた。

「凄い威力と命中精度ね。」

「本当……………スペカで使われたら一たまりも無いわね。」

「ありがとうございます。後、未奈斗？中二病で悪かったわね？」

碧菜がお礼を言った後、僕に向かって笑みを浮かべ（勿論目は笑っていない）、腕を僕に向けた。

「自覚しているなら治そうよ！ちよつ、指先向けないで！」

「あんたも一回食らいなさい！電レールマシンガン磁機関銃！」

「ぎゃあああつ！」

僕が最後に見たのは、碧菜の指先から大量の雷弾が放たれて、僕に突き刺さる映像だった……

碧菜 side

「ふう、つたく……」

私は未奈斗を肅清し、一息つくと、アリスがちょっと膨れながら言った。

「ちょっと、未奈斗が死んだらどうするのよ！」

「あー、大丈夫よ。こいつ、実際にこれより酷い仕打ち受けたことがあるから。」

そう私がさらつと言うと、アリスは溜め息をついてから言った。

「分かったわよ。じゃあ、私は未奈斗を連れて家に帰るわ。碧菜も暇なら来ていいわよ。」

「うん、じゃあね。」

アリスは未奈斗の体を人形達に運ばせ、迷いの竹林を飛んで行った。

「……………さて、碧菜ちゃん、あなたもこのルールとかは知っているのよね？」

そう永琳が聞いてきたから、頷いて答えた。

「うん、スペカの事くらいなら知ってますよ。」

「もう、私に敬語を使わなくてもいいわよ。」

「分かったわよ。で、それを聞いてどうするの？」

直ぐにいつもの口調に直し、永琳に聞き直した。

「私達の所に住んでくれない？最近、姫様……分かるわよね。姫様が退屈がっているから、世話役をしてほしいのよ。勿論、見返りは保証するわ。」

本当に困ったような顔をして頼んで来たと、私自身ここに居たかったのがあったから、条件を提示した。

「じゃあ、まずどのやつでもいいから重火器を四つ程欲しい。それと、スペカの作成方法と練習台。それで手を打つわ。」

「分かったわ。重火器は時間がかかるけど、スペカの作成方法は今教えるわ。」

「助かるわ。」

「単に、イメージを一カ所に集めていれば作れるわ。練習台は……そこに二つ、動く練習台があるでしょう？」

そういつて永琳が指差す先には気絶している姫様
蓬萊山輝夜
ともんぺを履いた少女
藤原妹紅が居たため、私は永琳にいわれた通りにイメージを固め、出来たスペカを放った。

「永琳、あれは動くサンドバッグでしょう？電砲『レールマシンガン』。」

私の指先から大量の雷弾が放たれ、未だ気絶している二人を更に襲い、二人を更に奥深くへと突き落とした。

「……………中々酷いことをするのね。」

「普通よ」

今の私は、物凄く良い顔をしているんだろつと、自分でも思った。

五色の紡ぎ糸

放つ穿ち雷（後書き）

未「また僕気絶オチ！？」

作「未奈斗君の気絶率はとんでもなく高いです。でも一応第一主人公です。」

未「そうなんだよね…………涼にその座を奪われそうだよ……………」

作「まあ気にするな。次話は集合させる予定。こっご期待！」

未「では、また次話で！」

五色の紡ぎ糸

交わる四色の糸（前書き）

アホみたいに遅れて申し訳ありませんでした！

未奈斗 side

僕がアリスといつもの通り昼食を取っていると、僕が使えないと知っていながら持っている携帯電話（電池は魔法の電気で充電）が何故か鳴り響いた。

「何の音？」

「僕の携帯電話からだ……使えないはずなのに何で？」

そう言いながら電話をとり、通話した。

「もしもし………？」

『あ、繋がった。実験成功ね。』

「碧菜！？何で携帯使えてるの！？」

相手はなんと碧菜だった。しかし、実験成功ってどういう………？

『私の能力、覚えてるでしょ？』

「確か電を司る程度の能力だよな？」

『そ。私は電”波”を操って私と未奈斗の携帯を繋いだのよ。まさか簡単にいくとは思わなかったけどね。』

「そうだったんだ………」

「未奈斗、どうやって碧菜と話しているの？」

アリスは首を傾げながら僕に聞いてきた。

「この携帯電話っていう物で話せるんだ。詳しい中身は知らないけどね。」

『あ、今アリスといるのね。お邪魔だったわね。』

「いや、僕達基本一緒だし。で、用件があって電話したんでしょ？」

僕が用件を早く言っただけだったので、催促すると少し溜め息が聞こえてから碧菜が話しはじめた。

『実は、紫幻も幻想郷に来ているのよ。後で連絡するから皆で集まらない？』

「うん、いいよ。じゃあ、こっちも涼を呼んで来るよ。」

『頼むわ。じゃあ、また後でね。』

その声と共に電話が切れ、僕はアリスに向かって話した。

「今日、皆で集まることになったんだけど、一緒に来る？」

「ええ。是非ともお願い。」

「じゃあ、まずは紅魔館に行こうか。」

「ええ、行きましょー！」

急いで昼食を食べ終わった僕達は家を出て、涼がいる紅魔館へと飛び立った。

少年少女飛行中……

「やっと見えた……」

「意外と遠いのよね……」

僕達が家を出て数十分、ようやく紅魔館の正門が見えてきた。

「さて、門番の人は……」

僕はそういつて美鈴を探すと、門からちょっと離れた場所に美鈴と涼が見えた。

「あれ、涼よね？何をしているのかしら……………」

「組み手をしている訳でも無いし……………」

僕達は気配を出来るだけ小さくして、二人の場所へ近付いた。

涼side

「涼さん、ここでいいですか？」

「ああ。」

俺は珍しく美鈴と二人で門から少し離れた場所にいた。というのも、俺が相談したい事があったからだ。

「でも、珍しいですね。いつもなら咲夜さんに相談するのに。」

「いや、二つ程あるんだが、一つは美鈴に聞くのが一番良いような気がしたんだ。」

「で、もう一つは……………」

美鈴が俺に聞くと、俺はいいずらそうに顔をしかめてから言った。

「美鈴にしか聞けないことなんだよ……………」

「……………」

美鈴は首を傾げたが、俺はとりあえず話しはじめた。

「とりあえず一つ目な。この前の異変のことなんだが……………」

「ああ、結局相手方にやられてしまったやつですか？」

気にしていることをサラっと言われ、少しのけ反りながら続けた。

「あ、ああ……………その、やられた奴に言われたんだが……………精神が弱い、だと。」

「精神……………ですか？」

「ああ、俺、本気を出して無い相手にやられ続けて、最後には本気出されて、何も出来なかったんだ……………」

俺は俯きながら言うと、俺の肩に手が乗せられた。

「大丈夫ですよ。私も……………昔はそうでした。」

「美鈴も……………」

俺が顔を上げると、とても優しく笑みを浮かべる美鈴がいた。

「私、ここの門番になってから、数年間はそんな感じだったんです。でも、私は守りたいものがある、だからもつと頑張る。そう思える様になったんです。涼さんはまだまだ若いんですから、ちよつとずつ、ちよつとずつ頑張つて行けばいいですよ。」

「……………ああ、そうだな。ありがとう、美鈴。」

「解決出来たなら良かったです。では、もう一個の話は何なんですか？」

美鈴が聞いて来ると、俺はまたもや俯いて話しはじめた。

「実は……………」

「……………こつちの方が重症ですね。」

「……………れたんだ。」

「え？」

どうやら聞こえなかったらしく、もう一度聞いてきたから言った。

「フラン様に……………告白されたんだ……………」

「へえ……………って、えええええ！？」

俺が言ってから数秒のタイムラグのあと、美鈴の絶叫が響いた。

「あんまり大きな声を出さないでくれ……………」

「す、すいません……………涼さん、本当ですか？」

「ああ……………ついさっきのことなんだが……………いつもの通り、フラインクの部屋へ昼食を持って行ったんだ。」

回想

「ありがと、涼。」

「いえいえ。好きでやっているんですから。」

そう言っ、いつも俺が座らせて貰っている椅子に座ると、フラインクがいきなり、

「涼…………フランと、付き合ってくれる?」

その瞬間、俺は椅子から転げ落ちたよ。すぐに立って詳しく聞いたんだ。

「フラン様…………それは、どういう意味合いでしょうか?」

「んーと…………男女交際って言う意味合いだよ。」

俺が口をあけて呆然としていると、フラン様がこっちに寄ってきて、

「フランじゃ…………駄目?」

回想終了

「…………で、逃げて来たんだが…………どうしたらいいんだ?」

「…………それは、涼さんが決めることだと思いますよ……………」

「そっか……………わかった。ありがとうな。美鈴。」

「はい。それと……………」

そう言っつて美鈴は俺の後ろを見ると、言い放った。

「そこにいる未奈斗君とアリスさん、盗み聞きは良くないですよ？」

「……………やっぱばれてました？」

俺が後ろを振り返ると、未奈斗とアリスがばつが悪そうに現れた。

未奈斗 side

僕達が涼の前に出ると、涼は口を開けてぼかーんとしてしまった。

「おーい、涼？」

「あ、ああ……………」

「聞かれていたことが相当ショックだったようね……………」

「その通りだよ。……………まあいいや。で、何の用だ？」

直ぐに立ち直ったのか、用件を聞いてきた。

「えっと、幻想郷に、碧菜と紫幻が来ているみたいなんだ。」

「碧菜もなのか！？紫幻はこの前、彼岸で会ったが……………」

「あ、そうなんだ。じゃ、続けるよ。碧菜が電を司る程度の能力を
持ってて、それを使って電話してきたんだけど……………」

少年説明中……………

「なるほど……じゃ、レミリア様に許可を取って来るから待っててくれ。」

そう言つて涼はこの場から姿を消し、美鈴と僕とアリスが残された。

「いっちゃいましたね……あ、そういえば。お二方は交際を始めたんですよね？」

「……何で知ってるの……？」

美鈴がいきなり僕とアリスが付き合っていることを話し、アリスがゆっくりと首を美鈴に向けて言った。

「え、だってこの前うちに来た新聞に載ってましたよ？お二方のコメント付きで。」

「……私達、そんなのやってないわよね？」

「……よし、犯人分かった。全員で殺りに行く。」

そう。僕には分かった。だからこそ、全員揃ってから殺る。そう決めた時、涼がこちらに帰ってきた。

「許可もらって来たぞ。……どうしたんだ未奈斗？」

「いやあ……何でもないよ。とりあえず、碧菜の連絡を待とう……あ、来た。」

僕が話題を出した時に電話が掛かってきた。噂をすれば影ってね。

『未奈斗ー、人里の寺子屋の前で待ち合わせになったんだけど、いい？』

「うん、全然いいよ。」

『……………未奈斗、あんた何かあった？声色が全然違うわよ？』

「何にも無かったよ？ま、そっち行ったら話すから。じゃあ、涼連れて行くね。」

そう言った時、涼が耳打ちで申し訳なさそうに話してきた。

「あ、悪い。フラン様も来るんだ。」

「ごめん碧菜。フランとアリスも行くよ。」

『了解したわ。じゃ、寺子屋前で。』

その声と共に、ブツリと電話が切れ、僕は涼に向かって言った。

「じゃ、いこうか。」

「ちょっと待ってくれ。まだフラン様が……………」

そう言いかけたとき、フランが涼の腰に抱き着いて来た。

「来たよ！さ、行こう！」

「だそうだ。じゃ、美鈴。寝るなよ？」

「分かってます！帰ってきたらまたお話聞かせて下さいね！」

そして、僕達四人は人里へと飛び立った。

少年少女移動中……

「……………よし、着いた。」

「さすがにまだ来てないだろうな。」

「人里は久しぶりね……………」

「あれ？アリスお姉ちゃんはあるまい来ないの？フランは涼と一緒によく来るんだよ！」

人里に到着し、それぞれ言いたい事を言った。因みに、なぜフランがアリスをお姉ちゃんと呼んでいるか。何だかそんな感じらしい。レミリアとはまた違うとか。

「とりあえず寺子屋まで行こうか。」

「ああ。」

そういつて歩きだし、僕は人里を見ながら言った。

「今思ったけど、人里にも能力持ちって結構居るんだよね。ほら、あの女の子なんて石を浮かべてるし。」

僕が指さした子は、手をかざして小石を五個くらい宙に浮かせていた。

「中々強くないかしら？」

「あの子すごい！後で友達になりにいこつと！」

「……………幻想郷にはこんなに能力持ちがゴロゴロいるのか？」

そんな話をしていると、寺子屋の近くまで来ており、寺子屋の前に人影が見えた。

「お、碧菜じゃねえか？おーい！」

涼が大声を出して手を振ると、人影……………碧菜は手を振り返すと同時に崩れ落ちた。

「へ、碧菜大丈夫!?」

「だ、大丈夫よ。り、涼、そのかつこ……あはははは!駄目だ、我慢出来ないー!」

「コラ碧菜アア!」

碧菜はどうやら笑いが込み上げて来て崩れ落ちたようだ。ようやく笑いが収まり、アリスとフランを見ると挨拶した。

「こんにちは。刻麗碧菜よ。よろしく。」

「知ってると思うけど、アリス・マーガトロイドよ。」

「フランドール・スカーレットだよっ!」

この三人は、お互いに握手しあい、直ぐに仲良くなっていた。そんな中、涼がふと言った。

「あれ?紫幻はまだか?」

「直ぐに行く、って言ってたけど……」

次の瞬間、空にスキマが開き、そこから紫幻が落ちてきた。

「……………つ。ふう。上手くいくものだな。」

「紫幻!久しぶり!」

「久しぶりだな、未奈斗。」

ここに、ようやく四人が揃った。

五色の紡ぎ糸

交わる四色の糸（後書き）

作「祝！全員合流！」

未・涼・碧・紫「どこが祝だ！！」

作「いやいや、めでたいじゃないか。」

未「二日に一回更新はどうした！四日掛かってるじゃないか！」

作「う、正月の用事とかいろいろ忙しくて……………」

涼「じゃあなんなんだこのクオリティの低さ。」

作「こ、これも正月……………」

碧「それに無理矢理すぎるじゃない、携帯のくだり。」

作「電波を操れるから大丈夫だと……………！」

紫「俺の登場シーンも少な過ぎるだろう。」

作「それはご勘弁ください……………今回、こんなに問題がありました
が、またちゃんと書いて行きたいと思います。では、新年一発目の
更新でした！」

未・涼・碧・紫「今年もよろしく願いします！」

五色の紡ぎ糸

一時の休息（前書き）

今回もグダグダ……………早くスランプから脱したい……………

未奈斗 side

「ふーん、じゃあ、紫幻は魔法を使える訳だ。」

「しかも元の世界にあったゲームと同じ物まで使用できる。」

「……………もう無敵じゃない？」

紫幻の能力も聞き、一応、ここにいる六人の能力は覚えた。

「これで、皆揃ったわね。未奈斗と涼は彼女付きで。」

「い、いわないでよ……………」

「まだ返事出してねえから……………」

「未奈斗、もう恥ずかしがらないでもいいじゃない。新聞で広まっちゃったんだし。」

「むう……………いい加減了承してよね。」

碧菜が彼女とか言うから、またフラン様が不機嫌になった……………しかも、未奈斗の様子までおかしくなってきた。がった。

「あ……………思い出した……………ごめん皆、今から妖怪の山行ってパラッチ殺ってくる。」

「…………まさか無断でばらまいてたのか？」

新聞は俺も見したが、インタビューまで書いてあったから了承したのかと思つてたぜ…………

「ふーん、あのパパラッチね…………私も殺るの手伝うわ。」

「ありがと、碧菜。じゃあ、僕達は何処まで行ってくるよ。」

そういつて未奈斗と碧菜は飛んで何処かに行ってしまった。

「あ、ちょ…………あいつら速過ぎるだろ……………」

「仕方ないだろう。涼、俺達も追つか？」

「紫幻、あいつらに追いつけるのか？」

「ああ、スキマを開く。」

紫幻がサラッと人の能力をパクったような気がするが、二人に振り向いて言う。

「ついて来ますか？アリス、フラン様。」

「勿論。未奈斗がいるなら。」

「涼に着いてくよー！」

「だそうだ。」

「分かった、いくぞ。」

「え、もう？ってあああああ！……！」

俺はいきなり開かれたスキマにはまり、絶叫しながら落ちて行った。

少年少女落下中……

「着くぞ。」

「は？っていてええ！」

いきなり落下の終了を告げられると同時に尻に激痛が走った。

「涼ったら、飛んでたら痛く無かったのに……！」

「本当ね……！」

そう言って浮かびながらおりてくるアリスとフラン様。

「先に言っして下さいよ……………」

「おい涼……………あれは何だ……………？」

フラン様達に言葉を返すと同時に、紫幻が指差しながら話し掛けてきたので、その方向を向いた瞬間、俺の頬を何かが通り過ぎ、頬を焦がした。

「っ！？」

「涼、大丈夫！？」

「はい、何とか……………今のは何だ……………？」

「ああ……………今の、碧菜よ。」

「へっ？」

俺が間抜けな声を出すと、アリスが溜め息をつきながら言った。

「だから、碧菜よ。あの子の能力、電を司る程度の能力で電気を線にして乱射してるのよ。だから……………ほら流れ弾。」

「……………危ないな。」

「ちよっ、避けんなああ！！」

碧菜……………後で覚えてろよ……………

そう思いながら、俺は意識を手放した。

紫幻 side

涼が倒れた瞬間、その方向にスキマを開き格納。そしてまた流れ弾が来ないか見ながら先程流れ弾が来た方向に近付く。

「……………やはり未奈斗、刻麗、射名丸の三人か。」

予想はしていたが、やはりこの三人が暴れていたようだ。

「ねえ……………オハナシするだけだからいい加減捕まってよ……………」

「私も言いたいことあるからねー。」

「嫌ですよ！あなた達目がイツちゃってるじゃないですかああ！！」

射名丸が涙を撒き散らしながら逃げ惑う姿も見物だが、あの未奈斗

があそこまでキレているのも珍しい。

「アハハハッ……………っかまーえたー。」

「イヤアアアツツッ!!」

「もう逃がさないからねー?」

俺が見る限り、未奈斗が拘束系のスペカを使って捕獲したようだ。
そしてズルズルと地面を引きずられていく射名丸。……………とりあえず冥福を祈ろう。そう思って俺は手を合わせた。

「……………未奈斗、キレたらああなるのね……………」

「アリスお姉ちゃん、怖いよ……………」

……………未奈斗、帰ってきたらこの二人に謝るべきだ……………
そう思った時、妖怪の山全体に射名丸の叫びが響き渡った。

未奈斗 side

パパラッチを肅清し、ちょっとやり切った感に浸りながら紫幻達の所に行くと、紫幻は相変わらず（といっても知っているのは僕達だけだが）ポーカーフェイスを崩していなかったが、アリスとフランがちよっと震えていた。フランに至ってはアリスにしがみついている。

「……………ごめん、アリス、フラン。怖がらせちゃったね。」

「もう……………もうあんな姿見せないでね……………」

「ほんとだよお……………」

二人に頭を下げていると、後ろから碧菜が話し掛けて来た。

「まあ、未奈斗が完全にキレたらあの比じゃないから。気にしない方がいいわよ。所で未奈斗。あんたにこれ渡しとくわ。」

そう言っていきなり渡されたのは小型のトランシーバー的な物体。

「碧菜、これは……………?」

「私の能力で電波を弄って、ある周波数に合わせると私、紫幻、涼にも渡すやつに繋がるトランシーバー的物体よ。こーりんの所から買っ来てたわ。」

「ふーん……………ありがと、碧菜。」

「これくらいどうって事は無いわ。じゃ、今日は解散しましょうか。」

そう一方的に押し付けて来たが、いつもの事なのでほおっておく。

「じゃあ、また連絡するよ。」

「ええ。涼にコレ渡しといてね。」

そういつて碧菜はトランシーバー的物体を投げ、宙にある状態から何故か開いたスキマの中に入った。

「今渡した。」

「ありがとう、紫幻。じゃあね、二人とも。」

その言葉の次の瞬間、碧菜は一瞬で消え去り、さっきまでいた場所には小さなスパークが残されていた。

「……………かえろっか、アリス。」

「うん。じゃあね、フラン。」

「うん！またねアリスお姉ちゃん！」

「よし、俺が送ってやる。」

その言葉と共に、僕の目の前にスキマが開いた。

「…………お前は紫か…………」

「ふん、早く行け。ちゃんと魔法の森のアリスの家に繋げてある。」

「うん。ありがと、紫幻。」

「有り難く使わせていただくわ。」

そして僕達はスキマをぬけて、家に着き、僕は一息をついた。

「ふう……………ん？」

「どうしたの未奈……………ここ、魔理沙の家じゃない……………」

……………うん、紫幻。今度覚えてろ。

未「コラ作者。何やってんの。」

作「くそっ……………全く書けない……………！こうなったら番外編を書く
しか……………！」

未「本編が書けないのに書けるわけないじゃん。」

作「やってみなくちゃ分からない！ということで、次からは番外編。
今までやってなかった記念編……………とはまた違うか。こっご期待！」

未「何勝手に決めちゃってるの!?!」

番外編・いつの間にかPV50000越えてました〜元の世界の競技をしたい

未奈斗が壊れます。ご注意ください。

未奈斗side

番外編・いつの間にかP V 5 0 0 0 0 越えしてました。元の世界の競技をしたい

ある日のお昼頃、僕はアリスの家で唸っていた。

「うー……………」

「未奈斗……………昨日から唸ってるけどどうしたの？」

「……………テニスがしたい……………」

「……………へ？」

そう、これが僕が唸っていた理由。前から何週間かしていないと出ている禁断症状が始まったようだ。

「テニスって……………たしか元の世界で未奈斗がやってた球を打ち合う競技？」

「うん、かなり長い間やってないから禁断症状が出始めてるよ……………」

「だから時々いきなり腕を振り下ろしていたのね……………」

どうやら僕は知らず知らずの間にやっていたよう……………僕は座っていた椅子から立ち上がると、こう言った。

「よし、碧菜に言って全員集合させて何とかしてみる！行ってきま

す！」

「あ、未奈斗！？」

僕は物凄いスピードでアリスの家から飛び出し（ちゃんとドアは閉めました）、碧菜の元へ向かった。

少年爆走中……………

永遠亭に着くと、僕は碧菜を見つけて叫びながら突撃した。

「碧菜ああああ！！」

「ひっ！な、何よ未奈斗！？」

「テニスがしたいからどうにかしてええええ！！」

「ラケットもコートもボールも無いのに出来るわけないでしょ！—

「旦落ち着け！」

僕は碧菜から放たれた雷球により冷静さを取り戻し、改めて言うてみた。

「テニスをしてなくて禁断症状が出始めてるからどうにかしたいんだ。ということで、手伝って。」

「うーん……………確かに、私もしたいとは思っただけど……………道具が無いから……………」

「そっか……………仕方ないね……………」

そう僕が言った瞬間、頭の上に何かが落ちてきた。

「痛っ!?!」

「はい、皆のアイドル、ゆかりん登場よぉ。」

僕の上に落ちてきたのは紫では無かったが、何故か紫が僕の上から話し掛けてきた。

「紫……………何でここに来たの?」

「あら碧菜。そんな言い方は無いんじゃない?あなた達の願いを聞いてあげたのに。」

「願い?つてまさか……………」

そう言っ僕は上に落ちてきた物体を見ると、巨大な袋であり、中

を見てみると、あらゆるテニス用品が揃っていた。

「ちょーっと外の世界から貰って来ただけよ。あ、テニスって言うても、それはゴムボールの方ね。」

「合ってる。僕がやりたかったのはこっちだよ！」

「てか紫、ちょーっとって言うても……………これは金に換算すると百万は下らないわよ……………」

碧菜が言った通り、ラケットが数十本、ボールが数百個、コート一式が八つ e t c e t c . . . そうとうな数ある。

「いいじゃない。私もやってみたかったんだから。」

「はあ……………まあいいわ。未奈斗、二人呼んでくれる？ダブルスでやるわよ。私は永琳にどこか開けた土地が無いか聞いてくるから。」

「うん、了解。」

そして僕は、トランシーバー的物体で二人に召集をかけた。あ、最初からこれをやっとけばよかったんじゃない……………

「ということで、ここでテニスをするよ。」

「テニスをするには賛成だが、一つ聞こう。人里の近くにこんな開けて平らな土地なんてあったか？」

紫幻がささず突っ込みを入れ、それを待っていたかのように僕は返した。

「うん、紫がこの辺の邪魔な草とか小石とかをスキマで除去してくれた。」

「サラッと言うな。」

横にいる紫がピースサインをしながらウィンクすると同時に紫幻の更なる突っ込みが。

「まあ……いいんじゃないか？やりたかったのは同じだろ？」

「……はあ。そうだな。よし、さっさと準備をするぞ。」

涼がなだめ、紫幻がやる気になってくれたところで、僕達は準備を始め、三分とかからずに準備を終わらせた。

「うん、じゃあ始めようか。僕と碧菜、涼と紫幻でいいよね？」

「ええ。頼むわよ、未奈斗。」

「おっし！やるぞ紫幻！」

「ああ。後ろは任せた。」

「じゃ、紫はそこで見ててね。…………じゃ、僕から行くよ。」

僕は紫に一言言つと、涼から送られてきたボールをキャッチし、真上に、高くトスアップした。

「せいっ!」

そして、思い切りラケットを振り下ろし、一年振りの試合が始まった。

紫 side

私は外の世界の競技だからと少し嘗めて見ていたのだが、見る間に少しずつこの競技に惹かれていった。

「ふーん…………なかなか面白そうじゃない…………」

そう呟くと同時に、遠くから四人を見ている人影があつたので、スキマで私の隣に送った。

「痛っ！」

「うー!？」

「何やってるのよ、あなた達……………」

どうやら、人影は霊夢とレミリアだったらしい。二人とも、背中から落とした為背中をさすっている。

「久し振りに外に出てみたら楽しそうな事してたから見ていたのよ。」

「

「久々に曇りだったから外に出てみたら涼がいたから見てたのよ。」

「二人とも暇だったのね……………」

私が溜め息をつくとき、どうやら終わったらしく、四人がこちらに歩いてきた。

「あれ、霊夢にレミリア。来てたの？」

「久し振りね、未奈斗。」

「私は良く会っけどね。でも初めて会う人もいるわね……………」

「初めまして。刻麗碧菜よ。」

「深見紫幻だ。よろしく頼む。」

「ええ。それよりも……………今、何をしていたの？」

レミリアが聞くと、涼が直ぐに答えた。

「これはテニスという競技です。レミリア様には一度話したことが有ったような気がします。霊夢が知らないと思うから説明しますね。勿論、紫にも。」

そういつて、私たちに向かって、涼が説明し始めた。これ、流行るかもしれないわね……………

番外編・いつの間にかPV50000越えてました〜元の世界の競技をしたい

未「更新遅い！短い！タイトル長すぎ！そして何で僕が壊れてるの！」

作「仕方ないんだ。本当に思いつか無かったんだ………本当に申し訳ない。」

未「今回も説明不足なところあるかもです。」

作「そして、番外編はまだまだ続きます！調査をまた戻して行きたいと思います。では、また次話で！」

番外編2 能力使っちゃ試合にならない (前書き)

短いです。ほんと申し訳ないです……

涼
s
i
d
e

番外編2 能力使っちゃ試合にならない

ようやくルール、打ち方、構え等を教え終わった俺は、とりあえず
霊夢とレミリア様に試合をやってみるように言った。まあ、出来な
いだろうと思いいながらだが。

「じゃあ、お手柔らかにね。」

「それはこっちの台詞よ……あんたは妖怪でこっちは人間なんだ
から……」

そういつて、霊夢はボールを受け取り、トスアップした……あれ
？何でそんなに高く上げてるの？そう思った瞬間、霊夢は飛び上が
り、ボールに近付いた所で、レミリア様のサービスエリアへと叩き
つけた。

「はあああっ！」

「うー！？」

「って待て待て待てええ！！能力使ってたら試合にならないだろう
がああ！」

この後、能力は使わない、霊力、妖力は移動だけ許可と決め、再ス
タートした。

「行くわよー！」

「ええ。」

霊夢からのサーブが、レミリア様のサービスエリアの真ん中……つまりセンターラインを捕らえた。これでレミリア様はやられた………と思った次の瞬間、レミリア様がバックハンドでそのサーブを霊夢と逆サイドの角へと正確に打ち返した。

「未奈斗………」

「涼、言わなくても………皆思ってるから………」

先程のボールを霊夢は回り込み、ストレートへ打ち込み、レミリア様が浮かせてしまったボールをすかさずスマッシュをレミリア様の逆サイドへ打ち込み、霊夢の点となった。

「なんで今日始めたばかりなのにこんなに上手いのよ………!？」

「………自信を無くしそうだ………」

そんな事を言っていると、霊夢のサーブに異変が現れた。先程よりも遅くなったかと思うと、ボールの形状が平べったくなっていた。

「え、あれ入るの?」

「嘘だろ………」

嫌な予感と共に、霊夢のサーブがサービスエリアに着地した瞬間、ボールがありえないスピードで右にバウンドした。

「嘘でしょ!？」

「……………幻想郷に広まると、凄いことになるな……………」

その後30分、霊夢とレミリア様の試合は続き、霊夢が勝利を勝ち取った。

「ふう……………いい汗かいたわ。」

「中々楽しいわね。これ、紅魔館の皆に広めるわね。……………パチエは無理だろうけど。」

「私も魔理沙や翠香達に広めておくわ。」

試合を終えた二人がこう言ったので、未奈斗はいろいろと纏めてあるテニス一式を指差して言った。

「じゃあ、このテニス一式を一つもらって行きなよ。僕達の方はまだまだあるしさ。」

「そうするわ。また神社に来た時にやるわよ。じゃ、もらっていくわよ。」

「涼、後で持って帰って来なさい。これは命令よ。」

「了解しました。」

霊夢とレミリア様はそう言って飛び去って行った。

「さて……私もちよつとやってみようかしら。ラケットとボールを少し貰って行くわ。」

「あんたはスキマで持ってこれるでしょうが……」

「まあいいだろ。紫、ほれ。」

俺はそう言いながら紫にラケット二本（前・後衛用一本ずつ）とボール二箱（一箱一ダース）を渡した。

「それじゃ、貰って行くわね。じゃ、また会いましょう。」

そう言つて、紫はスキマで消え去り、俺達四人が残された。

「……どうするんだ、この残りの物品……」

「……紫幻、悪い。スキマに入れといてくれ。」

「……これ以外解決法無いよな？
そう思いながら、この日は解散した。何だか、明日から大流行しそうな気が……」

番外編 2 ～能力使っちゃ試合にならない～（後書き）

作「完璧私の趣味でこんな話に……………って、涼？」

涼「……………あの後、テニス一式を持って帰ったら、皆が上手過ぎて……………」

作「……………うん、ドンマイ……………」

涼「……………で、次は？」

作「う、うん。次は色々な方向からのテニスの流行り具合です。」

涼「では、また次話で。」

番外編3 各地の流行り具合・神社編1 (前書き)

遅くなつてすいません……ちょっと本職(学校)で忙しかったです。

霊夢 side

番外編3 各地の流行り具合・神社編1

私は未奈斗たちに貰ったてにすという競技の一式を境内の一角に並べて、溜め息をついた。

「貰ったのは良いけれど……どこにたてようかしら。もう石畳の上にたてちゃおうかしら……」

そう呟いていると、空から猛スピードでこちらに突っ込んでくる影が見えたから、スペルで止めておく。

「いい加減突っ込んでくるのを止めなさい、夢符『二重結界』」

「のわあーっ!？」

硝子が割れるような音をさせながら、魔理沙が箒から落ちてきた。

「ガハッ……酷いんだぜ、霊夢……」

「あんた何回突っ込んできて神社の障子を破壊してると思ってるの？ 酷いときには賽銭箱破壊していったじゃない!」

「あれは不可抗力だぜ。それよりも、それは何なんだぜ?」

そう言って、私が散らかしていたてにす用具を指さしたので、答えておいた。

「未奈斗たちにもらったてにすっていう外の世界の競技に必要なものよ。」

「ふーん………それ、面白いのか？」

「かなりね。だから貰って来たんじゃない。」

そう言つて、支柱を石畳の両端に挿し、網を張った。

「なあ霊夢、私にもやらせてくれよ。」

「いいわよ。まずルールを教えるから中に入りなさい。」

そう言つて魔理沙を連れていこうとすると、ガサガサと後ろから聞こえたから見ると、そこにはいつぞやのロリ鬼と私が密かに世話になっている河童がいた。

「萃香、河童。そこで何してるのよ。」

「いやー、なかなか面白そうだから私も聞かせて貰いたいなーって思つてさ。」

「私も。それに、私には河城にとりつて名前があるから名前で呼んでよー。」

「はいはい。ま、とりあえず中に入りなさい。」

そう言つて、魔理沙と萃香、にとりを連れて中に入り、紙を広げて説明を始めた。

「まず、絶対に守らないといけないのは、能力を使わないこと。」

「それはなんでなんだ？」

「あんたは馬鹿？能力使っちゃったらレミリアの天下でしょうが。」

「……………納得だぜ。」

魔理沙が納得したところで、私は説明を再開した。

「あまりにも外のルールと同じだとつまらないから、妖力、霊力、魔力は移動にだけ使ってもいいわ。」

「うーん、ま、仕方ないね。」

「あんたは特にね。」

そう念を押し、私は基本的ルールの説明に入った。

少女説明中……………

「ふう、これで全部よ。わかったかしら？」

「何とか……………だぜ。」

「私も……………」

「ふああ……………とにかく、やってみようよ。習うより慣れろ、盟友の諺にあるよ。」

「そうね。じゃあ、一回外に出ましようか。」

そう言って私は三人を連れて外に出た。

「さあ、チーム分けは私と萃香、魔理沙とにとりでいいわね？」

「了解だぜ。これがラケットか？」

「ええ。さ、始めるわよ。」

そう言っつて、私はボールを魔理沙に渡し、構えた。

「萃香、前は任せたわよ。」

「任せろ霊夢ー！」

「にとり……一氣に片をつけるぜ！」

「そうだね、これも河童の技術に役立つかもだしね！」

そして、魔理沙がさーぶを打つために、ボールを上げ、さーぶを打ったと思った次の瞬間、私の真横をボールが通り過ぎようとしていた。

「なっ！？」

私は何とかボールを浮かして返すと、既ににとりが着球地点の真下まで潜り込んでいた。

「決まれっ！」

にとりからのすまっしゅが前にいた萃香の方向へと放たれ、私はやられた、と思った。しかし、

「にとりー、鬼をなめないでくれるかな？」

萃香はあろうことか、にとりのすまっしゅをそのまま空中で打ち返した。そしてそのまま魔理沙のこーとで二回跳ね、一点を先取した。

「むむ、萃香は危険だな。あんまり甘いボールだところちがやられるな。」

「みたいだね。」

「萃香、あのさーぶ、見えた？」

「バツチリ。あの位なら全然返せるよ。」

各々言いたいことを言い合つと、魔理沙がさーぶを放とうと位置についた。

「くらえ、だぜ！」

また私は見えなかったが、萃香は見えていたらしく、呆気なく魔理沙のさーぶをにとりの方向へ打ち返した。

しかし、にとりは読んでいたらしく、空中で私の方向へ返してきた。それを私は後ろにいるであろう魔理沙の方向へ返そうと狙うために魔理沙の方角を見た。

「なっ！？」

魔理沙もとりがいる中間地点に立ち、ぼれーを二人で狙っている状態になっていた。

私は焦って打ってしまい、緩く少し浮いたボールを魔理沙に打った。そのボールは魔理沙によって、私の方向の強烈な角度に打ち返され、私は追い付くことも出来ず、点を取られてしまった。

「なかなか……やるわね。魔理沙。」

「これはあんまり考えないだろ？」

私は魔理沙からボールを受け取り、さーぶ体勢に入った。

「私のこれは、取れるかしら？」

そういつて私は、あのかなり曲がるさーぶを打った。すると、魔理

沙は一気に前に出て、跳ねた瞬間を私に向かって打った。

「おらよ！」

「甘いよ魔理沙！」

魔理沙が返したボールは萃香によってにとりの方向へ打ち返されたが、にとりはそれをすぐにぼれーで萃香がいた方向に返され、また点を取られてしまった。

「やるじゃない……でも、まだこれからよ！」

そう言つて、私はさーぶ位置につき、さーぶを放った。

番外編3 各地の流行り具合・神社編1 (後書き)

作「えー……………初の主人公達が一切でない章です。」

霊「そうね。一応、sideは私だから私が話すわ。」

作「今回、霊夢達がサブ、スマッシュ等を話すとき、平仮名で書かれています。これは、霊夢達がちゃんと理解していないから、ですね。」

霊「馬鹿と言われてるようにしか聞こえないけど、確かにまだちゃんと理解していないわね。」

作「さあ、霊夢、萃香組対魔理沙、にとり組。どっちが勝つのか、次話をお楽しみに。」

霊「また次話で。みなさいよ?」

作「お分かりかと思いますが、このテニスシーンでは、二回でサブが交代していますが、思いつ切り変則ルールです。ご注意ください。では、また次話でお会いしましょう!」

番外編4 各地の流行り具合・神社編2 (前書き)

本格的にパクリ的になりました。ご注意ください。

霊夢 side

番外編4 各地の流行り具合・神社編2

「きまれっ!」

「まだまだ、甘いんだぜ霊夢!」

「そっちこそ甘いよ!」

「魔理沙、それ出るよ!」

にとりの声で魔理沙は打ちかけたボールを見逃し、ボールはこーとの外で跳ねた。

「あちゃあ……………ごめんよ霊夢。」

「いいのよ。私も決められなかったし……………」

あの後から、既に一時間は試合を続けている。点は共に六点。ここからは、二点連取した方が勝ちになる。そして今、私達は負ける一歩手前である。

「でも次は萃香、あんたのさーぶ……………点を取るなら今よ。」

「そうだね。」

そう言って、萃香はさーぶの位置につき、思いつ切りさーぶを打った。

「ぶっ飛ばえ！」

ボールがラケットに当たってから相手コートに入るまでの時間が短いだけではなく、魔理沙達曰く、重いらしい。

「ぐっ!？」

魔理沙が満足に打ち返せず、浮いたところを前についた萃香がすまっしゅを打って決めた。

「いいわよ！」

「これで、終わらせるよ！」

萃香のさーぶがにとりのこーとに突き刺さったが、にとりは魔理沙と同じ、跳ねた瞬間を打ち、浮かなくして返してきた。その先は、萃香が前に出て、がら空きになった場所だった。

「決まれ……………！」

「決めさせるわけないでしょ！」

私はそこへすぐに移動し、打ち返す準備をした。しかし、ボールが跳ねた瞬間、一気に速さが跳ね上がり、私の脇を通り過ぎていった。

「えっ……………?」

「よし！」

私は呆然としていたが、何とか持ち直し、魔理沙にボールを渡した。

「さあ…………反撃開始だぜ！」

魔理沙のさーぶは速い。でも、合わせれば跳ね返って行くので何とかなる。だが、その後が問題だ。

「霊夢、甘いボールは私らにやらない方がよいぜ？」

只返すだけだと、あの二人どちらからも鋭いボールが返ってくる。余りにも鋭い為、萃香に真ん中の線まで下がるように言っている。しかし、それでもまだボールは対処しきれない。そして、またにとりから私のぼっくはんど側にボールが飛び込んで来た。

「くっ…………、返れっ！」

そう思って私は思い切り下回転を掛けて打った。すると、あの二人の前に落ちようとし、二人は跳ねてから打とうとしていた。が、ボールが着地した瞬間、異変は起きた。

「なっ……………！？」

「嘘でしょ……………」

着地した瞬間、ボールは跳ねずに網の方向に戻ってきた。二人は驚愕の顔をし、私自身も驚いていた。

「良いじゃん、霊夢。さ、次で決めよう！」

「あ、ええ！」

まだ同点に持ち込んだただけなのに……………と思いながら、魔理沙のさ

ーぶを待った。

「くっ……………食らえええ！」

魔理沙はヤケになったのか、さっきよりも速いさーぶを打ってきたが、萃香には見えていたようだ。

「甘い、速いだけじゃ、私は抜けないよ！」

萃香の強烈なれしーぶがにとりの方向に打ち込まれ、にとりは返せず、点を取った。

「魔理沙、これで終わらせるわよ！」

「はっ、まだまだだぜ！」

私は魔理沙から受けとったボールを持ち、決めるために高く上げた。

「終わらせるわよ！」

「来い、霊夢！」

私は無理矢理下回転を思い切り掛け、さーぶを放った。

そして着地した時、ボールは逆方向、つまり私達に向かって跳ねた。

「くっ……………そおお！」

魔理沙の飛び込みも虚しく、ボールは網にかかり、私達の勝ちが決定した。

「楽しかったわね。」

「くっそー、後ちよつとだったのに……………霊夢、お前なんであんな球打てるんだよ。」

「やってみただけよ。私にとっては何であんたが萃香並の速さのさーぶが打てるのか知りたいわ。」

私達はとりあえず網とかをそのままにして、近くで寝転がっていた。

「にやははは。でも、にとりと魔理沙の二人で前に付くのは予想だになかったよ。」

「そりゃあ意表をつこうと思ったからね。」

私達が転がっていると、誰かがこつちに歩いて来る音がしたので、体を起こして見ると、そこには未奈斗がいた。

「あら、未奈斗。なかなか楽しいじゃない、これ。」

「それよりも何で霊夢が零〇ドロップ出来るのさ……………しかも魔理沙達はダブル前衛だし……………」

「???」

「あ、こつちの話。気にしないで。それよりも、誰か僕とやらない？」

そついつて来たので、私は立ち上がって言った。

「なら私がやるわ。ところで……………アリスは？一緒じゃないの？」

「あ、いるよ。アリスー。」

未奈斗が呼ぶと、アリスが出て……………ブフツ

「ちょ、アリス、何でそんな格好なの……………ククツ」

「し、知らないわよ！未奈斗に『公式戦ではこれを着るんだ』って言われて着せられたのよ！」

笑うのも無理はない。アリスの今の格好は、何だかシンプルなシャツに、とても短いスカートと、アリスにはあんまり似合わないものだったからだ。

「うう……………だからいやだったのに。」

「ごめんごめん。外の常識はここでは通用しなかったんだ……………」

しよげるアリスに、未奈斗が宥めていると、何だかムカツとしたので、さつさと試合をやれと催促した。

「はいはい、了解。じゃ、サーブはそつちからでいいよ。」

「わかったわ。」

そういつて私は、ボールを二つ取り、さーぶ位置に着いた。

「さあ……………いきなりやられないでよね！」

私は魔理沙との試合で最後に使ったものと同じさーぶを打った。さ、第二試合の始まりね！

番外編4 各地の流行り具合・神社編2 (後書き)

作「やっちゃったよ……………何処の部長の技だよアレ。」

霊「どれのことよ?。」

未「あの戻って来るドロップだよ。つか作者、本気で何やってんの。」

作「目茶苦茶反省してます。しかし後悔はしていない未「爆符『百裂爆珠』」スイマセンデシタアア!」

霊「はあ……………次はどこなのかしら?。」

未「僕と霊夢の試合フラグ立てておきながら、紅魔館に飛ぶらしいよ。」

霊「また出番が無くなるのね……………それじゃ、次もよろしく頼むわよ。」

未「また次話で会いましょう。……………僕と霊夢、出ないけど。」

番外編5 各地の流行り具合・紅魔館編（前書き）

作「漂流伝本格的復活開始ッ！」

涼「遅いわ！早くストーリーを進めろド阿呆ーッ！」

涼
Side

番外編5 各地の流行り具合・紅魔館編

「これで……………決めるっ！」

「甘いよ、お姉様っ！」

「……………」

「涼、どうしたの？」

「……………いえ、何でもありません……………」

今、俺の目の前ではつい二時間程前にテニスを教えたレミリア様とフラン様が、物凄い速さで打ち合っていた。

「フラン……………これが返せるかしら!？」

そう言った瞬間、レミリア様がいた場所……………コートの一審端っことで、レミリア様は思いつ切り横回転を掛けた。……………って、これは

……………

「す、すごい……………コートの横を通ってまた帰ってきた……………!」

「ボール回しを何で出来るんだレミリア様は……………」

美鈴が感動している傍ら、俺は自信喪失していた。というか美鈴。お前もスライスボールにドライブ回転を掛けて跳ねなくするとかし

てるんだからな？

「これは取れないで ツ！」

「甘いよ、お姉様ッ！」

レミリア様が打ったボール回しの着弾地点に、フラン様が直立していた。

「はああああっ！」

そして、鋭いボールがレミリア様の方向に放たれた。

「ふん、私の方向へ打ったのは間違いね！」

レミリア様は難無くそのボールに合わせた……………はずだった。

「があっ！？」

「なっ……………！？」

「妹様……………一体何を……………！？」

レミリア様のラケットが弾き飛ばされ、そのガットには穴が空いていた。

「……………どこの雷だよ……………」

「？涼、雷って？」

「……………こつちの話です……………」

多分、未奈斗なら分かってくれるだろう……………いや、未奈斗も今こんな状況か……………？

「うっ……………フランに勝てないよ涼お……………」

「ひたすら練習して上手くなるしか無いですよ。レミリア様は回転を操るのが得意みたいですから、何かそれを使った技でも考えてみたらどうですか？」

「……………うん、頑張る。」

フラン様に負けまくり（通算10敗目）、カリスマブレイク状態のレミリア様に的確にアドバイスする。……………ヤバい、これで某部長になったらどうしよう……………

「涼おー！フランとやろうよー！」

「やりますか？」

「うん！涼からのサーブで良いよ！」

「ふふっ……………行きますよ？」

そう言って、俺はラケットをもってコートに立った。

「行きますよ、フラン様っ！」

俺はトスの瞬間、前回転を掛けてサーブを打った。すると、フラン様のコートに入った瞬間、ボールが高く跳ねた。

「きゃああっ!?!」

フラン様はこんな跳ね方をするとは思わなかったようで、可愛い悲鳴を上げた。

「フラン様、俺のサーブの一つ、『天翔』、ですよ。」

「むう………」

フラン様は頬を膨らませながら、俺の方を向いた。

「次は取ってやる!」

そう言っつて、フラン様はいつもより少し下がった場所に立った。そう、このサーブは、落ちてくるところを打たれると弱いのだ。だが

……

「行きますよ。」

今度も前回転だが、質が違う回転を掛けながら打った。

「ふえっ!？」

コートに入ると、今回は急激に加速し、フラン様の真横を通過した。
「同じフォームから打たれると………分かりませんよね? 今のは『地走』ですよ。」

「むううゝ………!」

フラン様は、また頬を膨らませ、怒っているような態度を見せる。

「まあ………これ以外にもありますよ? 伊達に外で全国優勝してませんからね。」

「ぜんこくゆーしょー?」

「まあ………一番強いってことですよ。」

ほえー、と口を開けながらポカンとするフラン様に、俺は声を掛けた。

「さ、フラン様。続きますよ!」

「うん、こーいっ!」

元気な声を出して返事をするフラン様とテニスを再開し、俺がなぜかボコボコにされた。うん、あの副部長と同じ技使われて勝てる訳ねえわ。

番外編5 各地の流行り具合・紅魔館編（後書き）

作「いやあ、短いッ！リハビリ作にしても短すぎるッ！」

涼「分かってるならがんばれよ！……………いつになったら次の異変になるんだか。」

作「……………ん？何を言ってるんだ？番外編はここで終了だぞ？」

涼「……………は？」

作「次からは異変……………風神録突 入！」

涼「はああああッ！？」

作「では次回！未奈斗君達の活躍に期待ッ！」

涼「ちよつと待てえええっ！！！」

土着神異変

懐かしき神力（前書き）

作「中々のスピードで書き上げた！……割には少ないな。」

未「まあ、いつもこれくらいだったからね……」

作「とりあえず……どうぞ。」

テニスが幻想入り（半ば無理矢理）してきてから間もない秋の日、僕は不思議な噂を聞いた。

「妖怪の山に湖？」

「ええ、あの白黒が言ったんだから間違いないわね。」

「ふーん……………」

アリスが言い出したのは、湖が急に現れたということらしい。妖怪の山に一夜にして湖が現れた、言うことは神社も現れたはずだ。つまり……………」

「未奈斗、これ、何かの異変なの？」

「うーん、異変と言えるか分からないけど、一応外では異変扱いだね。それに……………」

僕は妖怪の山の方を向きながら、言った。

「僕の古い友人の巫女と神様が来たみたいだね。」

「？」

「邪魔するな八百万の神があっ!!」

「焼き芋にしてやるわよ!」

「だから今は妖怪の山に行かない方が良くから止めてるの!てか芋じゃないよ!」

妖怪の山を目指して出発した僕達は、いきなり秋穰子の妨害を受けていた。……まあ、流石に1ボス。そんなに強くない。

「くそお……なら!秋符『オータムスク』爆符『千連爆裂珠』!」
「魔符『アーティカルサクリフェイス』!」
「キャアアア……」

よし、先に進もうか。

少し進むと、山の麓で厄神、鍵山雛と出会い、原作を知っている僕はすぐに臨戦体制に入ったが、雛は僕達をみて考えると、頷いて言った。

「うん、あなた達なら大丈夫ね。私は山に通すよ。」

「ありがとう、雛。」

「でもいいの？貴女、一応妖怪の山を守る神でしょ？」

アリスがそう聞くと、雛は手を上げて言った。

「どこぞの鴉天狗をボコボコにする人達を止めれるとは思わないし、あなた達からは厄が見えないし。」

「まあ、アリスに厄があつたら僕が壊すけどね。」

「み、未奈斗お……………」

「……………ハア。」

なんで溜め息をつかれたんだろう……………

雛に道を開けてもらい、妖怪の山を進んでいると、何も無いところから弾幕が放たれ、少しばかり苛立って来た。

「本当に鬱陶しいわね……………未奈斗、何とかならない？」

「うーん…………アリス、探知魔法使える？」

「さっきから使ってるわよ…………あれ？」

アリスが少し首を傾げたかと思うと、次の瞬間、アリスは一つの点に狙いを定めた。

「見つけたわ！呪詛『蓬莱人形』！」

「うわわわっ！？」

アリスが放ったレーザーは、何かに悲鳴を上げさせながら貫いた。

「あーあ…………折角復活させた光学迷彩スーパージョン妖力消去版があ…………」

「名前長いね。」

「本当ね…………」

「反応それだけ！？…………まあ、機械を知ってる人は少ないか…………」

そういつて、緑を基調とした服を着た少女…………河城にとりは肩を落とした。

「ああ……………そういえばにとりって機械作れたんだよね……………」

「およ？その盟友はどうして私の名前を知ってるのかな？」

僕が呟くと、にとりは首を傾げて僕に聞いてきた。そういえば会うのは今日が初めてなんだ……

「ゴメンゴメン。僕は日向未奈斗。外人だよ。」

「ほうほう、この頃私を知ってる外人と良く会うねえ。河城にとり。河童だよ。よろしくな、盟友。」

「よろしく。にとり、この頃良く外人と会って言ったけど、どんな外人と会ったの？」

と、ふと思った事を聞いた。もしかしたら、早苗かも知れない。

「えーと、緑の髪をした巫女と、執事服を着た男と、大鎌持った無愛想な男、後目茶苦茶な電気使いの女だよ。」

「うん、誰か分かったよ。」

紫幻が大鎌を持っている事は知らなかったが。

「じゃあ、私達が一番遅かったみたいね。」

「だな。じゃあ、この山に出来た湖まで連れていってくれないかな？」

「お安いご用さ。」

そう言って、にとりは何か円盤状の何かを懷から取り出し、拡大させた。

「さ、乗りなよ！にとり様特製空飛ぶ円盤7号だよ！」

「自分で飛ぶからいいや」

「ほい、ここから進めば湖に着くよ。」

「ありがとう、にとり。」

「何かあったら魔法の森の人形館に来るといいわ。歓迎するわよ。」

「ん、気が向いたら行くよ。じゃあねー。」

案内を終えたにとりは、空飛ぶ（長いので省略）に乗って帰って行った。

「さて……着いた着いた。」

「ここが未奈斗の言ってた古い友人の住家？」

「そうだね、居るかどうかは分からないけど……」

僕達の目の前には、大きな鳥居と、その奥には微かに神力が漏れている本殿があった。

「さ、行こうか。」

「ええ。」

僕とアリスは手を強く握り合いながら本殿へと歩いて行った。

土着神異変

懐かしき神力（後書き）

作「穰子ファンの皆様、申し訳ない。」

未「流石に酷い扱いだよ……………」

作「まあ、次はリハビリの意味も兼ねて久々のバトルシーン入れるから許して下さい。」

未「穰子とのあれは何だったの!?!」

作「では、また次話で!」

未「逃げた!?!」

土着神異変

カミアソビ(前書き)

前書きのスタイルが変わっていたのでもとに戻す。
さあさあ、緑巫女が壊れますよ！

僕とアリスが本殿の目の前まで来ると、何やら中で争っているような物音が聞こえた。

「何やってるのかしら……………」

「多分だけど……………」

僕が言葉を発しかけた瞬間、本殿の扉が吹っ飛んで僕に…………

「壊れていないと言う概念を破壊いいい！！！」

僕はその扉の『壊れていない』という概念を破壊し、一瞬で扉を破壊した。

「本当にチートよね……………」

失礼な、僕はまだチートの域には入っていないはずだ。

「クククツ……………諏訪子、本格的に決着つけるかい……………」

「偶然だね神奈子……………私もそう思ったところだよ……………！」

扉が吹っ飛んできた方向を見ると、懐かしい二柱の神が神力だだ漏れで睨み合っていた。

「未奈斗……………あれが古い友人……………」

「うん………そういえば、よく喧嘩してたなあ………」

一番酷い時は御柱が新しく十本ほど刺さって………って、

「止めなきや僕達が死ぬよおお！？」

「ええええ！？どうするのよ！？」

うろたえるアリスを横目で見つつ、僕は焦りながら覚えて間もない魔法を行使する。

「くっ………！護壁『概念障壁』！」

僕とアリスを薄い白色の膜が包むと同時に、驚異的な数と密度と威力の弾幕がこの場所を暴れ回った。

「キャアアアア！！」

「つく、う………！」

ヤバイ、これは予想外だ。幻想郷に来てから間もないというのがこの威力。

「ハハハハッ！やっぱりあんたは最高だよ諏訪子おっ！」

「それはこっちの台詞だよ神奈子おっ！」

どうやらこの二柱はもう周りの事など分からなくなっているようで、バコバコ弾幕を打ち合っている。守矢神社が軽く破壊されてるよ…

……

「み、未奈斗！どうにかならないの！？」

「くっ……………僕だって、何とか出来たらやってる……………！」

どうやら、神の力は強力らしく、僕が行使している、概念を変質させた結界も後少しで破られる。

「あ……………ヤバ……………ッ！」

破られる。そう僕が思った瞬間だった。

「アハハハ！！……………あ……………」

「クククッ！！……………やば……………」

「……………諏訪子様？神奈子様？あれほど神社内で暴れないで下さいと『オハナシ』……………しましたよね？」

いきなり弾幕が消え、何事かと思って二柱の方を見ると、そこには懐かしき巫女装束を纏った……………鬼がいた。

「ね、ねえ……………あの巫女も古い友人……………？」

「う、うん……………けど……………あれは完全にキレちゃってるね……………」

僕はすぐさま結界に力を込め直すと、三人（一人＋二柱）の話を聞いた。

「ま、まて早苗！落ち着け！」

「そ、そうだよ！早苗まで暴れたら……………！」

「もう……………手遅れです……………秘術『グレイソーマタージ』。」

会話は直ぐに終了し、次の瞬間、星型弾幕がこの周囲を暴れ始めた。
何故か神二柱の弾幕より威力でかい。

「キャアアアア！！」

「早苗も周りを考えろおお！」

そう叫んだ瞬間、弾幕が消え、早苗がこちらを見た。

「ど……………どうした？早「黙っていて下さい」ハイ……………」

そう言うと、早苗はこちらを見て、話し掛けた。

「そこで結界を張っている人、解いてくれませんか？」

「……………解いて大丈夫？」

「大丈夫だと思うよ。」

僕がアリスに声を掛けてから結界を解くと、早苗に話し掛けた。

「久しぶりだね、早苗。」

「……………未奈斗なの？」

「うん、久し振りだね、早苗。」

僕がとっておきの笑顔を向けると、早苗が文字通り飛んできて、

「今までなんで連絡くれなかったの！」

蹴りが僕の顔面にめり込みました。

「未奈斗！未奈斗ー！？」

アリスの聲がしっかり聞こえると言うことは、まだ意識は保っているらしい。

「う、うん、大丈夫だよ……………」

何とか気をこちらに戻し、早苗としっかり目を合わせる。

「ふう……………とりあえず、これで許すから。」

「あ、そう……………」

「後……………久し振り。未奈斗達が私の未来を知ってたのは、こういうことだったんだね。」

「そういうこと。」

早苗には東方のことを教えてあり（勿論ゲームも使用）、この世界に來た時に対処出来るようにしておいた。特に巫女とか魔砲使い（誤字にあらず）には。

「ふう……………で、貴方はアリス・マーガトロイドさんですね。」

「ええ、そうよ。よければそちらの名前も教えてくれない？」

「あ、そうでした。私は東風谷早苗と言います。アリスさん、よろしく願います。」

「ええ。」

二人はしっかりと手を握って挨拶をしていた。一応、早苗にも話しておこうか。

「あ、後……………アリスと僕は、交際関係にあるから……………」

「ちょ、未奈斗っ!？」

「ええーっ!?!あの奥手な未奈斗がああーっ!?!」

「ちょ、そこまで驚かれるとショックだよ……………」

僕が肩を落としていると、後ろから声が掛かってきた。

「なんだい、彼女が出来たんならさっさと私らに紹介してくれよ。あんたは私達の子供みたいなもん何だからさ。」

「本当だよ。私達だって結構心配してたんだからね。」

「はは……………すみませんね、神奈子さん、諏訪子さん。」

僕の裏には、笑顔で僕の背中を叩いている神奈子さんと腰に手を当

てている諏訪子さんがいた。

「あ……………神奈子様、諏訪子様？まだ私の『オハナシ』は終わって
いませんよ？」

「ちょ、待つて待つ……………」

「も、もう少し再開の余韻を……………」

「未奈斗とアリスさんはまた今度来てください、今はこの二人に『
オハナシ』するのが先なので……………」

「うんわかった、アリス、いくよっ！」

「え、ええ！」

僕達は直ぐに守矢神社を離れ、魔法の森への帰路に着いた。

「「うぎゃあああ！！！」」

「僕は聞こえてない僕は聞こえてない僕は聞こえてない……………」

「早苗コワイ早苗コワイ早苗コワイ……………」

さ、帰ろう……………」

??? side

「アハハハ……もう限界。喜劇は楽しいけど……そこにその喜びをブチ壊す悲しみがあったらもっと、楽しいよね……」

暗い闇の中、何かが、動き始めた。

未「久し振りだなあ……………早苗がキレるの……………」

作「私的に、早苗がキレたら絶対怖いと思うんです。絶対許早苗。」

未「うん、だろーね。さてさて、僕はアリスの所に戻るよ。」

作「はいはい……………行つたみたいだな。さて、この東方漂流伝、次からがラストストーリーです。短いものでしたが、皆様の応援があつてここまで来れました。私が作る、ラストストーリー。最後までご堪能下さい！」

東方漂流伝 Lost the Memory of Lovers (前書き)

永い永い、一週間が始まる……

東方漂流伝 Lost the Memory of Lovers

あるはちやめちな神が引つ越してきた秋の幻想郷。楽園の巫女さんは友人の魔法使いと新しくきた緑の巫女さん、そして紅魔館のメイドと四人でお茶を飲んでいました。

「あゝ、平和だぜ……………」

「本当ですね。平和が一番です。」

「うちの館は毎日どこかで爆発が起こってるけどね……………」

「うちもロリ鬼が酒を呑みまくらなきゃ平和なんだけどね……………」

四人は、のんびりと何も無い、青い空を見上げて話していた。

「でも……………」

「?どうしたんだ、霊夢?」

「何か……………嫌な予感がする……………」

「ちょっと、やめてよ。あなたが言うど本当だに起こりそうなんだから……………」

「そうなんですか?……………つて、あれ、未奈斗じゃ無いですか?」

緑の巫女さんが鳥居の方をを指すと、一人の人間が、とてもあわてた様子で来ました。

「れ、靈夢！……みんないるのか。ちょうどいい、永遠亭に来てくれ！」

「いったいどうしたのよ？」

「緊急事態なんだ！頼む！話についてから！」

「……わかったわ。魔理沙、咲夜、早苗。行くわよ！」

「先に行ってるぜ、靈夢！」

「早く来なさいよ！」

「はい！」

「僕も先に行ってるよ！」

どうやら、平和は長くは続かないようです。

四人が永遠亭に到着すると、月の頭脳、永遠亭の薬師が出迎えた。

「来たわね……」

「永琳、緊急事態ってどういうこと？」

「……………ついて来たら分かるわ。」

そう言っつて永琳は中に入っつて行き、四人も後を追うと、永琳は、一つの襖を開けて、四人に入室を促しました。

「この中にいるのが、緊急事態なのよ。」

「……………何よ、アリス、フラン、鈴仙、閻魔じゃないの。」

楽園の巫女さんが中にいる人を見て、そういうと、中にいる宝石のような羽を持った小さい吸血鬼が口を開きました。

「……………お姉さん、誰？」

「はあ？フラン、あなたふざけるのもいい加減にしなさいよ？」

「フランって誰？」

「おいおい……………こいつぁ重症だぜ？」

「みたいね……………永琳、これはどういうこと？」

「……………説明するわ。簡単に言うと、記憶喪失、複雑に言うと、記憶強奪よ。」

そのことばに、楽園の巫女さんは真剣な顔をして聞きました。

「……………どういうことか、説明してくれないかしら？」

「…………ええ、聞いた話と、私が検証した結果を纏めた話をするわ。」

そう言って、永遠亭の薬師は静かに話し始めました。

「未奈斗ー、今大丈夫ー？」

「うん、今行くよー。」

僕はちよつとストップしかかっていた魔法薬開発を一旦打ち切り、アリスの元へ向かった。

「どうしたの？」

「あのね、実は暖を取るための薬草が切れちゃって……このままじゃ、冬を越せないから、採ってきて欲しいんだけど……」

「ん、わかった。じゃあ早速行ってくるよ。」

「ありがとう。じゃあ、帰って来たらお昼にしましょう。」

「うん、じゃ、行ってきます。」

僕はいつもの黒コートを着て、薬草が手に入る場所まで飛んだ。

「うー、もう寒くなってきたなあ……早く帰ろつ。」

薬草の手に入る場所まで着き、薬草を採取し始めた。

「お、こんな所に僕が欲しかった薬草も……………」

私的な理由も有りながら、薬草を採取し終わった、次の瞬間だった。

「……………あああああつ！！！！」

「！！？……………アリスの声っ！？」

僕は薬草を投げ出し、全速力でアリスの家まで戻ろうとすると、進行方向に、有り得ないものを見た。

「あれは……………僕？」

僕は僕と同じ姿をした人を見た。だけど、その顔はなんだか歪んでいた。

「~~~~~」

「……………ちょっと待ってくれないかな？」

僕が呼び止めると、僕と同じ姿をした人は、こちらを見て、笑いはじめた。

「あはははっ 本物の登場だね、日向未奈斗」

「……………何で僕の名前を知ってるのかな？」

「それは言えないよぉ〜？ま、早く帰った方がいいんじゃない？」

そう言つて、僕の姿をした人は、消えるようにいなくなった。

「ッ！待て！くそっ……………速く戻らないと……………！」

戻った時には、争った形跡が無い部屋の真ん中に、アリスが静かに倒れていた。

涼 side

「フラン様ー？どこにいらっしやるんですかー？」

俺は今日、一回も姿を見ていないフラン様を探していた。フラン様の事だ、ちょっと驚かしてやろうとも思っているのかも知れない。

「あら、涼。どうしたの？」

俺が歩き回っていると、今の仕事を終えたであろう美鈴と出会った。

「ああ、美鈴。フラン様を知らないか？今日は一度も見かけて居ないから……」

「そうなんですか？おかしいですね……妹様はもう起きていらっしやるはずですよ。妹様の部屋には行ってみましたか？」

「ああ。それでも、誰も居なかったよ。」

「うーん……後は……」

美鈴と俺が首を傾げていると、小悪魔が慌てて飛んできた。

「た、大変です、涼さん、美鈴さん！」

「どうしたの？そんなに慌てて。」

「元、妹様の部屋に行く道が何かによって封鎖されて居るんです！パチュリー様が魔法を撃つても跳ね返ってくるだけで……！！」

「美鈴！行くぞ！」

「ええ、急ぎましょう！」

俺と美鈴、そして小悪魔は急いでパチュリーのいる大図書館の奥地へと向かった。

少年少女移動中……

「はぁ……………はぁ……………っ！」

「パチユリー様あっ！」

俺達が大図書館に着いた時には、辺りの本棚は燃え尽きていたり、凍りついていたり、酷い状態になっていた。

「美鈴はパチユリー様の応急処置を！俺が破ってみる！」

「わかりました！」

美鈴が小悪魔が安全な所に移動させたパチユリー様の所に行くと、俺は倒れている本棚を踏み台にして、空中で剣に気と魔力を貯めた。

「気雨『フォースコール』！」

気と魔力が込められた雨状の弾幕が封鎖された扉に降り注ぐが、扉

の前に現れた半球体の壁が弾幕を全て正確に俺に跳ね返した。

「ちいっ！どこのリフレクだよ！」

帰ってきた弾幕を剣で切り裂き、地面に降り立った瞬間、扉に向かって走り出した。

「こうなりや物理だ！」

扉にたどり着くと、扉に何か紋様が刻まれていたのが見えたので、その紋様に向かって切り付けると、物理対策が無かったのか、扉が綺麗に切れてしまった。

「……………まあいいか。美鈴！先に行ってるぞ！」

俺が扉を抜けると、俺と同じ姿をした奴がそこにはいた。

「む、また本物かあ……………やり口が甘いのかなあ……………」

「誰だ、お前。」

「教える訳無いじゃん？彩華涼君　じゃあねー。」

「帰すと思ってるのか？」

「帰して貰うんじゃないくて、帰るの。私の能力でね。」

「させるか！」

俺が時を遅らせ、剣を奴に振り切った時には、奴はすでに消えていた。

「くそっ…………フラン様はっ!？」

俺は、弾かれた様に走り出した。

碧菜 side

「碧菜、少しは休んだら……………?」

「嫌よ、永琳。私は何としてもこの『電を司る程度の能力』を使いこなしたいのよ。」

私は、ここ数日間、私の能力である『電を司る程度の能力』について検証を重ねていた。

例えば、前もやった事があるが、自分の足と地面の間に強力な電磁力を発生させ、高速で移動する技。あれはどこまで加速するか。

他にも、相手の体内に電気を流し込むにはどうすればよいか、電波を使ったトラップ等、いろいろ試していると、いつの間にか一週間

経っていたらしい。

「…………でも、永琳の言う通りかもね。少し休もうかしら。」

「とりあえず、疲れを取る薬なら作っておいたから……………まあ、少しゆっくりしなさいな。」

私は庭から永琳がいる廊下まで歩き、廊下に腰を下ろした。

「にしても、貴女、物凄い集中力ね。」

「好きな事にだけ、よ。まあ……………好きじゃ無かったらこんな事しないわよ。」

「そうね。」

軽く微笑み合い、私は口を開いた。

「あ、そうだ。新しく探知技を考えたのだけど……………やってみても？」

「ええ。」

永琳からの許可をもらい、私は体から電気の糸を張り巡らせるようにイメージ、その電気の糸がキャッチする信号を私が変換する。

「……………永琳がそこにいて、てゐは竹林で罫作ってる。輝夜は……………自室でパソコンを弄ってる、で鈴仙は……………あれ、永琳。鈴仙は人里に行ってる？」

「いや、今日は部屋で勉強するって言ってたけど……………」

もう一度、今回は鈴仙の部屋の回りから発生させる。すると、鈴仙の他に、知らない奴の反応があった。

「ッ！永琳、侵入者！」

「わかったわ。うどんげの部屋ね。」

永琳は走って部屋に向かい、私もその後を探知をしたまま追った。

少女移動中……………

「碧菜、鈴仙と侵入者は動いてる？」

「動いてない。……………行くわよ。」

鈴仙の部屋の扉前に到着した私達は、扉を思い切り開き、中にいる

侵入者を睨みつけた。でも、私達は目を見開いて驚いた。そこには

.....

「私.....？」

私の姿をした奴が光り輝く球体を持って歪んだ笑みを浮かべていた。

「あはははっ、時間切れ もうっ、ちょっと早かったらねえ」

「あんた、誰よ。いや、誰でもいいわ。あんたは侵入者。それだけで十分よね？」

「話が分かるね、刻麗碧菜。だから、侵入者の私は今すぐ逃げさせてもらっよ。」

「私の事を忘れて無いかしら？」

永琳が、弓を構えて、逃げる姿勢をとった奴に向けていた。

「忘れてないよ、ただ.....何時でも逃げれるからね」

次の瞬間、奴は姿を一瞬にして眩ませた。奴がいた所には、電気が放たれており、私の電磁力の移動と同じ技だったことが分かる。

「チッ.....逃げられたわね。」

「仕方ないわね.....鈴仙は？」

「ここよ。気絶しているわ。」

永琳が鈴仙をいつの間にかこちらに運んできていた。私は息をつく
と、その時、鈴仙が目を開いた。

「鈴仙、大丈夫？」

私がそう聞くと、鈴仙は目を泳がせながら、衝撃の一言を言い放つ
た。

紫幻 side

「小野塚、寝るな。雷裁『インディグナイト・ジャッジメント』」

「きゃああー!？」

俺は日課になりつつある、居眠りしている小野塚を荒行で起こし、
その横に腰を下ろす。

「あゝ…………紫幻かい。あんたも真面目だねえ……………」

「お前みたいにバレやすくサボってはいないからだ。俺だってサボりたくなるときはある。」

「ふん、そうか……」

「お前も、四季に構って欲しいからそうやってるんじゃないのか？」

俺がサラッと言い放つと、小野塚は豪快に笑った。

「アツハハハハ！そりゃあ七十年位前はそうだったさ！でも今は、四季様とは信頼関係しか無いし、それ以上踏み込む気も無いよ。」

「そうか、ならば尚更質が悪い。」

「きゃんつ。」

俺は頭に拳骨を落としておいた。

「……………何だかこの頃、四季が俺に昔彼女はいたのかとか何か欲しいものがあるかとか聞いてくるんだが……………」

「朴念仁、初な四季様の気持ちくらいわかってやりな。」

今度は小野塚に拳骨を落とされた。

「何故俺が拳骨を受けなければならない。」

「あんたは少し女の気持ちを分かれ。四季様が不憫で仕方ないよ……」

「……………」

「ああ……………やってみるか。」

「そうさね。……………久し振りに、やるかい？」

そう言つて、小野塚はこちらを振り向きながら鎌をゆっくり構える。

「……………いいだろう、お手柔らかにな。」

俺も小野塚のものより一回り大きい鎌を構えた。

「さあ……………行くよっ！」

「ああ、こちらも行くぞっ！」

俺と小野塚の鎌が激突した。もの凄い衝撃波が彼岸全体に響き渡る。

「やるね、紫幻……………！」

「小野塚こそ……………っ！」

そう言つて、一度小野塚を弾き飛ばし、もう一度接近しようとした時だった。

「た、大変です、小町さん、紫幻さん！」

俺達を止めたのは、彼岸にいる警護の死神のひとりだった。

「どうしたんだい、無花果？そんなに慌てて。」

「し、四季様が……………四季様が……………っ！」

「ッ！行くよ、紫幻！」

「分かった……………！」

俺達は小野塚の能力で、直ぐさま四季のいる場所へと移動した。

「四季様っ！」

「四季！」

俺達が慌てて中に入ると、四季は普通に立っていた。

「何だ……………心配かけないくださいよ……………」

「本当だ……………」

だが、次の瞬間、俺達は言葉を失った。

「すみません……………あなたたちは、誰ですか？」

「どういう理由で、彼女達の記憶を奪ったのかは知らないわ。けれど、これは重大な異変。……………協「何を言ってるの？」……………どう

いうこと?」

薬師の言葉を遮って、楽園の巫女さんは他の三人と目配せをし、口を開いた。

「言われなくても、もう既に準備は完了よ?」

そこには、陰陽玉とお祓い棒を構えた楽園の巫女さん、小さな八卦炉を取り出し、手入れをしている魔法使い、ナイフを手に何本も握っているメイド長、現人神の力をもしだしている山の巫女さんが居ました。

「……………!ありがとう……………」

「礼を言ってる暇があったら、さっさと行動だぜ!」

「私も、行ってくるわ。」

「さあ……………行きますよっ!」

「永琳、貴女はここよ。怪我人がでるかもしれないからね。」

「……………分かったわ!」

そうして、五人は行動に入って行きました。

私は永遠亭で預かっている三人とうどんげを部屋で寝かせ、てゐに兎に指示を出すように言い、そのまま私の部屋へ向かっていた。目的は、昔に使うのを止めた、月の道具を取りに行くためだ。

「月の道具なんて……もう使わないと思っていただけだね……」

今回は、それほど警戒しなければならない。なぜなら、記憶を奪ったのは、四季映姫以外はその者に親しい者の姿をしていた。ここから考え出されるのは、自分や他人の記憶を奪え、更に使用できるのではないかと私は推測した。そうであるなら、かなり厄介である。

そうこう考えている内に、既に部屋までたどり着き、月の道具……私が月にいた頃に使っていた弓を取り出した。

「……私達を受け入れてくれた幻想郷を潰させはしない……！」

そう言った時だった。

「お師匠様！大変です！」

「どうしたの!？」

てゐがもの凄い勢いで私の部屋に入って来たので、私は柄にも合わず大声を出してしまった。

「さっき、兎達から連絡があつて、ここにももの凄い数の妖怪が迫っ

てるらしいです！」

「何ですって！？」

もうここを嗅ぎ付けたのか！？早過ぎる……………！

「チツ……………！てゐ！人里へ向かって慧音と妹紅を連れて来なさい！迅速かつ隠密に！」

「了解！」

てゐが今まで見たことが無いくらい素早く行動する。やはり、ここに長く住んでいたというキャリアがある。やる時はやる奴だ。

「さて、私は……………敵を食い止めますか。」

私が部屋を出ると、そこには真剣な顔をした姫様が立っていた。

「姫様……………」

「永琳、私も連れて行きなさい。いくら私や永琳が不死だと言っても、護り切るの一人では無理よ。」

「……………分かりました。姫様、行きますよ！」

「ええ、私達に喧嘩を売ったのを後悔させるわよ！」

少女移動中…………

「壯観ね……………」

「本当。ま、たかが烏合の衆。私達の相手じゃないわ。」

私達の目の前には、数百匹の大小様々な妖怪達がこちらに向かって
いるのが見えた。

「さあ、行くわよ永琳！」

「分かりました！」

私は弓を構え、姫様は豪華に飾られた一本の枝　蓬萊の玉の枝
を取り出し、逆手に構えて妖怪に近付いていった。

「多けりやいってもんじゃないわよ！」

蓬萊の玉の枝を持った姫様は迫り来る妖怪をすれ違い様に首を撥ね
る。永遠と須臾を操り、妖怪達の時間を長く、姫様の時間を短くし
ている為、妖怪達にとっては、氣付けば、死んでいた様に思えるの

だろう。

「永琳、後ろ！」

「言われずとも分かっていますよ。」

そういうと同時に、私は矢を真後ろに向かって突き出す。すると、私を後ろから襲おうとした一匹の狼型の妖怪が息絶えた。

「それにしても、数が多いわね……やっぱり頭を叩く？」

「私もそれに賛成です。姫様、私が行きますので、ここ足の止めをお願い出来ますか？」

「愚問ね。さ、行きなさい！」

私は、姫様の指示があった直後、ある程度の速さで妖怪達の隙間を縫って飛びはじめた。しかし、大量の妖怪達は、直ぐに私を包囲するように動き始めた。

「チッ………ときなさいよ！」

「なら私達の出番だな。」

「全くだ。」

私が叫んだ瞬間、包囲した妖怪達の半分が焰に焼かれ、半分が妖力と霊力が混じった弾幕により消え去った。

「お前らに手を貸すのは正直あんまりいい気はしないが、幻想郷の為だ、協力すてやるよ。」

「妹紅！……………何時も世話になっているからな。ここで恩を返さなければいつ返すというんだ？」

そこには、私がてゐに呼んで来させた、妹紅と慧音がいた。

「二人とも、助かったわ。」

「で、お前は頭を叩くんだろ？なら、私達が道を空けてやる。」

「私達はその後、護りに入る。存分にやってこい。」

「……………分かったわ。ありがとう、二人とも。」

「はっ、感謝してる位ならさっさとぶっ飛ばしてこい！」

「行くぞ！」

妹紅と慧音が、同時に大量の弾幕を放ち、私の進む道が出来上がった。

「行け！」

「ええ！」

私は最高速度でその道を進んで行った。とてつもない、嫌な予感をしながら……………

少女飛行中……

私が、開いた道を飛んでいくと、不意に大量にあつた妖怪の気配が無くなり、一つの大きな気配だけが感じられた。多分、頭だろう。

そう思つて、気配がした方向へ三十秒程飛んだ時、私は頭を見つけた。

「へえ……貴女だつたわけね。ここへ妖怪をけしかけたのは。」

「何故私と決め付けるんですか？他にもいるじゃないですか。」

「けしかけてない妖怪が殺気を漏らすとでも？」

「……まあ、ばれたものは仕方ないです。私は、あの方の手伝いをするだけ……」

「そう……なら、覚悟することね。大丈夫、後で拷問に掛けるから生かしはするわ。」

「あやややや。それはご勘弁願いたいですねえ！」

里に一番近い天狗 射命丸文が、歪んだ笑みを浮かべながら浮かんでいた。

「さあ、楽しませてくださいよ！」

「お前に楽しむ暇などないわ。一方的に鬨ってあげるわ。」

文は最初から物凄いスピードで私に近付き、扇子で切り裂こうとするが、私はその扇子を受け流し、がら空きになった横腹に靈力を込めた掌底を叩き付けた。

「ぐふっ……流石は永遠亭の薬師、強いですねえ。」

「お前と生きている年数が違いすぎる。それも分からなかったのか？」

「いえいえ、まだ想定内だということですよ！」

次の瞬間、文から禍禍しい妖力が発され、私は危険を感じてその場を離れた。

「とりあえず、肉片になってくださいねえっ！暴風『アヤカシカマイタチ』！」

先程まで私がいた場所に、無数の妖力のこもった鎌鼬が襲う。あのままあそこにいれば、間違いなく肉片になっていた。

「へえ、避けますか。」

「妖力だだ漏れよ。そんなものじゃ当たるわけないわ。」

そう一言忠告してから、私は文へと即座に近付く。さあ、反撃よ。

「まあ、吹き飛びなさい？薬撃『ニトログリセリン』。」

強力すぎる爆薬を、文の腹に思い切り叩き付ける。私は結界を張っているから大丈夫であろうが、文は大ダメージを受けたはずだ。

「がはっ……………まだ……………まだ……………！」

「いい加減堕ちなさい。」

まだ意識があるとは思わなかった為、少し驚きながら、直ぐさま真後ろに回り、首筋に手刀を放ち、意識を刈り取った。

「……………さあ、拷問の準備ね。」

妖怪達は、頭がやられたと知ると、一目散に逃げ出し、永遠亭の危機は免れた。

「本当、頭がないと何も出来ないのね……………ん？」

文の頭が淡く発光し、すぐに収まった。何だったのだろうか……………

「……………っ、こゝこゝは……………」

「お目覚めかしら？」

文が意識を取り戻した為、直ぐさま問いただす事にした。

「永琳さん、これは……………」

「お前に話す権利は無いわ。私の言うことだけに答えなさい。」

「ッ！」

殺気を込めて言うと、文は顔を恐怖に染めて首を上下に振った。

「お前の言っていた、あの人、とは誰だ？」

「あの人？そんな事言ったこ……………！！！！」

いきなり、文の様子が急変し、痙攣を起こしたように震え出した。

「あ……………ああ……………！これ……………私、が……………！？」

「文！？どうしたの？」

「嘘だ……嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だああー！」

文は頭を振って暴れ始め、辺りにあった薬品を何個も割ってしまう。

「チツ…………仕方ない！」

暴れる文を、また手刀で意識を刈り取り、今の行動について考えた。

「今のは…………本当に錯乱していたわね……………」

今のは、本当に何だったのだろうか…………まさか……………！

「いけない……………！妹紅！そこにいる！？」

「ああ、どうした？」

「すぐに霊夢達をここに連れ戻して！最悪のパターンよ……………！」

「っ！分かった！」

妹紅に話すと、私も連れ戻す為に動き始めた。お願い、間に合え…

……………！

「『記憶を操る程度の能力』なんて、強すぎる……………！」

「ここらに何かありそうなんですけどね……………」

私、東風谷早苗は妖怪の山へ来ている。何時もならすぐに通り過ぎる道も、今はゆっくりと進んでいる。観察をしている、と言ってもいいが、もう一つ理由がある。

「……………に、しても邪魔ですね、妖精達。」

と言いながら難無く霊力弾で一匹一匹撃ち落として行くが、こつ也多いと、何時か避けられなくなってくる。

「めんどくさいですね……………吹き飛ばしますか。」

そう言い、懐から札……………スペルカードを取り出した。

「奇跡『ミラクルフルーツ』」

その一発で、周りにいた妖精達は全て吹き飛んだ。……………だれですか？（笑）って言った人。

「にしても……………何も手掛かりが無いですね……………こんな時、皆さんがいれば……………」

「呼びましたか？」

私が名前を呼んだ瞬間、少しボロボロになった椀が現れた。

「あ、ちょうど良かったです。頼みたい事があるんです。」

「いや、今はここから逃げないと……………」

「何があつたんですか!？」

「山の頂上で、雷を操る女性が現れて……………何かを探しているようなんですが、近づくと暴れだして……………」

「……………まさか。」

私は、すぐに碧菜を頭に浮かべた。碧菜は、あんな性格でも、凄く仲間や家族への愛情が強い。今回の、鈴仙さんを始め、アリスさんやフランドールさん、映姫さんの記憶を奪われ、相当頭に来ているのだろう。

しかも、碧菜は、頭は回るが、すぐにカッとなつてしまい、周りが見えなくなる癖がある。多分、それが原因だろう。

「わかりました。私が止めに行つてきます。」

「む、無理ですよ!いくら早苗さんでも……………」

「大丈夫です、安心してください。」

心配してオロオロする栞に、ゆっくり話して、安心させ、私は頂上を目指して飛びはじめた。

「邪魔ですね……………！」

私は先程からもの凄い勢いで増えてきている妖精が放つ弾幕をグレイズしながら、どんなパターンなのかを頭に叩き込み、妖精に弾幕を当てて撃墜させる。

こんな所で、あっちでやったゲームが役に立つなんて……………

「夢にも思わなかった　　っ！」

呟いた瞬間、私に向かってとんでもなく速いレーザーが飛んで来た。何とか避けると、そこには白い羽を生やした女性がいた。

「ほう、先程のを避けるか。」

「……………貴女は。」

「ふむ、申し遅れたな。我は天狗の長、天魔を務めておる鞍馬^{くらま}華^か生^おだ。人間……………ではないな。現人神、名前は？」

「て、天魔！？」

これは本当に危ない。天魔の強さは、紫さんと同レベル、って未奈斗から聞いた事がある。……………戦いを避ける為にも、相手に不快にさせないようになければ。

「……………私は、東風谷早苗です。天魔様、私に何用でしょうか？」

神奈子様や諏訪子様に習った口調で、天魔様に話し掛ける。その口調が合っていたのか、天魔様は怒気を含むことなく、私の問いに答えてくれた。

「今、頂上へと向かっていたようだが、止めておいた方がいい。我が作った結界が僅か数秒で破壊する程の力の持ち主だ。」

それは、確実に碧菜の事を指している。碧菜には、理不尽な程の攻撃力と機動力がある。天魔様の結界が破られるのは余り気にしない。それに……………

「大丈夫です。あの子は、私の少ない友達なんです。友達を止めるは友達でしょう？」

そう、言い放つと、天魔様は大声で笑い始め、私に話し掛けた。

「成る程な！！面白い、実に面白いっ！！……………なら、その力、少し示して貰おうか。」

天魔様の周りが、急激に嵐で覆われ、私は、腹を括るしか無いことを悟った。

「……………行きますよ！」

「来い、現人神！」

私と天魔様の戦いが、始まった。

私は先手必勝と言わんばかりに、最初から密度が濃い弾幕を放つが、流石は天魔、簡単にはダメージを受けてくれない。

「ふむ……我はこのスペルカードと言うものが苦手だな。」

そういつた瞬間、私の弾幕が掻き消され、そこにはスペルカードを持った天魔様がいた。

「これ一枚で終了とさせていたくぞ！暴風『天魔様の風車』！」

「くっ！？」

私にもの凄い妖力が叩き付けられ、スペルカードに込められた霊力が霧散する。

「避け切れ、ということですか……………！」

「そういうことだ！」

その瞬間、私に向かって超密度の小型弾、大型円型弾、レーザーが吐き出された。

「くっ……………こっちは通常弾幕しか使えないわけね……………」

そう言いながら、私は三日月型の弾幕を天魔様へ向かって飛ばすが、

「甘いぞ、巫女？」

「なっ!？」

私の三日月型の弾幕が天魔様のレーザーに触れた瞬間、破壊され、新たな弾幕となって私に向かってきた。

「弾幕も駄目、なら………タイムアウトを目指す!」

先程破壊された弾幕を避け、超密度の弾幕の中に突っ込んだ。

華生 side

「ふん………口ほどにも無かったな。」

我はそう呟くと、弾幕の中に突っ込んで姿が見えなくなった現人神から目をそらし、山の頂上付近を見上げた。

「やはり、我が殺して止めるか……………」

そう言った瞬間、私の背後から声が聞こえた。

「そういえば……………ちゃんと自己紹介をしていませんでしたね。」

「なっ!?!」

そこには、弾幕に飲み込まれたはずの現人神が私の近くまでいた。

「私の名前は東風谷早苗……………能力は『奇跡を起こす程度の能力』です!」

我は、そのまま現人神……………早苗の弾幕をこの身に受けた。

早苗 side

「危なかった……………」

自分の能力を信じて、あの隙間の無い弾幕に飛び込んだときは、本当に自分の能力に感謝した。奇跡。本当にそう言わざるを得なかった。

「ふむ……………早苗、と言ったか？」

「はい。」

天魔様が話しかけてきたので、私は少し気を引き締めて返事をした。

「……………早苗の友人の事は、早苗に任せる。必ず、止めて見せよ……………」

「……………はい！」

そついい、会釈をしてから、私はもう一度、頂上目指して飛んでいた。

「……………これは。」

私が頂上付近にたどり着いたとき、目に飛びこんで来たのは、ボロボロになった草木と、焼き払われたような大地だった。

「……………碧菜。こんなに……………」

私は、言葉を失った。人は、こんなにも壊れるものなのか、そう思った。

「碧菜……………」

「……………誰よ？」

一つの高い声が聞こえ、その声の方向を向くと、そこには雷を纏い、槍を持った少女がいた。

外界の雷神 刻麗 碧菜。

「何よ。早苗じゃない……………」

「碧菜、とりあえず一旦落ち着いて、皆で話して考えようよ。そうじゃなきゃ、自爆するだけだよ！」

「五月蠅いわね。邪魔をしないで。」

「……………なら、力づくでも。」

「いいわよ。今の私に……………勝てるものならね……！」

その瞬間、雷が弾けた。

「そつちから売ってきた喧嘩だからね。手加減なんて無しで行くわよ！」

そういつた次の瞬間、スペカが碧菜の手に現れ、発動した。

「電砲『レールマシンガン』！」

光速。文字通り光の速さで放たれる機関銃は、ある程度のパターン性が有ると踏んで回避に専念した。

「お願い……………」

放たれる弾幕の中、たった一カ所、弾幕が通過しない点があった。そこは

「碧菜の目の前の直線上二メートル！」

私は勘に任せて光速の弾幕をかわし、その地点に到着した。

「ふん……………ならこれならどう？」

そついい、碧菜はもう一つスペカを取り出し、私に向けた。

「雷槍『ランス・オブ・ロンギヌス』！」

「ッ!!」

碧菜の目の前から超光速で雷の槍が私に向かって飛んでくる。私はそれを予測して横に飛んだため、私の頬を掠めただけで済んだが、軽く痺れが残った。

「さあ、どうするの?」

「くっ……………!」

私は持っている全ての知識をフル動員する。東方project……この幻想郷の物語を見てきた。今、使わなくてどうするの!?

「諦めないよ、碧菜……………!」

「へえ……………やってみなさいよ!」

碧菜が攻撃の手を緩めず、そう告げると、私はスペカを発動させた。

「神嵐『グレイソーストーム』ッ!!」

「ッ……………!くッ!」

私が放ったのは『グレイソーマタージ』と『神の風』を組み合わせたスペカ。今即興で作ったもの……………だけど、これは碧菜の苦の手スperl。つまり、碧菜はこれに意識をとられているはず!

「くっ、くそっ……………!!」

「終わりよ、碧菜………！」

碧菜の避けているところに、私は一撃

「『スカイサーペント』ッ！」

碧菜の体に、弾幕が直撃し、意識を刈り取った

「くっ！どきなさい！聞こえないの！？」

私は見慣れた廊下を走り、妹様の地下室へ向かっている。だが、妖精メイド達が私の行く手を阻む。

しかも、その目は焦点があっておらず、快楽を求めているようにも思えた。

「さ……………咲夜さ……………ん……………」

「ッ！！」

私が妖精メイドの相手をしていると、横から別の妖精メイドの声が聞こえた。その妖精メイドの目は、必死に自我を保とうとしているようにも見えた。

「どうした……………のっ！」

「いきなり……………ここに強、烈な……………狂気が……………っあああああ
っ！！」

「くっ、ありが、とう！」

自我が保てなくなったのか、この妖精メイドが襲い掛かって来たのを撃墜し、私は更に急いで妹様の地下室へ急いで行った。

少女移動中……………

「邪魔よ!!」

私は紅魔館の廊下を疾走しているが、紅魔館の中が狂気で充滿しているせいか、構造が変わってしまっており、分からなくなっている。

「それにしても……………お嬢様とパチュリー様を永遠亭に置いてきて正解ね……………こんな狂気の中にいたらお二方とももう狂気に吞まれているわね。」

私は人間だから何とも無い……………いや、多少はきているが、大丈夫な領域だ。

「……………！見えた、大図書館の入り口！」

私はその入り口を蹴破り、そこにいるであろう小悪魔を探した。

「小悪魔！いる！？」

そう叫んだように呼ぶと、本棚の間から、小悪魔がフラフラと現れた。

「小悪魔……………大丈夫？」

「咲……………夜さあ……………ん、たすけ……………てくださあい……………」

そこには、焦点が完全に外れている小悪魔の姿だった。

「こあ……………！」

「からだがあ……………ぞくぞくするんですう……………」

「ツー！！」

小悪魔はそういつて、鋭利になった爪を私に突き出してきた。

「誰かの体を切り裂くのがあ……………きもちいいんですうっ！！」

「小悪魔ツー！！」

抑制が利かなくなり、小悪魔は私に爪で切り裂いてきた。

「あはあっ……………咲夜さん……………」

「小悪魔……………、正気に戻りなさいっ！」

先程から小悪魔の爪での攻撃……………いや、もう斬撃と言ってもいい位の猛攻を受け続けており、その斬撃一つ一つが心臓や肺、内臓を狙っている。

「こんな時に能力が使えないなんて……………！」

私の能力も、小悪魔が何かしらの波長を出しているのか、妨害されて使えなくなっている。

「早くう……………やらせて下さいよお……………！」

「！？スペルカードッ！？」

小悪魔が叫んだのを見ると、右手に小悪魔が持っていないはずのスペルカードを持っており、発動した。

「風符『ブリーズシュトローム』！」

「なあ……………ッ！？」

忘れていた。この子は、あくまで小”悪魔”だ。パチュリー様と同等レベルの力を持っていてもおかしくは無い。

「早くう……………血を見せてえ……………くださいっ！！」

暴風、いや、暴風。強力すぎて、身を切り裂くような嵐が私を取り囲む。

「くっ……………時符『プライベートスクウェア』!」

時が止まる。嵐が私の周りで止まり、この間に嵐の中を抜け、小悪魔に向かってナイフを設置させる。

「そして、時は動きだ ツ!」

「咲夜さあんっ、そんなことしないでくださいよお!」

小悪魔が凍りついた時を振りほどき、私を切り裂いてきた。

「くっ……………どうしてっ!?!」

「あんなの……………悪魔の私にとっては解くのは容易いですよ!」

「流石は……………悪魔ってことね!」

この間に、嵐は爆散した。……………本気で殺す気ね、小悪魔は。

「ふふっ……………雷符『ヘル・ジャッジメント』オ……………ツ!」

瞬間、私の足元から黒い雷がほとばしり

「危ないッ!?!」

私が横に跳ねた瞬間、身を焼き尽くすような黒い雷が下から上へと立ち上った。

「まだまだですよっ！」

「くっ!？」

上に上った雷が空中で溜まり、そして、雨のように降り注いだ。

「サア……悲鳴ヲキカセテ下サイヨォッ……!!」

「くそっ……!？」

必死に避けている間、私は一つに雷の雨に掠ってしまった。

「あゝあああああっ!!!!」

「アハハハハハ!!ヤット聞カセテクレマシタネェッ!!」

「ぐっ、そおっ……」

私は、とてつもない痛みに耐えながら、他に策が無いか模索する。

「くそっ……」

「アハハハハ……」

小悪魔は、恍惚とした表情を浮かべている。私は、そこにしか隙がないと踏み、一気に接近した。

「銀符『シルバームーンレイ』!」

私の突き出したナイフから何本もレーザーが放たれ、小悪魔の体を貫き、意識を刈り取った。

「はあっ、はあっ……………」

私は、切れ切れになっている息を整え、気絶している小悪魔を机の上に寝かせた。

「強かった……………こんなので、大丈夫かしら……………？」

そう呟くと、今さっき机に寝かせたばかりの小悪魔が目を覚ました。

「あ……………咲夜さん……………」

「小悪魔、大丈夫？軽く本気で撃ったから……………」

「だ、大丈夫です。それより……………すみません。」

小悪魔は寝転んだ状態で、羽をぺたりと地面に着けながら謝罪した。

「私……………抑えられなくて。今は冷静なので大丈夫ですけど……………」

「そのことはもういいわ。今は、この状況を何とかしないと……………」

そう私が言うと、小悪魔は目の色を変えて話しはじめた。

「さ、咲夜さん！この狂気なんですが………涼さんなんです。」

「………なんですって？」

私は思わず聞き返した。これを、涼が？

「涼さんが紅魔館の地下を見に行った後、いきなりこの図書館に誰かが現れて………私は必死に止めましたが、突破されて、何とかしようと後を追うと………涼さんの頭に手を突き刺して、引き抜いた後、その侵入者は消えて………」

そこまで言うと、小悪魔は震え出した。

「涼さんが、いきなり強力な狂気を発して………それで、正気を失ってたんです。」

小悪魔は、そこまで言うと、脱力して机に身を任せた。

「今、涼さんは暴れています。咲夜さん、涼さんを止めてください………！」

「分かったわ。小悪魔、動けるなら、今すぐ門にいる美鈴をつれて永遠亭に行きなさい。お嬢様とパチュリー様がいるはずよ！」

「分かり、ました！」

小悪魔はフラフラと立ち上がると、直ぐに門へと飛んで行った。

「さあ、私ももう一仕事ね……………！」

私は、大図書館の奥にある、地下への扉を探した。

「ううね……………」

私の目の前には元、妹様の地下室へと続く扉がある。そこからは、私でも感じるこの出来る狂気があふれ出していた。

「覚悟決めて……………行くしかないわね。」

私は、その扉を蹴り飛ばし、地下室への階段を早く下りていった。

「なんでこんなところにも妖精メイドが紛れ込んだのよ……………！」

私が地下室への階段を下りていると、どこから紛れ込んだのか、妖精メイドの中でも強力な子達が階段に漂っていた。

「邪魔よ、どきなさい！銀符『スベカラズナイフ』！」

一瞬、時を止め、大量のナイフをバラバラに設置、発射して群がっていた妖精メイドを薙ぎ払った。

「まだいるの……………！？時符『リバースクロック』！」

私の回りから長針、短針、秒針を思わせるナイフが全方向に時計回りに発射され、殆どの妖精メイド達を撃墜した。そして、私の目の前に今は意味を成していない封印陣が描かれている扉が現れた。

「ここね！」

私はその扉をまた蹴り飛ばし、中を確認すると

「グ……………ア、アアア、アッ！！！」

狂気に呑み込まれた涼の姿が、そこにいた。

「涼ッ！聞こえてるの！？！」

「ア、ア……………咲、夜ザ……………ン……………ウ、アアア、アッ！！！」

「涼オッ！！！」

涼の叫び声が、戦いの火蓋を切るトリガーとなり、死合が始まった。

「ウゝアアアゝアッ！」

「くっ…………隙が、無いっ！」

涼は狂ったように……………実際、狂っているのだが、剣型の弾幕をあちらこちらに放出している。それが、考えていないようで、避ける事に意識を集中しなければ被弾し、そのまま切り裂かれるであろう弾幕になっている。

「グッ……………！彩倣『セネギネラ』ッ！」

「美鈴のスペルカード……………っ！」

涼が放ったのは、美鈴のスペルカードの模倣。練度は低いが、殆ど再現されたその完成度に少し尊敬する。が……………

「悪いけど……………感嘆してる暇は無いのよ！」

弾幕が涼に向かって一瞬だけ縮む、その瞬間に私は翔けた。

「時符『プライベートスクウェア』」

時を止め、おびただしい量のナイフを涼に向けて設置し、駄目押しで更に抜けて来るであろうコースに弾幕を設置する。

「そして、時は動き出す」

「ガアアアアアッ！！」

フラタニティを振り、前方に設置したナイフを薙ぎ払うと、私に向かって特攻を仕掛けて来た。しかし、私が既に設置していた弾幕が発動する。

「『発動』。」

真下からのレーザーが涼走る涼に向かうが、信じられない反射神経で横にズレて避ける。が、

「『第二波、発動』。」

今度はズレた先に全方位から弾幕が高速で飛んで来るが、涼はそれを身を屈めながら避け、また特攻してきた。

「くっ……………！？」

「アア、アアアッ！幻倣『殺人マリオネット』ッ！」

「！！！」

一瞬。一瞬で私の回りに大量の剣型弾幕が展開される。これは、私のスペルカードの模倣……………！

「けど、甘いのよ！こっやるのよ！」

連続で飛来する剣型弾幕を避けつつ、私はスペルカードを取り出す。

「本家を……………受け取りなさい！幻符『殺人ドール』！」

時がまた止まり、私に向かっていた剣型弾幕と、涼の動きが停止する。私はその間に涼の回りに何重にもナイフを投げ、涼の姿がナイフで見えなくなった頃

「そして、時は動き出す……………」

時間を解放した。

「ウゝアアアアゝアッ！！」

涼の叫ぶ声と、肉を切り裂く音が血だらけの地下室に木霊する。そして、涼の声が止まり、ナイフも消え去ると、そこには、執事服はボロボロになり、傷だらけで、今にも倒れそうな涼の姿があった。

「涼っ……………！」

「ウ……………咲夜……………さん……………一、回……………俺を……………ッ！！」

涼は頭を抱えながら、最後だと思われるスペルカードを発動させた。

「ウアアアアッ！！禁倣『ファイブ・オブ・アカインド』ッ！」

私の目の前には、涼の姿が五つ見える。しかし、涼の能力は『一度見たものがある程度模倣し、工夫して使用する程度の能力』のはずだ。なのに……………

「何で、強化されてるのよ……………っ！！」

これは、妹様のスペルカード、『フォーオブアカインド』の模倣の

はず。しかし、目の前にある五つの涼は、全てが弾幕を放って来るから、逃げ場が無いに等しい。

「くっ…………どうなっているのよ……………！」

一瞬だけ。そのことに気を逸らした瞬間だった。

「あ、ヤバ」

私の右腕に、弾幕が突き刺さる。すぐに来るであろう痛みには備え、気を張るが、痛みが来ない。

「まさか……………？」

それどころか、突き刺さったはずの弾幕は右腕をすり抜けている。そこで、すぐに分かった。

「本物以外は、幻影ね。」

私は霊力を解放し、その余波で全ての幻影を消滅させる。残るは、本物の涼だけだ。

「終わりよ、涼！『ミスディレクション』！」

私が放った弾幕は、涼の意識を一撃で刈り取っていった。

「っ、はあゝ。やっぱりなんか辛気臭いところだぜ、ここは。」

私は被害者の一人、閻魔の居場所である彼岸を調査しに来ている。多分、紫幻もここに来ているだろうから合流できれば儲けもの、という魂胆はあるんだがな。

「にしても……………他のところは鬱陶しい位に妖精がいたのに、ここには不気味な位いないのもおかしい話だぜ……………」

彼岸に突げ……………彼岸を訪れるまでは、妖精達が狂ったようにちよつかいを出してきたし、挙げ句の果てにはちよつとした下級妖怪まで邪魔をしてきた。

「これも、異変の影響かねえ……………早く親玉が出て来て欲しいもんだ、新技を試したくてしょうがない。」

……………少し不謹慎か？

「聞、い、て、ね、えええええ！……！」

とりあえず大声を出しながら超高密度、広範囲レーザーの発生源をいきなり飛び出してきた『数百匹の』妖精達のド真ん中に投げ込み、

「恋符『ノンディレクショナルレーザー』!!」

一気に殲滅。数百匹の妖精達を一瞬にして数匹まで減らし、私の目の前の道を開けさせた。

「撃ち漏らしたのが屈辱だぜ……………だが、止まっている暇は無いんだぜ!!」

私は一気に加速し、彼岸の先にある、四季映姫の仕事場の裁判所を目指した。

「ってか、紫幻はどこにいるんだぜ……………?」

少女飛行中……………

「よ、っと。やっとこさ到着だぜ。」

私は箒にブレーキをかけ、ようやく到着した裁判所を見上げた。

「絶対、ここに何かがあるんだぜ……………」

そう呟いて中に入ろうとすると、裁判所の中から一人の死神が現れた。

「お？誰だお前？」

「私は、四季様のいない間を任された無花果という死神です。」

「閻魔代理の死神ってか。で？私の行く道の邪魔をするのか？」

私がそう言って八卦炉を構えると、無花果は鎌を構えて言った。

「いえ、貴女が今のここに入って大丈夫か、試させてもらいます！」

次の瞬間、私はレーザーを放ち、無花果はそのレーザーを切り裂いて戦いが始まった。

「結構素早いな……………」

「貴女にだけは言われたくありませんよ、幻想郷トップクラスの速

さを持っている貴女にだけは。」

私と無花果はさつきと同じことの応酬　私が弾幕を放ち、無花果がその弾幕を避けるか切り裂く。何だか、全く進展のないやり取りに、私は痺れを切らした。

「ああもう、めんどくさいんだぜ！光撃『シュート・ザ・ムーン』！」

無花果の後ろにレーザー発生装置を設置し、私も黄色の小型弾幕を無花果に向かって放つ。この挟撃に、無花果も動きを見せた。

「ふむ……なかなかのスペルカード。しかも、まだまだ先を隠している。なら、見せて貰いますよ？」

そう言うと、無花果はレーザー発生装置を『後ろを見ないまま』破壊し、スペルカードを掲げた。

「んなっ！？色々と反則技じゃないのか！？」

「大丈夫ですよ、これも弾幕の一種ですから。始符『いにしえの死神』。」

スペルカードが発動し、私は来るであろう弾幕に備えて構えるが、一向に弾幕が現れない。

「どういう事なんだぜ……………？」

「ふふつ。昔は良く有ったんですよ？『肉体強化系スペルカード』は。」

「何時の話だよ！？明らかにスペルカードルール制定前だよな！？」

「旧式のスペルカードルールの時代ですよ。まあ、知らなくても当然ですね…………ざっと幻想郷が生まれる前ですかね？」

「…………もう良いぜ。」

私は溜息をつく、一つの事に気が付く。

「…………ん？『肉体強化系』？」

「そうですよ。さあ……………見せてあげますよ！」

その言葉と共に、明らかにスペルカード用に作られた訳では無いバラバラな弾幕が凄まじいスピードで放たれた。

「くっ、うお、んあっ！？何なんだこのデタラメな速さは！？」

「肉体強化して弾幕を放つ速さを上げ、さらに高速で移動してあらゆる方向からの射撃をしているんです。」

「ご丁寧、な説、明を、感謝するぜっ！」

そういい、私は未だに速さの衰えない大量の弾幕を避けつつける。服がチリチリと音を立て、もう既に相当な数グレイズしている事を物語っている。

「……………ほう、やりますね。流石は一度は四季様を退けた事のある魔法使いですね。」

「あの閻魔より、お前の方がよっぽど厄介だぜ……………」

大抵のスペルカードはパターンがあるのだが、このスペルカードはただの肉体強化。パターンなんてありやしない。故に、パターンを作るのが得意な私はこのタイプが嫌いだ。しかも、

「長い……………まだなのか？」

「ふふ……………そうですね、後5分は踊って貰いましょうか？」

「とことん規格外な代物だな、おい！……………だが、それはお断りだぜ！」

そういうと、私は自慢のスペルカードを二枚、取り出した。

「出し惜しみ、ゼロだぜ！！恋符『マスタースパーク』+恋心『ダブルスパーク』で……………！！」

これが私が編み出したスペルカードの奥義……………！！

「デュアルスペル
連結符『カルテットスパーク』！！」

私が二枚のスペルカードを前に突き出すと、私の目の前に四つのエネルギーの球が十字型に並び、その全てからマスタースパークが放たれた。勿論、星型弾幕のおまけつき。

「ほう……………二枚のスペルカードを同時使用し、威力を増大させる……………私が見たのは貴女で二人目です。」

無花果はそう言うと、カルテットスパークにもろに飲み込まれた。

「……………素晴らしいです。これなら今の裁判所に入っても大丈夫でしょう。」

「……………私の最大のスペカを受けて無傷の奴に言われても嬉しく無いぜ……………」

その後、無花果は私のカルテットスパークの全てを無傷でやり過ごし、私に裁判所への侵入（だったか？）許可を貰った。しかし、無花果みたいな一介の死神でも無傷か……………まだまだ改良の余地があるな。

「貴女に一つ言っておきます。」

「ん？何だぜ？」

無花果が真剣な顔で私に話し掛けて来たので、私も真剣に話を聞く態勢に入った。

「この中は、四季様がなくなったせいで相当なパニック状態にあります。私の権限で貴女の事を広めておきますが、頭に血が上り、侵入者と勘違いし、襲ってくる方々も居ると思われます。それをご了承くださいますよう。」

「了解だぜ。じゃ、行ってくるぜ！」

話を聞くと、私は箒に乗り、最大出力で裁判所の中に突入した。

「無花果の奴絶対伝えてねええええ！」

予想はしていたが、少し進んだだけで妖精達の洗礼を受けることになった。しかもまた数百匹の。

「とりあえずブツ飛ばすぜ！恋符『マスタースパーク』！！」

私の十八番のスペルカードを発動し、前方にいる妖精達を一掃する。

「んー、紫幻の奴と合流したいな……いたらの話だが。とりあえず、法廷まで行くか。」

そういい、第のスピードを上げようとした時、爆音が響き渡った。

「んなつ！？今のは？……こっちか！」

私は、爆音のした方向へと箒を最高速で飛ばした。

私が爆音を追い掛け、一つの部屋に入ると、そこはボロボロになった法廷だった。

「……………こいつぁ、魔法だな。残留魔力が漂ってるな……………」

私はそう分析し、辺りを見回すと、床に倒れている紫幻を見つけた。

「オイオイ……………紫幻をここまでボロボロにするなんて、洒落にならないぜ……………」

私がそう言っただけを見ると、そこには信じられない奴がいた。

「……………はっ、まさか、あの氷幻鏡異変の再来か？」

「……………何を言っている？」

彼岸の罪人看守

深見紫幻が、そこにいた。

宙に浮かんでいる偽紫幻（で、いいのか？）を見てみると、偽紫幻

が口を開いた。

「お前もその”素”の仲間か？」

「素って何だ、素って。こいつは人間の深見紫幻、そして私はその仲間だぜ！」

そういうと、即座にイリユージョンレーザーを展開、射出する。しかし、偽紫幻は避けるそぶりを見せず、

「ふん……………反射『リフレクション』」

自分の回りに膜を張り、私のレーザーがその膜に触れた瞬間、レーザーが跳ね返ってきた。

「ぬああっ？何だか見たことがあるような気がするぜ！」

私は軽く避け、偽紫幻に向かってミニ八卦炉を突き出した。

「ぶつとべー恋符『マスタースパーク』！！」

私の十八番のスペルカードを放つと、偽紫幻はようやく動きはじめた。

「……………今で戦意を失わせるつもりだったが……………」

「生憎、そんなやわな精神じゃないんでな。とりあえず、お前をボコボコにしてやるぜ！」

その言葉が、この戦いの火蓋を切って落とした。

「さて……………なら、こっちからも行かせて貰うぞ……………」

「へっ！私のパワーで潰してやるぜ！」

「戯れ事を……………氷符『アブソリュート』」

偽紫幻が一つ目のスペルカードを発動させると共に、偽紫幻の周りに大量の氷柱^{ひょうじ}が展開された。

「んなっ！？いきなりそんな大量かよ！」

「……………行け。」

偽紫幻の呼び掛けとともに、氷柱が射出された。

「よっ、とっ、のわっ！？……………危ないな、当たりかけたぜ……………」

私は少ししか開いていない、氷柱と氷柱の間を抜けつつ、マジックミサイルを偽紫幻に放つが、偽紫幻はそれを余裕でかわしやる。

「……………ふん、少しはやるようだな。」

「当たり前だぜ、私を誰だと思ってる。天下の霧雨魔理沙様だぜ？」

「……………なら、これも避けれるよな？」

そう言いながら、偽紫幻がスペルカードを掲げる。それと同時に氷柱が消え去り、その隙に私もスペルカードを二枚突き出した。

「食らえ、核符『テラフレア』！」

「私の火力にお前が泣いた、だぜ！黒魔『イベントホライズン』と魔空『アステロイドベルト』で、連結符『スプラッシュシューティング』！」

偽紫幻のスペルカードから物凄い熱量が発せられるが、私の突き出したスペルカードからは、その熱量を打ち破れるであろう程の魔力がほとばしる。

「なっ……………それはっ！？」

「さあ、大人しく消え去れっ！」

私が放ったのは、一つの巨大な弾丸。それは、偽紫幻の構えているスペルカードに直撃し、その瞬間

「その程度で紫幻の体を使ってるんじゃないぜ。紫幻なら、それを放たせないぜ？」

「きさ、まあ……………！」

爆ぜた。そう、それは爆発。熱や何かで出来る柔な物じゃなくて、魔力がそこを中心にして偽紫幻の体を切り裂くように。

「……………今回の異変、本気でヤバそうだな……………」

切り裂かれ、落ちていく偽紫幻を一瞥しながら、私は原形を留めていない法廷で、珍しく思案に耽った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3893n/>

東方漂流伝

2011年8月28日18時03分発行